

目の腐った青年はシンデレラ城に迷い込む

なめ！

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺ガイルとデレステのコラボSSです。俺ガイルキャラのアンチがあるため、苦手な方はブラウザバックをお勧めします。また作者には文才は無く、処女作である為、色々と間違えたりすると思います。その時は、ご指摘を頂けると嬉しいです。ご指摘を受けたら、なるべく早く直すつもりです。ですが、誹謗中傷のコメントは、控えて下さい。作者のメンタルが死んでしまいます。あと、作者は亀投稿です。週1ペースで出していきまごめんなさい2週間に1回です。無理でしたごめんなさい。そこら辺は不定期です。こんな作者ですが、どうぞ宜しくお願いします。あと、R15は念のためです。気にせず気軽に読んで下さい。

目次

20話	19話	18話	17話	16話	15話	14話	13話	12話	11話	10話	9話	8話	7話	6話	5話	4話	3話	1、2話 〈side奈緒〉	2話	1話	プロローグ 〈side奈緒〉	プロローグ
152	145	138	131	125	117	110	103	96	86	81	75	67	61	55	50	43	36	25	19	14	4	1

21話

番外編

シンデレラ・ストーリー

薄荷

167

161

プロローグ

修学旅行の一件の後、俺―比企谷八幡は担任の平塚先生に呼び出されあるプリントを渡された。恐る恐る、そのプリントを見る。

――そのプリントには、~~退学処分~~と書かれていた。

「すまない、比企谷。やはり文化祭の一件が響いた様だ。あれがインターネットに上げられててな。少し収集がつかなくなっているらしい。その為の学校の処分だそうだ。いろいろと手を打ってみたが、駄目だった。すまない……。」

先生は、とても申し訳なきように、そして悔しそうにそう言った。彼女の目元をよく見ると目尻に泣きあとが見えた。こんな俺の為に悲しんでくれたのだろうか？最後に俺は知らずの内にとってもいい先生に当たっていたようだ。本当に、なんでこの人結婚出来ないんだよ……。

「いえ、大丈夫です。自分でも自覚はありましたし、納得はしています。最後まで気にかけてくれて、ありがとうございます。さよなら。いい相手、見つかるといいですね。」

そう言って部屋を出ようとドアに手をかける。すると先生に呼び止められた。

「何ですか？」

「いや、これだけは言っておきたいと思っただけ。まあ、新しく飛び立つ生徒への応援みたいなものだ。」

先生は椅子から立ち上がり、俺の肩を掴むと、一呼吸置いて、

「頑張れ、比企谷。お前は私の自慢の生徒だ。これから辛い事悲しい事、あるかもしれない。けどどいつでもめげずに前を向け。そうすればもしかしたら、お前の欲しいものが手に入るかもしれない。」

本当。いい人すぎるよ。アンタは。

「ありがとう、ごさいます。……じゃ。」

「ああ。頑張れよ。比企谷。」

職員室から廊下に出て、帰路につく。この後どうしようか？などと考えながら夕陽のさす廊下を歩いていく。

『ごみいちゃんホントに最低だよ。もう顔も見たくない。早く消えてよ。』

『ツフ。ザマアねえなあアホ息子。じゃあな。もう二度帰って来んなよ。』

『アンタには失望したよ。そんな事してたなんてね。ホント、恥ずかしいよ。』

『やあゴミクズのヒキタ二君。俺達から逃げたご感想を聞こうじゃないか?』

『……あなたはまた逃げるのね。さよならゴミクス君。金輪際私の前に現れないで頂戴。』

『ごめん……ごめんね、ヒッキー……。』

学校を退学してから3日後。4日後だったつけ? まあ、どうでもいいや。

土砂降りの夜の東京、雨の為——今この時間帯が遅いこともあるだろう——人気は全く無い。そんな中俺は傘もささず、1人彷徨っていた。頭の中ではあいつらに言われた台詞が忘れようと思えば思う程呪いの様に脳内に反芻される。

俺はあの後退学処分の事を家族に話した。どうやら今まで俺がしてきた事が家族全員にバレた様で、親父に散々殴られた後、夜中まで罵られ続け、夜が明けた頃に家を追い出された。その後、学校にある私物を取りに行き、数人の知り合いに声をかけられた。戸塚や材木座。川崎の3人は俺のことを励ましてくれたが、他の奴らはまるでゴミを見るような目で俺を責め、嘲笑した。いや、1人、例外がいた。由比ヶ浜だ。彼女は俺が学校を出る直前に俺を止め、目元に涙を溜めながら謝ってきた。その時俺は、何故謝られたのか、何て声をかければいいのかわからなくて、何も言えずに逃げてしまった。しかし、彼女が言った言葉は、何故か、俺の胸に深く突き刺さった。あいつは、俺に何を伝えたかったんだろうか? 信頼していた家族の裏切りと、心の何

処かで信じていたあいつらからの言葉に、俺の心は簡単に、完全に折れた。

これから俺は、どうなるのだろうか。もう手持ちの金も使い切り一文無しだ。雨に濡れた身体は芯から冷え、意識は混濁し、全身が鉛の様に重い。行く当ても、帰る場所も無い。

……独りぼっちがこんなに辛いなんてな。

そう思い至り、フツと自嘲気味の笑みが漏れる。自分からぼっちだなんて言っただくせに、このザマだ。やっぱどうしようもないな、俺。

——このまま、死んじまうのかな——

……それも、いいのかもしれない。ここで死んで、もし転生でも出来るんだったら、今度こそ間違えずに、ちゃんとした人生を歩めるのかも知れない。そう思った瞬間、俺の視界がグニヤリと歪む。ぐらりと傾いた体を支えきれずにどさりと倒れこむ。身体が冷たい。動かない。どんとんと身体力が抜けていく。ハハツ。俺みたいな奴には相応しい最期かもな。ほぼ全てを諦め目を閉じていく。ただ、

……ただ、もしも最期に、願いが叶うのならば、次は~~本物~~本物を、見つけたい。嘘と欺瞞で塗り固められた、薄っぺらい物じゃなくて、歪でも、汚くてもいい。どんなに汚れても消えない、どんなに無残に引き裂かれても直ぐに治せるような、そんな本物を、俺は……

そんなことを想いながら、俺の意識は、闇に落ちた。

プロローグ 　　Side 奈緒

「なあ、2人ってき、気になる人っているのか？」

トライアドプリズムが結成されてから3回目のユニット練習での帰り、土砂降りの雨の中、3人で傘をさしながら歩いていると、あたし、私立総武高校2年生、神谷奈緒は、いつのまにか思いついた疑問を口に出していた。

——出してしまった。

「——あれ？あたしもしかして今……」

「えっ！なにになに!!?もしかして奈緒好きな人いるの!!?」

「へえ。それ、詳しく教えてよ。」

加蓮は爛々と目を輝かせながら食い気味に、凜は落ち着いた調子で興味深そうに、あたしに言葉を被せて聞いてきた。

「は、ははははあ!!?そそそそそんなわけ無いだろ!!?」

「ええー、あやしいー。」

「これは絶対なんかあるね。早く吐いた方が身の為だよ。奈緒。」

やっちゃまった。やっちゃまったよこれ……。こうなって仕舞えばもう止まらない。あたしが折れるまで問い詰め、それをネタに散々いじり倒すのだ。しかも加蓮の場合昔が昔の為、強く出れず、タチが悪い。それはもうこの前の2回で嫌という程わかったというのに、何をしてるんだあたしは。バーカバーカ！あたしのバーカ!!?」

「い、いや別に、好きってわけじゃ……」

「「ダウト」」

「いやホントだって。ちょっと気になるってだけで。」

「ふーん。で、なんで好きになったの？」

「いや好きじゃないって言ってるだろ!!?」

「じゃあ嫌いななの？」

「い、いや、別にそういう訳じゃ……」

なんだか恥ずかしくて声が尻すぼみになってしまった。

「んふふ、やっぱり奈緒は可愛いねー。」

「そうだね。奈緒は可愛いね。」

「なっ!??や、やめろよお!??」

またからかわれてしまった。一応あたしの方が年上なのに。うう……。

「まあそれは置いといて、その奈緒が気になってる人ってどんな人なの?」

凜が聞いてくる。

「ええー……。」

「わくわく!」

「ど、どきどき……」

「凜、無理しなくてもいいんだぞ。」

「ばっ!??べつ別に無理なんかしてないっ!!?」

「凜のそういうトコ、可愛いねー!」

「そうだな!凄く可愛かったぞ!」

よしっ!仕返し成功!いやあスッキリしたー!ついでにこれでも話してくれと……

「ま、まあそれは置いといて、吐いて貰おうか。奈緒。」

デスヨネー

……はあ。こうなっては仕方ない。大人しく白状しよう。

「うう……。わかったよ!話せばいいんだろ!でもその後にお前らにも話して貰うからな!!?」

「うんわかった。」

「りようかーい。」

ええ、いいのかよ……。ま、いいか。

「そ、そのだな、あたしがき、気になってるやつはな、同じ学校の同級生なんだがな?」

「ほうほう?」

「特徴とかはあるの?」

「んー。あ、最初はなんか吸血鬼みたいだなって思った。」

「吸血鬼?」

「え、なにに外国の人?」

「あ、いや、そういうわけじゃないんだ。ある作品の登場人物が吸血鬼

なんだけど、そいつとなんか特徴が似てるんだよ。」

「へえ。その特徴って?」

「んーと、まあまあ顔が整ってるところとアホ毛があること、あと目が腐……目つきが鋭いところかな?」

「今腐ってるって言いかけてなかった?」

「気のせいだ。」

「え、でも「気のせいだ。」……むー。」

あたしはそんなこと言っていない。言ってたとしてもあいつの目が悪い。

「ところで、その人はどんな人なの?」

「簡潔に言う超めんどくさい。」

「そ、そうなんだ。」

「ああ。ザ、高二病ってかんじだな。」

「こうにびよう?」

「どこが悪いの?」

「あ、いや、そういう訳じゃないんだ。思春期特有の病気だな、よく言う中二病の派生みたいなもんだ。どういう病気かはあとがきみろ。」

「最後の誰に言ってるの?」

「ごめんあたしもわかんない。」

「奈緒大丈夫?」

「ああ多分。ありがとう。」

「でも、そんなめんどくさい人なら何で気になり始めたの?」

「あー、最初は別にそんなんじゃないや無かったんだよ。」

「あたしがアイドルになる前なんだけどな? 偶々席が隣になったんだよ。最初は全然話さないし、こっちが話しかけても寝たふりとか聞いてないふりとかして反応しないし、正直嫌いだったんだよ。」

「お、おおう。」

「奈緒を無視するって凄いな。こんなに可愛いのに。」

「今可愛い関係無いだろ!?」

……ほん。まあとにかくその時は嫌いだったんだよ。だけどな? ある日の昼休みに、1人でプラプラ歩いてたらそいつが1人でいて

さ。その時はそのまま素通りしたんだけどさ、ちょうどあたしが通ったところでそいつがあたしのキーホルダー見てつぶやいたんだよ。「あ、フルボッコちゃん」って。いやーあれはびっくりした。マジで電流走った。」

「フルボッコちゃんって今人気のアニメだっけ？」

「ああ、そうだ。そこでそこから少しずつ話すようになってさ。そしてたら意外と面白いやつで、同じ話題を共有できるやつは初めてでさ。話せるのが嬉しくてほぼ毎日昼休みに話してたんだよ。」

「ほうほう。」

「それで話してる内に好きになったとか？」

「いや、話し始めてしばらくした頃にあたし階段から落ちたんだけど、そいつが身を呈して庇ってくれたんだよ。多分そこから。あとまだ気になるってだけで好きかどうかはわからないぞ。」

「おおー！ロマンチックだね！」

「うん。少女漫画みたい。」

うぐつ!!?そ、その例えは恥ずかしいからやめてくれ凜……!と、取り敢えず話変えないと!

「で、でもさ!!?何故かクラスの中では全然話さないし反応もしないんだよ。理由聞いても自分はぼっちだから云々って言うてよくわからないし。」

「うーん、なんでなのかな?」

「……あ。」

「どした加蓮?」

「アタシわかったかも。」

「え!!?」

「ホントか!!?」

「うん。その人は自分のことぼっちって言うてたんだよね?」

「ん?ああ。そうだけど?」

「ならきつとその人は奈緒を庇ってたんじゃないかな?」

「あたしを?」

「庇う?」

庇うつて何からだよ？

「うん。2人はスクールカーストっていうのはわかる？」

「うん。校内での発言力みたいなものだね。まあ、私はあんまり気にしないけどそういうのがあるのは知ってるよ。」

「まああたしも一応。」

「自分からぼちちって言うてるんだから言い方は悪いけど、きっとその人は友達がいなくて少しクラスから浮いてるんだと思う。」

思い出してみると確かに……

「まあそんな感じだったな。」

「でもそれがどうして教室で話さない理由になるの？」

「んとね？じゃあ2人はクラスの中で普段喋らないと思ってた人が目立つ人と話してたらどう思う？」

「んー、多分びつくりするんじゃないかな？」

あたしも同じ意見だったから頷く。

「それだけ？」

「それ以外になんかあるのか？」

「んー、まあ2人は可愛くていい子だからそうなるか。」

え、どういうことだよ？てか可愛い関係無いだろ。

「あのね、2人はアイドルになるほど可愛くて友達も多いでしょ？だから自然と学校の中心にいる人。つまりは校内カーストが高い人になってたの。そんな人と、みんな知らないような影の薄い人が仲良く話してると、他の人達は色々詮索とかしちゃうんだよ。特に女の子はね。だからきつと、その人は奈緒に変な噂がつくのを避けてくれたんじゃないかな？まだその時はアイドルじゃ無かったみたいだからから、後ろ盾も何も無いし、いじめ受ける可能性もあったかもしれないしね。」

あいつが、あたしを、助けてくれた……？

ヤバイ!!？なんかスッゲー嬉しい!!？……ハッ！早く、早く顔隠さねえと!?!?

あたしはバツと顔を隠したが、もう遅かった。2人はめっちゃニヤニヤしてる。

……殴りたい、この笑顔☆

「奈緒顔がにやけてる。嬉しかったんだ。」

「んふふー。すっかり恋する乙女ですなー。奈緒可愛いー!!?」

「なっ!!?ぐっ!……あ”あ”ああああああああ!!
?!!?」

「ちよっ!!?奈緒!電柱に頭ぶつけないでよ!!?怪我したらどうするの!!?」

「奈緒!!?どこ行くの!!?」

「ええいうるさいうるさい!!?あたしは帰らせて貰うツ!!?」

「凜!!?奈緒追うよ!」

「ガッテン!!?」

それからいろいろありまして

～閑話休題～

「もうやだ。しにたい。」

「元気出して。奈緒。」

「ごめんね、奈緒。まさかそこまでするとは思わなかった。」

もう死にたい。消えて無くなりたい。あ、今ならあたし、灰になつてどこまでも飛んでいける気がする。今いくよおばあちゃん。

「あ、奈緒が死んだ。」

「奈緒ー!!?クアアアアムバアアアツツク!!?」

「うるさいっ!!?耳元で叫ぶなあ!!?」

「あ、生き返った?」

「死んでねえよ!勝手に殺すな!!?」

「加蓮。キャラ崩れてたよ。」

「冷静だな!!?」

「あ、やっぱり?」

「気づいてたのかよ!!?」

やばい。この2人がボケすぎてめっちゃ疲れる。いい加減誰か止めてくれよ。じゃないと死ぬぞ。疲労と酸欠で。あと恥ずかしさで。

恥ずかしさで。

「ちよっど、もう、ケホ、ボケんの、やめて。これ以上は、ヴェツ、ちよと、っらい。」

「……大丈夫？」

「ごめん。ちよつとやりすぎた。」

素直に謝る2人。うーん、いつもはこんな感じでいい奴らなのになあ。

少し休憩して息を整える。

「よし！じゃあ次は凜に話して貰おうか！」

「え？何を？」

おい忘れんなよ。

「好きな人の話だよ。嫌だなんて言わせないぞ？」

ふっふっふっ。あたしはあんな目にあつたんだ。思いつきり恥ずかしがって貰おうか！

「あそつか。ごめんすっかり忘れてた。っていつてもさっきの奈緒み
たいな面白い話はないよ。だって人を異性として好きになつたこと
なんて一度もないし。」

……えー。

加蓮と一回顔を見合わせ、同時にツはああーと溜め息をつく。この時やれやれ。これだからこいつはつて感じの顔をするのがポイントな。

「なにその反応。」

「むー。凜つまんなーい。ぶーぶー。」

「ないわー。凜、それはないわー。」

「なっ!?？仕方ないじゃん！ホントに好きな人出来たことないんだからー！」

まあそれなら仕方ないか。

「じゃあ加蓮はあるか？」

「うん、あるよ！それも現在進行形で！」

「おお！」

「いつから好きになつたの？」

「それも含めて説明するね。」

そう言つて加蓮は話し始めた。

「去年の春に千葉の病院に検査入院することがあつてね？少し体調を

崩した日に、少し廊下を歩いてたら気分悪くなっちゃって。」

「大丈夫だったの？」

「うん。その時にアタシを助けて一緒に病室まで付き添ってくれた人がいたんだ。」

「もしかしてその人が？」

「うん。アタシの好きな人。」

「どうやらその後加蓮は毎日の様に、というか毎日その人と喋っていたらしい。そしてさりげないその人の優しさや、ふと見せる仕草に段々と惹かれていったらしい。まったく、どこの少女漫画だよ。」

「奈緒。それ、特大ブルーメラン刺さってるよ。」

「やめろ。ナチュラルに心読むな。」

「だって奈緒考えてること分かりやすいんだもん。可愛いし。」

「今は可愛い関係無いだろお!!? いい加減にしろよ作者あ!!?」

「奈緒メタい。あとメタい。」

「奈緒大丈夫? 電柱さっきのの件で頭がちよつとかわいそうなことになってない?」

「大丈夫だ。問題ない。」

「奈緒が……ボケに回った……!!?」

「衛生兵―! 衛生兵―!」

〜閑話休題〜

「まあアタシの話はこんな感じかな? あ、あと実はアタシがアイドルになったのは、夢だったっていうのもあったけど、その人に気づいて貰いたい、褒めてもらいたいっていうのもあったんだ。」

「なんかホントに少女漫画みたいだな!」

「うん。ちよつとだけ恥ずかしいけど。」

少し俯いて、耳まで赤くする加蓮。平静を装っていたが、相当恥ずかしかつたんだろう。でも彼女の口元は少し嬉しそうにはにかんでいる。

加蓮を見ながらニヤついていると、凜からある指摘が飛んで来た。

「ねえ、さつきから思ってたんだけどさ……」

「私達外でこんな話ししちやヤバイんじや……」

「……………あ。」

3人で急いで周りを確認する。運のいいことに1346の裏出入口に繋がるこの道の人通りが少ないのと土砂降りの雨だったのが良かったんだろう。あたし達3人以外、人は1人もいなかった。

……やべえ。ここ外だった。公衆の面前だった。ていうか自分がアイドルなの忘れてた。

「そ、そろそろ事務所だね!」

加蓮が強引に話しを変えた為、あたし達もそれに乗っかる。

「そ、そそそそうだな!そろそろ着くな!」

「あ、あー早く帰ってシャワー浴びたいな。」

最後の角を曲がる。ここを曲がれば、あとは50メートル程で裏出入口に着く。ふう。あと少しだな。いやー最近寒いからな。早く入ってあったま——

「ねえ。あれ、人倒れてない…………?」

「えっ!??」

奥を見てみると、20メートル程先に人が倒れてるのが見えた。

「ツ!!?2人共!行くぞツ!」

2人を急かしながらそこに向かって走る。着いたところで、驚愕した。

何日も着替えずに着ているのか、ボロボロに擦れて、雨を吸いグシヨグシヨになった総武高校の制服。何日か前に見た皮肉屋のそいつの顔は、これまでにない程、他の人には見せられない程、げっそりとやつれていた。知らない訳がない。だってコイツは……

「ハチ君……………?」

だってコイツは……あたしが……

「ひき……………がや……………?」

あたしが、今、気になっている人なのだから……。

1話

——何処にでもある様な少し洒落た通り。流れていく人混みの中、俺の視線の先には、賑やかな集団がいた。スーツを着た至って普通の青年（と言うには少しだけ目が腐っているが）を8人の美女美少女が取り囲んで、笑ったり恥ずかしがったり、それぞれが表情をコロコロと変えながら、楽しそうに話している。

その中には、最近になって、少し話すようになった少女、神谷奈緒もいる。彼女は確かアイドルだったから、他7人の少女達もアイドルなのだろう。

しかし、その中心にいる青年は、こう言っちゃ悪いが、あの少女達と、全く釣り合っていない気がする。彼は至って普通。いや、顔立ちを整っているのだが、目が全てを台無しにしている。面白い人柄なのかと思えば、そんなによく話すわけでもないし、偶に返答にキョドっている。あの顔面偏差値の高い集団から見れば、かなり異質だ。今も周りの男共から、殺意の視線が寄せられている。

しかし彼は、それに慣れているのか、周りの視線を気にしていない様子だった。そして彼はなんともない風を装いながらも、時折ふと微笑む。その目は腐っているが、その奥には何気無い、しかし他の誰も持っていない様な、強い優しさが灯っている。

彼のそんな表情に気付いた彼女達は、からかったり、ニヤニヤしたり、微笑んだり、にぱつと笑ったり、様々な反応を見せるが、全員の表情には一様に彼が笑顔を見せたことへの嬉しさが滲み出ている。そんな光景が、目の前で繰り広げられている。

ああ、きつとこれは、夢なんだろう。でなければ、こんな優しく、微笑ましいモノは、俺には見られる筈がない。

段々と視界が白く染まって来た。見えなくなっていく視界の中、俺は、最後に少しばかりの安らぎを与えてくれた夢に感謝し、目を閉じる——

「……………ん……」

意識が覚醒する。目の前には家のものでも病院のものでもない、見

慣れない天井が広がっていた。これが所謂、知らない天井だ……なのだろうか？

何だかとても心の安らぐ夢を見た気がする。まあ取り敢えず、今その夢の話は置いてこう。体を起こして……ぱきりと、肩から何かが落ちた。下を向くと、腰から下に毛布が掛けられていた。きつと俺が起きるまでは肩まで掛かってたのだろう。誰かがかけてくれたのだろうか？

気を取り直し、周りを見渡す為にまず右を向く。真横の俺から少し離れたところに、姿見用の鏡が置いてあった。その鏡には、見あきてしまう程何度も見た自分の顔が写っていた。その顔は最後に見た時より幾らかやつれて見える。

「——俺は、死ねなかつたのか。」

自分のやつれた顔を見て、何よりも先にそんな思考が頭に浮かぶ。自然と口から出た言葉と一緒に、自分への嘲笑が漏れる。死ぬことから出来ない自分に、ほとほと嫌気がさす。

『ゴトン……ガチャッ』

俺の目の前にあるドアの向こうから物音がしたと思うと、何処か別のドアが開かれる音がする。誰だったのかは気になるところだが、それを追う気力は、今は無い。

今度は首を左に回す。そこには、木製のイスに座り、机に突っ伏しながら眠る女性がいた。ボブカットの緑がかった黒髪。スラリとしたシルエツトは、机に突っ伏した体制でもスタイルの良さがわかる。顔のパーツはこれ以上ない程整っていて、さながら精巧な人形の様だ。その彼女の顔には見覚えがあった。と言っても、話した事なんてないが。何せ俺は、この人のファンなのだ。

高垣楓。現在での346の頂点に立つ、誰もが認めるトップアイドル。彼女の美貌は、見た者をたちまちに魅了し、その歌は、聞いた者のココロを震わせる。

俺が彼女のファンになったのは、彼女がまだ人気の無い、灰かぶりだった頃、自宅の最寄り駅から少し離れた広場で、彼女は歌っていた。あの時本を買いに来ていた俺は、彼女を見て、彼女の歌って踊るその

姿に、自然と足を止めていた。

俺以外は目もくれず通り過ぎていく中、彼女は、笑みを終始絶やさなかった。気がついたらいつのまにか、ライブは終わっていた。彼女の歌に、踊りに、そして笑顔に目を離せなかった。

そして彼女は最後に、その日1番の笑みを浮かべて、たった1人の観客に向けて、「ありがとうございます！」と、大声でそう言った。あの時の彼女の笑顔は今でも脳裏に焼き付いている。

彼女はもうこんな腐り目のことなど、覚えて無いだろう。だから俺は、彼女に出来た最初期のファンとして、彼女を応援していた。彼女には何度も助けられた。どんなに辛い時だって、どんなに悲しい時だって、彼女の姿を見ていると、彼女の歌を聴いていると、ココロの何処かがふわりと温かくなり、まだ彼女を見たい、また次も頑張ろう、と思えるのだ。

んで、その高垣楓が今俺の目の前にいるのだが。喜びや驚きよりも先に、困惑してしまう。

「すうーはああー」

深呼吸をした後、取り敢えず、タオル掛けに掛けてあったタオルケットを濡れてないか確認してから、彼女の肩に掛ける。身体が冷えたら大変だ。掛け終えたところで、ある考えに思い至った。

「あ、そっか。これ夢か。」

成る程。夢だったら合点がいく。こんな場所俺は見たことも無いし、今ここにいる彼女だってきつと俺の会いたいという気持ちが創り出した産物だ。そうじゃなきゃ今やトップアイドルである彼女がこんなところにいる訳がない。

でも、夢の中で夢を見るって何気に凄い事してんな、俺。こんな変なことなかなか「夢じゃ、無いですよ。」な……い……。

そう言うと、彼女はむくりと起き上がり、ふあ、と可愛い欠伸をした後、背筋を伸ばして凝った身体をほぐした。そこで先程掛けたタオルケットに気付いたのか、ふわりと笑って「掛けてくれたんですね。ありがとうございます。」と言った。その後椅子に座り直し、姿勢を直す高垣さん。蒼と翠のオツドアイが、俺を真っ直ぐに見据える。

「夢じゃ無いですよ。あなたはこの346プロダクションの裏口付近で倒れていて、それを見つけた奈緒ちゃん達がここへ運んだんです。」
奈緒ちゃん……ああ。神谷か。また会えたらお礼、しなくちゃな……。まあ、会えたら、だけど。ていうか、ここ346プロダクションなのか。通りで高垣さんがいるわけだ。

「あ、えっと、奈緒ちゃんは……」

「ああ。大丈夫です。高校が同じで知ってます。」

「そうですか。……成る程。だから……」

後の方が小さすぎて分かんなかったが、まあいいか。

「では俺はこの辺で。ありがとうございました。長居してしまっただけに何も返せるものがなくてすいません。あと、神谷にありがとうと伝えておいてくれると嬉しいです。」

「えっ!?」

何故か驚く高垣さん。別に変なことは言っていないと思うんだが。部屋を出るべくドアノブに手を掛けると、服を引っ張られる感覚を感じた。振り返ると高垣さんが制服の袖を引っ張っていた。俺の身長は高垣さんより5センチ程高く、そうすると自然と高垣さんが上目遣いをするかんじになってしまう訳で……

「あの……もう、帰っちゃうんですか……?」

ああ。ここが楽園^{エデン}か。

ここで俺がオーバーだと言う人は考えて見てほしい。絶世の美女が少し悲しい表情＋涙目＋上目遣いで「もう帰っちゃうんですか」だ。可愛くないわけが訳が無いだろう。更に言う俺はこの人の大ファンだ。これで嬉しく無かったら人じゃ無い。ズルすぎる。こんなチートやチーターや!!?

「あの……」

どうやら少し考え込みすぎていたようだ。高垣さんが少し不安そうな顔をしている。

「あ、しゅいません。らいじょうぶれしゅ。」

「……」

「……」

2話

『グツグツ』

『カチャカチャ』

調理器具と食材から出る小気味いい音と一緒に、高垣さんの綺麗な鼻歌が、向こうのキッチンから聞こえてくる。

『サク、サク、』

『トポトポ、トポン』

いきなりだが、今、俺は、

『グツグツ』

今俺は猛烈に

「出来ましたよ比企谷君！どうぞ食べて下さい！」

全国の高垣楓ファンに謝りたい！

回想

『あなたの顔を見てると最近ちゃんとした食事をしてないことが丸わかりです。あなたには今日ちゃんとしたご飯を食べて貰います！』

と言われた俺は、流石にこんなに迷惑をかけておいてタダ飯を御馳走になる、なんてことは申し訳なさ過ぎて、断った。断ったのだが、『なら勝手にします。どうしても比企谷君が食べたくないのなら私が食べるので。』

と言ってきた。俺はここまで言われて断られる程強い神経など持ち合わせて無いために、しぶしぶ了解した。てか高垣さん2人分の朝食食うのか。意外に食べるんだな。

いくら年が上で、金を持っているとしても女性に全部払わせるのは男としていいのだろうか。というか、とても申し訳ない。

この状態で外に出るのは流石にまずいので、シャワーと着替えを借り、着替えた。本当に申し訳ない。

けれどいつまでたっても高垣さんは外に出ず、いそいそと何かを準備していた。

『えっと、すいません。いつ外出るんですか？』というか、何やってるん

ですか?』

『?外には出ませんよ?』

『えっ』

『朝ごはんの準備をしてるんです。ふふっ。やっぱりお腹空いてたんですね。今から作りますので少し待ってて下さいね。』

回想終了

見たいなことがあつて今高垣さんにご飯を運ばれてきてます。高垣楓ファンの皆さん、ごめんなさい。マジごめんなさい。あ、あと高垣さんのエプロン姿マジやばかったす。何がって?もう全てが。

「高垣家特製卵粥です。出来たてなのでふーふーしてから食べて下さいね!」

そう言われてごとりと、と置かれたのは、1人用の土鍋だった。蒸気口からは湯気と一緒に米の香りが漂ってくる。

だがいざ食べるとなると躊躇ってしまう。俺なんか食べてしまつていいんだろうか。

「どうしました?も、もしかして卵アレルギーでしたか?」

なかなか手を付けないでいると高垣さんが心配そうに声を掛けてきた。

「あ、いや、そういう訳じゃないんですけど……。ただ、俺なんか食べにくいのかなって。」

そう言うと、高垣さんはぶくつと頬を膨らませる。可愛い。

「比企谷君はおばかです。」

「へ?」

「私が比企谷君の為に作ったのに比企谷君が食べちゃダメなんてことある訳ないじゃないですか。」

「いや、確かにそうですねけど。」

「だったら食べて下さい。」

そういう問題じゃないんだよなあ。

「いつまでも渋つてると無理矢理食べさせますよ!」

高垣さんはそう言うと、土鍋の蓋を開けた。米の優しい香りが鼻をくすぐる。

すると高垣さんは持っていたスプーンで卵粥を掬ってこちらに向けてきた。

「……何やってるんですか。」

「見ればわかるでしょう。あーんです。溢れちゃうので早く食べて下さい。」

「分かりました！食べます！食べますからあーんはやめて下さいっ？！」

「そんなに私にあーんされるの嫌なんですか……？」

高垣さんが少ししよんぼりする。あと小声で言ってるけど聞こえてます高垣さん。いや、違うから。あーんされる恥ずかしさと全国の高垣楓ファンへの申し訳なさからだから。普通こんな美人にあーんされるとか昇天もんだから。」

「え、えつとその、流石にいきなり言われると、心の準備が……」

何故か突然高垣さんの顔が赤くなる。な、何かそんなに怒ることがあつたっけか……？

「と、取り敢えず食べて下さいー！」

「は、はい。じゃあ、い、いただきます……。」

スプーンでお粥を掬い、口に運ぶ。

「……………美味え。」

このお粥はすごく、すごく、美味しかった。お粥自体に何かあつと驚かせるような、斬新な工夫がある訳では無いし、高垣さんの料理の腕が特別に上手いわけでもない。至って普通の卵粥だ。しかし、普通のはずのこのお粥は、何故か、今迄食べたことがない程、美味しかった。もう一口、もう一口と食べていく。昨日から殆ど何も食べてないからか、胸の辺りがキュツと痛むが、お粥を掬うスプーンが止まらない。一人前の朝ごはんにしては結構な量があつたお粥は、一瞬で無くなっていった。空になった鍋を机に置く。

「御馳走さまでした。」

何故か、声が震えた。

「はい。お粗末さまです。あと、これ。」

そう言うとき高垣さんはスツと手を差し出す。その手には薄緑色の綺麗なハンカチがあった。差し出された意図が分ならず、少し戸惑う。

「えっと、これは？」

また声が震えた。

「比企谷君……。」

顔を上げると、真剣な顔をした高垣さんがいた。

「貴方、泣いていますよ……。」

「……………え？」

いや、そんな筈ない。涙が出たなら直ぐに気づく筈だし、第一手作りの料理食って、泣くだなんて、そんな漫画みたいな事、あるわけ、ない。確認する為に、目元を拭う。拭った手の甲は、濡れていた。

「あ、れ……？おかしいな？泣い、てる……？」

拭っても、拭っても、涙は、止まらなかった。

「大丈夫。泣いても、いいんですよ。」

それだけ言うと、高垣さんはそつと俺を抱いて、溢れる涙を、拭いてくれた。その抱擁は、とても優しく、暖かった。

抱き締められた俺は、思いつきり、泣いた。みつともなく、子供の様に、大声で。さつきまで茶化して誤魔化していた感情はあつさりと表に引きずり出された。止めようとしても、とめどなく溢れてくる感情の波に吞まれ、止めることが、出来なかった。

どれ程の時間、泣いただろうか……？何分？何十分？何時間？時間を忘れて泣いた為、どれ程泣いたかが分からない。

「もう、大丈夫ですか？」

高垣さんは俺が泣いている間、ずっと抱きしめてくれていた。その優しい温もりは、とても名残惜しいが、仕方がない。

「はい。ありがとうございます。」

ゆつくりと、丁寧に敬礼を言う。

「それと、すみません。抱きしめて貰ったから、服、汚してしまつて。」

今、高垣さんの服は、俺の涙や鼻水やらでぐしょぐしょの筈だ。流石に申し訳ないし、そこは謝らないといけない。

俺が謝ると、高垣さんは少しムツとした表情を見せたが、直ぐににっこりと微笑んだ。

「ふふっ。大丈夫ですよ。汚れは洗えば直ぐに落ちます。むしろ、比企谷君の役に立ててよかった。」

「それと、お礼は大丈夫ですよ。これは、貴方への恩返しなんですから。」

「恩、返し……？」

全く心当たりがない。

「そう。私の初めてのファンに、応援してくれてありがとう、見守ってくれてありがとう、ファンになって支えてくれて、ありがとうって。私なりの、恩返しです。」

「……え？」

さっきまで泣いていた為か、驚きの為か、出た声は、少し掠れた。

「俺が貴女の、高垣楓の、始めての、ファン……？」

「ええ。比企谷君。貴方が私の、始めてのファン、です。」

「覚えててくれてたんですか……？」

「覚えてますよ。忘れる筈ないじゃないですか。私は、今でもはつきりとおの時のこと、覚えてますよ。」

「誰も見てくれなくて、アイドルを諦めかけてた私にアイドルの楽しさと喜びを教えてくれたのは比企谷君です。」

覚えてて、くれてたのか。

「それはなんというか、ありがとう、ございませう？」

「ふふっ。なんで疑問系何ですか？」

「そ、それはなんというか、その、」

「……」

「……」

なんだか可笑しくて、2人同時に嘖き出す。少しの間、346プロダクションの一室では、男女2人の笑い声が響い――

「2人共、お熱いトコ悪いんだが……」

「盗み聞きするつもりは無かったのですが、すみません……。」

「えっ」

声のした方をみると、そこには、凄く、凄おーく申し訳なさそうな顔をした、ロツクなイケメンと人を何人も殺してそうな目付きの悪い男がいた……。

1、2話 ｝ s i d e 奈緒 ｝

「クソッ！クソッ！」

朝5時頃。まだ朝早く、人気の少ない路地を、感情に任せてがむしやりに走る。

「なんでだなんでだ！なんでだよ！」

流石に息切れしてきて、走るのをやめて立ち止まる。身体を支えきれなくて、道脇の電柱に寄りかかる。憎たらしいくらい爽やかに晴れた空を、八つ当たり気味に睨みつける。

「なんであいつは、あんなこと、言ってるんだよ……！」

あたしは昨日、ぶつ倒れてた比企谷が心配で、今日も様子を見る為に346の女子寮に泊まらせて貰った。今日も学校だったが、ここは東京。朝早くに学校に向かえば、電車等でトラブルが無ければ間に合う。いつもは自分の身体を優先して帰る所だが、今回ばかりはそうもいかなかった。なんせあたしの気になってる人だ。あと加蓮も何故か泊まりたがっていた。加蓮は優しいからきつと比企谷のことを心配してたんだろう。でもなんか鬼気迫る感じだったな。なんでだろう？まあとにかく、身体が弱い為、無茶は厳禁と帰って貰った。

今朝いつもより早めに設定した目覚ましのアラームより、30分早く起きたあたしは、事務所に迷惑だと思いつながらも居ても立つても居られず、急いで学校に行く準備をして、比企谷がいる346プロに向かった。1分1秒でも早く、あいつの容態を知りたかった。いつもの通り裏口からと思ったけど、早すぎて鍵がかかっていたので正規の入り口から入る。入ったところで時間を確認。

4時45分。早すぎる。あたしとだけ比企谷心配だったんだよ。ちよつと恥ずかしくなってきたぞ。ええい!!？どれもこれも全部比企谷の所為だ！あとで文句言つてやる!!？そう思ったあたしは、意気揚々と、比企谷が寝かされている部屋に向かった。

その部屋に着き、ドアノブに手をかけたあたしは直ぐこの部屋に早く着いてしまったことを、後悔した。

聞きたく無かった。いつも捻くれまくって斜め下の返答を返してくるとてもめんどくさい、でもとても優しく強いが、あんなことを言うなんて、知りたく無かった。

「死ねなかつたのか」なんて、聞きたく無かった。

あの後学校に着いたあたしは、教室のドアを開けた。こつちを見たクラスメイトは全員ギョツとして驚いている。今あたしはとても人には見せられない、アイドルらしからぬ表情になっているんだろう。

「かみなー……大丈夫？」

あたしの友達の由比ヶ浜結衣が心配そうに聞いてくる。

「大丈夫。ちよつと今気分悪いからほつといてくれ。」

思つてたよりぶつきらぼうな返事がするり、と口から出て行く。謝りたいが、今のあたしにそんな余裕はない。早足で自分の席に着くや否や机に突つ伏する。もう今日は誰とも話したくない。

あたしは、あれからずつと比企谷のことを考えていた。なんであいつはあんなところで倒れてたのか。なんであんなことを言ったのか。あたしの知らないところであいつに何があつたのか。考えとかなきゃ、ココロの中で未だドロドロと湧き出る負の感情を、抑えきれなくなるから。

「かみなー。ちよつといいかな。」

誰かに声を掛けられる。この声は結衣か。優美子が慌てて結衣のことを止める。いいぞ優美子。そのまま止めてくれ。あたしは今話せそうに――

「ヒツキーのことについて、話したいんだ。」

「それで、話つてなんだよ。」

「さつきも言ったけど、ヒツキーのことだよ。ヒツキーと仲よかつたかみなーには、ヒツキーのした事、ちゃんと知つててほしかつたんだ。」

それなら、聞かなくちやいけない。

「ヒツキーが退学した理由を――」

「ちよつと待つて。」

比企谷が、退学……？

「え、あ、え、比企谷が、退学？え？」

「えっ!??かみなー知らなかつたの!??」

「あ、ああ。一体、いつから……」

「4日前だよ。そっか。その日かみなー休んでたもんね。その後も結構忙しそうだったし。」

比企谷は、そんな前から……。なんで、気づけなかつたんだよ……

！

「悪い。続けてくれ……。」

「……うん。わかった。今まで、ヒツキーが何をしてきたか、話すよ。」
それから結衣は、これまで比企谷がなにをしていたのか教えてくれた。職業見学でのチェーンメールのこと。千葉村でのこと。文化祭、体育祭でのこと。最後に、修学旅行でのこと。だが話を聞く限り、比企谷が悪いことをしているようにしか聞こえなかった。

「覚えてない？文化祭での戦犯とか、ヒツキーが言われてたの。」

あれ、比企谷だったのか。聞き覚えはある。ひどい奴もいるもんだなってあの時思って、直ぐに忘れた。

「でも、だとしたらなんでそんなことしたんだ？すげえ優しいあいつが。あいつは、なんの理由もなくそんなことする奴じゃない筈だ。」

「うん。ヒツキーは、自己満足だーなんて言ってたけど、多分違うと思うんだよね。今までヒツキーが関わった相談事は、全部解決してるんだ。どんな無茶な依頼でも、殆ど依頼通りの結果が出るの。その代わりに、自分が傷ついて。」

比企谷が、傷ついて……？

「ヒツキーのお陰で文化祭は成功したし、さがみんは今もクラスに打ち解けてる。本当なら責められてたかもしれないのに。」

「ヒツキーのお陰であたし達のグループもまだ壊れずに仲良くやれてる。本当なら今頃もうみんな仲良く出来なくなってたかもしれないのに。」

「きつと、ヒツキーは依頼してきた人達が苦しい目に合わないようにしたんだろうなあ。」

「でも。」

「どんなにわかろうとしても、ヒツキーのやり方はあたしにはわからない。あんなに傷ついて、どうしてあんなことを出来るのかか、わからない。もつといいやり方があったんじゃないか、ヒツキーを傷つけないやり方が、あったんじゃないかって、ずっと考えちゃう。でもそんなのは、全然見つかんなくて。きつとヒツキーは、そのことを知ってて。」

「優しいヒツキーは、言わないだけで。あたし達じや治せないところを治して、全部背負って行って。」

「ヒツキーさ、自分を犠牲にして誰かを助けた後、いつもちよつとだけ、強がるんだ。平気そうな顔して。いつもみたいに振る舞うの。」

「でも、そのときヒツキー、凄く、凄く、辛そうなんだ。」

知らなかった。全然知らなかった。隣にいたのに、見ていたのに、気づけなかった。なんだかそれが、めちやくちや悔しい。

「そんなになるまで頑張っても、その頑張りに気づいてくれるのはほんの少ししかいなくて。」

「ヒツキーの退学が知らされた時、みんな殆ど笑ってたんだよ。関係なかった人も、ヒツキーに助けて貰ってた人も、みんな、笑ってて。笑ってなかった人なんて、数える程しかいなかった。」

「おかしいつて思った。なんでみんなの為に頑張ってたヒツキーが笑われるのって。でも、あたし、なんも言えなかった。」

「なんも言えなかったんだ。最低だよ。あたし。いつも助けてくれた人を、かばうこともしなかった。」

「ホント、最低だなあ。」

掠れた声で言い終えると結衣は自嘲気味に笑う。

「……そっか。ありがとな。話してくれて。」

それだけ言い、ドアへ向かう。

でも、意外だった。比企谷のことをちゃんとわかってる人がいたのは、あいつはいつもぼつちたなんて言ってたが、もしかしたらあいつが言うほどぼつちではないのかもしれない。

それと、やっとこの行き所のない感情を、ぶつける先を見つけた。どうやらあたしは、あいつらを許すことは、出来なさそうだ。

ドアを勢いよく開ける、大きな音が教室内に響く。

教室内は静かだ。音に驚いたクラスメイトがギョツとこちらを見ている。なんか既視感^{デジャヴ}。だが今はそんな事どうでもいい。目的の奴

に向かつて早足で歩く。

「やあ。どうしたんだい奈緒？結衣と話してたみたいだけど、何かあったのかい？」

あたしの視線の先には、みんなの王子さま。葉山隼人がいた。いつもはなんとも思わないその爽やかな笑顔が、今はどうしようもなく憎たらしく見える。

「なあ葉山。」

「ん？なんだい奈緒？」

名前で呼ばれると、どうしようもなくイラつくからやめてほしい。今すぐそのスカした顔をぶん殴りたくなる。

「比企谷の退学について、どう思う？」

周りが少しざわつく。その殆どは、あたしが比企谷のことを聞いた事への驚きと、嘲笑だった。気持ち悪い。頼むから黙っててくれ。

葉山は少し考える仕草を見せた後、こう告げた。

「仕方ないんじゃないかな？」

—— ツツツ!!？」

……いや、まだだ。まだ感情を出しちゃいけない。もしかしたら葉山だって比企谷の退学を悔しがったのかもしれない。感情に任せてちや、ダメだ。

だが、そんな自制はいらなかった。

「だってあんな奴、この学校にいちやいけないだろ？」

「……………は？」

—— プツ、プチ、——

その時、あたしの中のナニカが切れ始める。

教室内にいたやつらは、その変化に気づき、押し黙った。野次馬のざわめきは、ピタリと止んでいた。

2人以外は。

「だよねー！実はウチもそう思ってたんだー！ヒキタニってホントウザかったよねー！」

ケラケラと、心底愉快そうに笑いながら話に入ってきたのは、文化祭で比企谷に助けて貰っていた少女、相模南だった。と言っても、コ

イツに助けて貰ったっていう自覚は無いみたいだけど。

「おつ、相模さんもそう思うかい？」

「思う思うー！ホントアイツマジ最低だよねー！ウチのこと散々罵ってバカにして！もうホント何様って感じ！ホント消えてよかったー！」

周りは誰一人として喋らない教室の中で、2人の声は、やけに大きく教室内に響いた。本来なら空気を読み、この雰囲気を探る事が出来た筈の2人だったが、今日はなぜか、それが出来なかった。そして、ある計画の成功からか、これまでになく気分が高揚していたからだろうか。みんなの王子さまをこれまで完璧に演じていた筈の葉山は、少しの間、演じることを、完全に忘れていた。

だから葉山は、優越感に浸りきった、嗜虐心溢れる笑みを浮かべて、言ってしまった。

「そうだね。僕も彼は死ねばいいと思うよ。」

———プツン———

あたしの中で切れかけていたナニカが、今、完全に切れた。気がついていたら、葉山を殴っていた。突然殴られて、身体を支えきれなくなった葉山は、周りの椅子や机を巻き込みながら大きな音を立てて尻もちをついた。

周りが一気にぎわつく。

「え？..は？」

なぜ殴られたのかわからない、という風な困惑した顔をした葉山の胸ぐらを掴む。

「ふざけんなよ...ふざけんなよお前!!?比企谷は、死ねばいいだど...!!?助けて貰って置いて何様のつもりなんだよお前!!?」

「た、助けて貰った?比企谷に?一体何を言ってるんだい奈緒?そんなこと一度たりともないよ。」

「そ、そうだよ奈緒ちゃん!ウチ助けて貰った事なんて一度も...」

「あっただろうが!!?文化祭の時だって修学旅行の時だって!!?相模が責められないで文化祭を終えたのも、葉山のグループを壊さずに済んだのも比企谷のおかげだろう!!?」

「は!!? ウチ助けられてないんだけど? アイツに悪口言われただけじゃん! そもそも責められることなんて何一つ無いんだけど!!? 全部比企谷が悪いじゃん!!?」

やっぱり自覚は無かったようだ。怒りがふつふつと湧いてくる。

「浮つついた気持ちで実行委員長になったのも! 実行委員会であちゃんと働かなかったどころか他の委員もサボらせたのも! 結局本番上手くいかなくて逃げたのもお前が悪いんだろう!!? 真面目に仕事やっていた比企谷に何言われようが自業自得じゃねえか!!?」

『確かに……。』

『そうだったかも……。』

『だから相模さんあんなにクラスに来てたのか……。』

『考えてみれば、悪かったのってヒキタ二じゃなくて相模さんじゃない?』

思い当たる節があったのか、周りがどよめく。

「だ、だからってあんなに言わなくてもよかったじゃん! ウチ傷ついたらんだけど!!?」

それでもまだ食い下がる相模にあたしのイラつきは増していく。

「だから自業自得だつってんだろうが!!? 今更お前が何言っても無駄だ! 黙れ!!?」

「ひっ」

未だ加速度的に増していくイラつきのせいで、顔が今迄にない程怒りに歪んでいるのがわかる。

「ま、まあまあ。少し落ち着きなよ奈緒。確かに相模さんが悪いかもしれないけど、ヒキタ二君だつて言い過ぎだったんじゃないかな? きつとヒキタ二君は私怨なんかを混じえてたんじゃないか? そうじゃないとあんな追い詰めるような事言わないだろうし、現にネットじゃヒキタ二君の風当たりが強いじゃないか。」

あたしの怒気に怯えた相模が変わって、いつのまにか復活した葉山が反論してきた。

「あんなに負担かけた上に掻き回したらそれくらい言われて当然だろう!!? それにあいつは優しいんだ! 自分の都合だけで人を傷つける

ような事を言う奴じゃない!!? 修学旅行の時だってそうだ!あの嘘告白はお前らが板挟みをする様な依頼をしてきたからだろう!!?」
「それは君の主観だろう? 僕はヒキタニ君のこと、ただ自分のことしか考えてないクズにしか見えないけどね。それに、奈緒の前でいい顔してただけだろうか? 優しくなんてないよ。ヒキ「優しいよ」……戸塚。」

葉山の言葉を遮る様に言葉を被せて来たのは、戸塚だった。

戸塚のことは知っている。学内じゃ結構有名だ。容姿言動性格全てが美少女の男子。男子テニス部の部長をやっていて、裏ではファンクラブがあり、王子とか呼ばれている。あたしも初めて会った時は男の娘ってホントにいるんだって驚いた。

「八幡は、優しいよ。2人で歩いてる時はさりげなく道路側を歩いてくれるし、僕が落ち込んだ時は本気で心配してくれて、相談に乗ってくれる。面倒くさい顔しながら色んなことに最後まで付き合ってくれるし、失敗しても “気にすんな” って優しく言っただけで励ましてくれる。八幡はやらなくちゃいけない理由が無きや絶対にあんなこと言わない。絶対に。だって八幡は、とっても優しい、僕の友達だもん。」
「それに……」

「ヒキタニじゃなくて比企谷。人の名前をさつきからわざと間違えてる人の方が、クズで最低だと思ふな。僕は。」

にっこりと微笑んで、戸塚は告げた。顔は笑っていたが、目は笑ってなかった。あれはマジでキレてる。怖い。

教室内がしん、と静まり返る。

「……フツ……アハハッ!アハハハハ!!?」

すると突然、葉山が大声で笑い出した。今迄見せた事が無かったその反応に、ここにいる全員が驚く。

「……ふう。ごめんな。少し笑い過ぎたよ。で、奈緒。聞いてもいいかい?」

「……なんだよ?」

「クズをクズと言って何が悪いんだい?」

「ツツ!!?!!?」

「ダメ！神谷さん！」

「落ち着いてっ！」

葉山を殴ろうとするが、クラスメイトに止められる。

「離せッ！離せよ！比企谷は、比企谷はお前らの為に頑張ってたんだ！それなのに！お前は！比企谷をクズだと!!？ふざけんな！ふざけんなよ!!？」

「だってそうだろう？他の事にしても、千葉村に行った時だって、体育祭の時だって、いつもあいつは最低な方法を選んでいった。学校にだって切り捨てられている。つまりそういうことさ。俺達の為とか、そんな事どうだっていいんだよ。」

「いいわけ無い！比企谷は！ボロボロになってた！死のうと、してたんだ！死ねなかつたのかつて、言ったんだ！そんなの、いいわけ無い!!？」

それを聞くと葉山は残念そうな顔をした。

「……はあ。なんだ、死ななかつたのか。」

「——」

……ああ、そうか。

「……離してくれ。」

「だ、ダメだよ神谷さ——」

「もういい。」

「え……？」

「離してくれ。」

「っ……！」

やっと掴まれていた腕が自由になる。あたしはそのまま鞆をひっ掴みドアへと向かう。

「おい。一体どこへ行くつもりだ？神谷。」

声のした方を向くと、いつからいたのか、そこには平塚先生が立っていた。その隣では結衣が驚いた表情で固まっている。だが今の私には何かを言う気力すらなかった。だから無視してドアを開ける。

「そうか。具合が悪いなら仕方ないな。早退報告は私がしておこう。ちゃんと療養する様に。」

「……………はい。」

ドアがピシヤリ、と閉められる。彼女は確かアイドルだったな。全く比企谷め。ぼっちなんて言ってるくせにあんな美少女誑かしやがって。けしからん。

……まあでも、なんだかんだ言っつて、ちやんと考えてくれる奴はいるじゃないか。よかつたな。比企谷。

……だがさっきの神谷の発言は、また今度、ちやんと聞いておかなくちやな。聞過ごすことは出来ん。退学させてしまったとはいえ、私の大事な生徒だ。彼の心が折れたのなら、治してやるのが教師というものだろう。

「さて、と。」

まずは周りを見てみる。散乱した椅子と机。怯えた表情をした生徒達。正に修羅場の後だな……。

「お前ら。取り敢えず席につけ。」

今日は授業はやめだ。勉強熱心な生徒には申し訳ないが、致し方ない。それよりも、私はこいつらに愛説のある教育教をしなければならん。だから、話してもらおうか。

「お前ら。何があつたのか、詳しく聞かせて貰おうか！」

3話

今現在、346プロダクションの一室にて、その床には2つの屍が転がっている。……あ、屍っていうのは例えで死んでないよ？そもそも2つの内1つは俺だし、死んでたら意識無いんだから語りも出来ないしな。

……つて、誰に話してるんだ俺は。現実逃避し過ぎて遂に頭狂ったか？

まあいい。それでなぜこんなことになってたのかというと、時は数分前に遡る。

回想……はいいや。めんどい。2話見ろ。

まあ要約すると、俺と高垣さんの会話シーンを、今この部屋にいる2人に見られてたのだ。もしかしたらもつと前からかもしれない。考えたらきつと俺は恥ずかしさで死んじゃうだろうから考えないし言わないけど。

……え？あれは会話シーンじゃなくてイチヤイチャシーンだった？チョットナニツテルノカワカンナイデスネ。

因みに2つの内もう1つは高垣さんである。膝を抱えて手で顔を隠して転がっているが、隠していない耳が真っ赤になっている。可愛い。

あと俺も同じようになっている。きもい。

「あの、ちよつといいですか……？」

震える声で問いかける高垣さん。

「な、なんだ？」

一体何を……ハツまさかつ!??

「高垣さんっ！やめ……」

「いつから、聞いてましたか……？」

ノオオオオオオオオオオオン!!? ☒

ダメだつて！ダメだつて高垣さん!!? そんな質問したら……

「……あー。ゴメン。その人が泣いてるところから。」

「すみません。盗み聞きするつもりはなかったのですが。出るタイミ

に呼んでくれ。元はバンドやってたんだが、今はココでロックでカッコワイイアイドルを目指してるんだ。よろしくな！」

うん。流石アイドル。受け答えもイケメンだ。

……アイドル？

ちよつと待て。346プロに男性アイドルなんていたか？いや、いない。てことはまさか……!??

「も、もしかして木村さんって、じよ、女性だったんですか？」

「木村さん……？ま、いいか。苗字呼びは慣れないから、いつか呼び方変えてくれよ。んで、女かだつて？アハハ。女だよ。アタシ。まあこんなカツコしてるからいつもよく間違えられてんだ。だから気にしないでくれよ。」

木村さんは少し苦笑いをしながら答えてくれた。確かに、顔立ちは中性的で口調も男勝りだが、ちゃんと出るところは出ているしそういうば一人称もアタシだ。

「マジですか……。すいません。間違えてしまつて。」

「いいよ。気にすんなつて。」

「ありがとうございます……。」

木村さんは俺の肩をトントン叩きながら励ましてくれる。いや、ホントいい人だなこの人。一瞬で惚れて告白してフラれるぞ。フラれちゃうのかよ。アイドルなんだから当たり前だよ。

「じゃあ、次は私ね。みんな知ってるだろうけど、高垣楓です。346プロでアイドルをしています。お酒が好きな25歳。まだまだ現役で頑張ります！おっしゃーけ！つてね。」

瞬間空気が凍る。成る程。これが本物か。寒い。場を凍らせたご本人はやりきった感全開でドヤ顔してる。うざ可愛い。

「……あ、アハ、ハハハ……。」

「……。」

木村さんは困った様に苦笑い。武内さんに至っては何も言えずに首の後ろに手を当てている。仕方ない。心苦しいが、俺がちゃんと、言つてあげねえと……！

そのダジャレ、つまんないつて、言わねえと！

「高垣さん……。」

「はい！何でしょう！」

「言え！言うんだ！」

「……。」

「……！」

「そ、そのダジャレ、面白い、ですね……。？」

「わあ！本当ですか！」

ダメだったよ。俺には無理だ。あんなにキラキラした表情、崩せる程俺精神鍛えられてねえよ……。前の2人を見ると、よく頑張ったって表情でうんうんと頷いていた。よかった！わかってくれる人がいてよかった！

「じゃあ、次は比企谷君の番ですね！」

「え？俺もやるんですか？」

「いや、逆になんでしなないと思ったんだよ!!?。」

「では、お願いします。」

「あ、はい。比企谷八幡です。」

「……。」

「はい。よろしくお願いします。比企谷さん。」

「はい。こちらこそ。」

そう言つて武内さんと握手をする。さつきから妙に親近感が湧くのはやっぱり目なのだろうか？女性2人は固まっている。何があった。

「あの、どうしたんですか？」

「……それだけ？」

「え？」

「自己紹介それだけ（かよ）!!?。」

「他に何かしら無いのかよ！好きな食べ物とか、趣味とか！」

「え？必要ですかそれ？」

すると木村さんと高垣さんは互いに目を見合わせて、物凄く呆れたようにため息をつく。何で？いいじゃん名前だけで。

「まあいいです。比企谷君のソレはいつか直すとして、自己紹介も終

わったことですし、早く本題に入りましょう。」

ねえ、なんなのそのどうしようもない奴みたいにな言い方。傷つくんですけど。それに武内さんも同じような自己紹介だったのに何で俺だけ？ねえ何で？

そんな俺の心の嘆き？愚痴？は当たり前前の様に全員に聞こえず、話は本題に移る。

「そう、ですね……。」

武内さんが首の後ろに手を当てる。微妙に、空気が変わる。気がつけば、全員が居住まいを正していた。それにつられて、俺も座り直す。「聞かせて貰えますか？なぜ貴方は倒れていたのか、その背景に、何があったのか。」

「……。」

咄嗟に俯いてしまう。それはこの人達には関係無い話だ。話したくないし聞かせたくない。それにこれを聞けば、きつと彼らは幻滅するだろう。それは、嫌だ。彼らに、高垣さんに、嫌われたくない。いつも嫌われてる俺らしくない、自分本位で果てしなく醜い理由だが、断ろう。俺は、大切な人に、立て続けに嫌われるのを耐えられる程、強くない。

「それは——」

断ろうと顔を上げて、出した声を、飲み込んでしまう。だって、仕方ないだろ？あんなに真剣な表情、無視出来るわけない。

「大丈夫。誰も比企谷君を嫌いになんか、なりませんよ。」

高垣さんが、優しく微笑む。他の2人も、力強く頷く。

ははっ。いつそ清々しいくらいの手のひら返しだな。俺。

……話そう。この人達は、こう言ってくれた。これに答ええないのは、流石に笑えない。

「わかり、ました……。」

そして俺は打ち明けた。倒れてた理由。心に強く残っている高校2年になってからの出来事。その時の行動とその理由。生じた感情、想い。出来る限り丁寧に、ありのまま、伝えた。この話は決して、軽くはないし、普通の人が納得出来ない様などころもあっただろう。で

も彼らは、しっかりと聞いて、受け止めてくれた。

「……とまあ、長かったと思いますけど、こんな感じですよ。聞いてくれて、ありがとうございます。なんかスッキリしました。」

これでもう、嫌われたらどうな……。でも、この人達は、ちゃんと聞いてくれた。だから、受け止めよう。これからきつと、辛くなるけど、それでも、これが唯一、俺がこの人達に出来る、恩返しだから――

「比企谷……アンタ、スゲえよ……。最高にロックだよ……。」

え？

「どうして……。どうして比企谷君が虐げられるんですか……。！比企谷君は、ただ、みんなを助けようと、ただけなの……。こんな、の、絶対、おかしいわよ……。」

え？

何でだ？何でこの人達は――

「責めないん、ですか……？」

「え？何で比企谷を責めるんだよ？」

「確かに自分をもっと大切にしてほしいとは思いますが、責めることなんてしてませんよ？」

不思議そうに、本当に不思議そうに言う2人。

「だって、俺は、最低な事ばかりしてんですよ？本当に、人が嫌がって、軽蔑する様な事を何回も、何回も……。」

「別に比企谷は、自分の都合とかでそれをやったんじゃないよ、あくまで問題を解決するためにそれをしたんだろ？」

「え？えつと、まあ、はい。そうですね。」

「だったらいいんじゃないかな。」

「……………へ？」

木村さんの言葉に困惑する。いって、何で……？

「い、いやだって、それでも俺はあいつらを貶めたんですよ？目的があったにしろ許さ……。」

「確かに、比企谷君のやった事はいけない事です。」

そう言つて、高垣さんは俺の言葉を遮る。その顔は、どこかやるせ

ない様な表情で、でも、直ぐにその顔は、優しく、温かく、微笑む。「でも、比企谷君がそれを苦しみながら、それでも誰かの為に頑張つてやったのは、直ぐわかります。」

最後に高垣さんは、さつきからの予想外の2人の発言の数々に、目を見開き固まってる俺の肩にぽん。と手を置き、こう言った。

「大丈夫。貴方は悪くない。私は、貴方の味方です。」

力が抜ける。思わずソファアの背もたれに寄りかかり、乾いた笑いをあげてしまう。

……まさか、責められるどころか、慰められるなんてな。

「ありがとうございます……。」

「……比企谷さん。」

さつきから一貫して口を開かなかった武内さんが、口を開く。

「はい。」

武内さんは俺を真っ直ぐに見据え、言った。

「アイドルのプロデュースに、興味はありませんか？」

4話

「アイドルのプロデューサー、ですか……?」

「はい。どうでしょうか。」

武内さんからの、いきなり上方斜め前にぶっ飛んだ様な、そんな申し出に驚いて、困惑して、言葉を失う。

「まあ、いきなりプロデューサーに、というわけにも行きません。なので、まずはプロデューサー見習いとして、仕事を覚えてもらうことになります。」

「月15万円。毎日6〜8時間程働いてもらい、週5日。土日休み。内容は近場の仕事へのアイドル達の送り迎え、事務処理、スケジュールの管理、あとはアイドルの精神面、身体面でのサポートくらいでしょうか。それと、アイドルのライブで休日も仕事をしてもらう時もあります。これくらいでしょうか。」

凄いい好待遇だ。月15万円なんて、高校中退の俺にとってはとんでもない額なんじゃないだろうか。

「私が考えて、出来る限りの好待遇です。もちろん、私にはその決定権が無いので、この部門の責任者に話を通してからです。きっと彼女なら、比企谷さんを気にいるでしょう。どうでしょうか。」

346プロという安定した職場。とんでもない好待遇。今置かれている俺の状況を鑑みても、この仕事、受けさせて貰うのが正解だ。というか、高校を途中退学した俺は、ここを逃したらこれ以上の仕事なんて貰えないだろう。会話が苦手で悪人面の俺には、合わない仕事だろうが、そのデメリットを補って余りあるメリットがある。自分の生活を考えるのならば、このチャンスを掴まない手は無いただろうでも。

「すみません。お断りさせていただきます。」

武内さん達が驚いて目を見開く。まあ、そうだろう。職も金も無い、そんな窮地に立たされた状況で、こんなうまい話に食いつかないなんて、普通じゃない。明らかに、おかしいだろう。

「その理由は、なんででしょうか?」

「俺はほら。話せないし目つき悪い。っていうか腐ってますから、アイドル達が怖がっちゃうじゃないですか。それに、俺捻くれてるんで、アイドル達にそんな影響が出たら洒落にならないじゃないですか。俺には、向いてないかなって。」

「いや……違いますね……。」

「こんな好待遇、もう、俺の人生の中じゃ絶対じゃないでしょう。自分のこと考えれば、俺には向いてなくても、お受けしたいです。この仕事は。」

「でも。」

「俺がもし、アイドル達の道を閉ざしてしまったとしたら、とか考えちゃうと、ですね……。」

「少し、いや、かなり、怖いんです。こんな俺のせいで、彼女達の人生を壊したく、ないんです。」

「その責任を負う覚悟も、何もしていない俺が、入っちゃいけないって、思うんです。」

「俺のせいで、アイドル達に迷惑かけるのは嫌なんです。」

「だから、すみません。この仕事を受けることは、俺には、出来ません。」

深く、頭を下げる。

それは、紛れのない俺の本心だった。話すつもりは、なかったけど、なぜか話さなきゃいけない気がして、つい、話してしまった。

暫しの沈黙の後、武内さんが口を開く。

「……確かに、覚悟が無いのは、いただけません。私達プロデューサーは、その様な覚悟が無い人が、入っていい仕事では、ありません。」

ああ。解ってる。そもそも俺みたいな奴がプロデューサーになるなんて、あっちゃいけない。だから、断ってくれ。諦めさせてくれ。

「ですが、その覚悟は、みんな最初から持つてるわけじゃ、無いんです。」

「え……。」

「その覚悟は、仕事をして、アイドル達を見て、聞いて、感じて、初めて手に入るモノです。最初は、私も持っていなかったし、持っていた

ら、逆に怖いです。直ぐに呑み込まれてしまう気がします。」

武内さんは、何を……

「それに、それにずっと気づかない方も、偶にいます。」

武内さんは首に手を当てる。

「えっと、つまり、ですので、そう悲観することは、無いと思います。

貴方は、十分すぎる程早く、それに気づいている。」

「え？あ、え……」

「ねえ、比企谷君。」

高垣さんが、俺に呼び掛ける。武内さんの言葉に驚いて、呆然としていた俺は、慌ててそちらを向く。

「比企谷君は、とても優しい人だと、思います。自分が追い詰められているのに、自分のことよりも他の子もことを考えて、優先してるんだから。」

「別に俺は、優しくなんて……」

なんだか顔を合わせられなくて、俯いてしまう、

「優しいじゃないですか。現にさっき私のこと、気遣ってくれたし。

まあ、今そのことは置いて。」

「私はね、思うんです。比企谷君が、その優しさを、少しでも自分に向けてくれたらなって。」

優しさを、自分に……。

「少しは、自分の為に、道を選んでみませんか？」

「迷惑は、かけていいんです。かけた分は、他のことで返せばいい。」

「それにね。」

「私、比企谷君にプロデューサー、なって欲しいな。」

「え……？」

驚いて、顔を上げる。目の前の高垣さんは、穏やかで、優しい、微笑みを浮かべていた。

「比企谷君には、ここを、新しい貴方の居場所にしてほしいの。ここで貴方には、人に頼ることを覚えてほしい。」

だがその微笑みは、だんだんと悪戯っ子の様な、楽しみな様な、そんな笑みに変わる。

「それに、比企谷君がプロデューサーになったらきつと、もつと面白くなりそう。」

「ハハッ！確かに！ハチがコツチ来たらスゲー面白くなりそうだ！」
「でしょ？」

木村さんと高垣さんがいきなり笑い出す。ちよつと目の前の2人の言ってることがよくわかんない。喋ること無くなって気まずくなるの間違いじゃないの？ってというか……

「は、はち？」

「ん？ああ。八幡だからハチ。もしかして嫌だったか？」

「……いえ。ヒツキーなんていう不名誉なあだ名よりマシです。」

「ツップ！アハハハ！！？なんだそれ！スゲーあだ名だなあ！なあ！ヒツキー？」

「……プツ。ヒツキー……ププツ。」

「あの、何か、おかしいのでしょうか？」

……あー。何やってんだろ、俺。自分からいじられに行っちゃったよ。ていうか、武内さんわかってないなこれ。意外に天然……なのか……？

さつきまでのシリアスは何処へやら。堪え切れなくなったアイドル2人の笑い声が、しばらく部屋に響いた。

「つふうーッ！笑った笑った！腹いてー……。」

「お願いですからヒツキー呼びはやめてくださいね？これで呼ばれたら、俺、泣きますよ？」

「ああ。わかったよ。ハチ。ところでさ。」

「はい、何ですか？」

「ハチはさつき自分の目が腐ってるだの何だの言ってたけどさ。別にどうってこと無くないか？」

「……………はあ？」

いきなり何言ってたんだこの人。

「確かにぱつと見だどちよつと悪人面してるけど、よく見りや顔もいい方だし、その目だつて別にそこまで言う程でも無いだろう?」

と、真面目な顔で言われる。

……いや、いやいやいや!?? 何言っちゃってんのこの人!?? 言う程でもないって!?? 俺小学生の頃からずつと言われてきたんですけど! ねえ、何言っちゃってんのこの人!??

「ん? あー。つまり何が言いたいのかっていうとな? 別にそこまで悲観しなくても大丈夫だつて事だよ。確かに、ハチの優しさはわかりにくいけど、きつと、アタシ達みたいになんかそれがわかる人もいると思うんだ。」

「それは……なんていうか、ありがとうございます?」

「何で疑問形なんだよ……。まあ、いいけど。」

苦笑いをする木村さん。

「ところで、どうするかは決まったか? ハチ?」

「え?」

「んー。まだ決まってないか? だったら少しアドバイスさせてくれ。

まあ、アドバイスっていう程の事じゃ無いけど。」

「え、あ、はい。」

ア、アドバイス? 一体何を……?

「ハチ。こういう時はな? 考えてみてパツと頭の中に浮かんだ方を選ぶんだ。きつとそれで選んだことは、アンタのやりたいことだ。こういう時こそ、行きたい方へ行かないと。だしなー!」

そう言つて木村さんにはかつと笑う。

浮かんだ方を選ぶ。か……。

「1つ、いいですか?」

「ああ。」

「……皆さんは、どうしてそんなに、俺に気を掛けてくれるんですか? 高垣さんとはともかく、他のお2人は今日が初対面で、初めて知り合つたんですよ? さつきまで話してた内容だつて、普通そう簡単に納得できるような話じゃ無いはずですよ。」

「俺のやり方はいつも、卑屈で最低で、陰湿です。歪んでいて、それは

普通悪にしか見えない。それなのに皆さんは、俺のこを受け入れて、励ましてくれた。普通だったら、俺を責めるか、愛想をつかさか、する筈なんです。何ですか？何でそんなに、俺に優しいんですか……？」

暫しの沈黙の後、高垣さんが、口を開いた。

「……それは……ですね。」

「……ぐくりと、唾を飲み込む。」

「……わかんないです！」

「……すいませんよく聞こえなかったです。もっかいお願いします。」

「だからわかんないです！」

「……」

「……」

「……はああ!?!?」

ちよつと待って。え？嘘でしょ？わかんない？え？は？はあ!?!?

え、ちよつと待って。何で他の2人も頷いてんの？え？え？つええ

……？

「……なんかないんすか？」

「無いな。」

「無いですね。」

「えつと、無いです。」

「ええ……」

「まあでもさ。わかんなくなたっていいんじゃない？」

「へっ？」

木村さんの言ってることが分からず、驚いて変な声を上げてしま

う。
「小難しい理由なんて必要ない。助けたい時に助けたいやつがいた。それでいいじゃん。」

「比企谷君は私のファンなんだから。私が出来る限り元気をあげるのは当然ですよ？私、これでもアイドルですから！」

「私は、元より同情から貴方を誘ったのでは、ありません。貴方にプロデューサーとしての才能を見たから、誘ったんです。」

驚きのあまり、固まってしまおう。っていうか、さつきから予想外の答えが多すぎて固まってばっかだな。俺。

「俺を誘ったこと、後悔するかもしれないよ？」

「後悔するとしたら、それは私を見る目がなかった、という事です。貴方を見て、誘ったのは、私ですから。」

「俺、めんどくさいですよ？」

「大丈夫だ。それ以上にハチが優しいヤツだって、アタシ達は知っている。アイドルにだってそういうヤツもいるんだ。1人も2人も変わらないよ。」

「……迷惑かけるかもしれないですよ？」

「ほんとこい！ですー！」

……平塚先生とこの人達には、ホントに頭上がんねえな。

もう一度、考えてみる。自分に出来るかじやなく、自分がやりたいか、自分に、問いかける。

もしかしたら、もしかしたらここなら、俺は本物を、見つけれられるかもしれない。今、頭に浮かんだ。無理かもしれない。迷惑かけるかもしれない。でも、彼女達はこう言ってくれた。だったら、俺の出す答えは……

「よろしくお願い、します……！」

「へへっ！やっとなまったか！」

「全くもう！決めるのが遅いですよ比企谷君！」

「……よかったです。」

三者三様の反応。けど3人の表情には、俺の自惚れかもしれないが、俺の決心への嬉しさが入ってるように思えた。

すると3人は互いに目配せし合い息を合わせると、高垣さんがせいのつと掛け声をあげる。

「「「よういこそー！346プロへー！」」」

5話

あの後、俺は武内さんと一緒に、ここ346プロダクションアイドル部門で、1番大きい権利を持つ人——美城常務の部屋へ来ていた。いくら武内さんがOKを出したといえ、総責任者。この場合は常務に許可を取らないと、そもそも働けない。自分としてはあまり行きたくないけど、今はどうこう言ってられない。武内さんは大丈夫だと言っているが、客観的に見て今の俺は超怪しい。この近くでぶっ倒れていただけでも怪しいのに、この腐った目である。大丈夫じゃないだろう。というか大丈夫じゃない。でももう後ろへは引けない。自分の出来る限り手を尽くそうと、腹を括った。

「……着きました。ここが美城常務の執務室です。」

「は、はい。」

思わず、声がうわずる。ドアに貼られたプレートには常務室の3文字。それを見て、一気に心臓の動きが加速する。

1度、深呼吸をする。すると震えた息が出てくる。もう1度、深呼吸。今度は震えは無くなった。幾らか心臓の拍動もマシになっている。

ちらりと、待っていてくれた武内さんを見る。目が合うと、武内さんはこくり、と頷いた後、ドアをノックした。

「武内です。比企谷君を、連れてきました。」

ドアの向こうからいいぞ、と声が出た。

失礼します、と声を上げる武内さんによつて、ドアが開かれる。

最後まで、出来る限りを尽くそう。俺の居場所を作る為に。俺なんかに期待してくれる人達の為に。

「失礼します……！」

絶対に、掴み取る……！

「ほう。君が比企谷か。話は聞いている。取り敢えずは君のことを見

極めたい。早速だがいくつか、質問をさせてもらおう。」

今俺に声を掛けた、部屋の奥にある作業機の椅子に座っている彼女が美城常務だろう。整った顔立ちで、ウェーブのかかった黒髪を1つに纏めている。きつとモデルや女優と言われても普通に信じてしまおうだろう。その鋭い相貌は、油断無く俺を見据えていて、その視線に思わず竦んでしまう。さらに、彼女の背後の窓ガラスから差す光によって前に影が差し、威圧的な雰囲気さらに強くなっている。

だが、ここで引くわけにはいかない。震える体を無理矢理止め、震える声も無理矢理直し、はい。と強く、返事をする。

それから俺はいくつか質問を受けた。俺がどんな人間なのか。どんな事が出来るのか。それと、学校での俺の行動の理由——。何でそれを知ってるのかは教えてくれなかった——。それといくつかの質問を、俺は全て嘘をつかず、正直に話した。準備も何もしていないところで嘘なんてついてもこの人には通じないだろうし、なぜかよくわからないが、ここで嘘は、つきたくなかった。

「……そうか。随分と優しいんだな。君は。」

「……いえ、そんなことはないですよ。」

「いや、君は優しい。他人にそこまで出来る者は、そういない。」

一瞬だけ、少し柔らかくなった視線は、またすぐに鋭い物に戻った。「話を戻そう。これが最後の質問だ。これだけは絶対に正直に答えてくれ。もし嘘がわかったら、即、君は不採用だ。だからくれぐれも気をつけてくれ。」

「……はい。」

これが、本命か。思わず身構える。緊張の所為か、身体中から変な汗が噴き出す。同じく緊張でカラカラになった喉も、唾を飲み込んで潤す。

「では、質問だ。君はアイドルという仕事をどう捉えている？」

アイドルという仕事、か。俺にとって、アイドルはどんな存在なんだろう。思い浮かぶのは、神谷とのたわいもない会話や、高垣さんや木村さんにかけて貰った言葉。そして、彼女らが浮かべていた笑顔だった。

少しの時間、考えた後、真っ直ぐに美城さんを見据え、俺は話し始める。

「前は、アイドルっていうのは、上っ面だけの笑顔を貼り付けて、歌って踊って、それに引っかけた奴らから金を搾り取る。そんな仕事だと思っていました。正直、あまりいい印象は持ってなかったです。」

「……ほうっ。」

美城さんの目が険しくなり、一層圧が重くなる。まあ、自分の仕事を否定されるのは、いい気持ちにはならないだろう。でも、何でだろうな。普段じゃ絶対にこんな自分が不利になるようなことなんて言わないのに。今日はずっと、変な感じだ。

美城さんは俺の話が止まっていたのに気づいたのか、眉をぴくりと動かしてから、「すまない。続けてくれ。」と続きを促した。

「はい。」

……でも、それは違いました。最初に高垣さんのライブを見た時、驚きました。必死に歌って踊って、心の底から楽しそうな顔をしていました。何であんな顔ができるんだって思って、追っかけ始めて。あの笑顔を見ると、元気になって、また聴きたいからまだ頑張ろうって思えて、気がついたらどっぴりはまってました。神谷も、木村さんも、笑い方は全然違うけど、みんな、人の心を動かすような、見ている方が元気付けられるような、そんな笑顔をしていました。」

「今は、アイドルは、心の底からの笑顔で元気を、次に向かう勇気をあげる。そんな仕事だと思ってます。現に俺は、彼女らの笑顔に助けられた。ちよつとありきたりで安っぽいかもしれないですけど、これが、今の俺の答えです。」

「……そうか。」

美城さんは、未だ鋭い目を向けたまま、呟く。数秒、俺をじっと見てから、ふう。と息を吐きながら一旦ゆっくりと目を閉じて、直ぐに開ける。

「これで質問は終わりだ。御苦労だったな。早速だが、答えを出そう。」

この場の緊張が一気に高まる。心臓の音が鳴り止まない。口の中

には、既にカラカラだった喉を潤す筈の唾も、もう無い。

それでも、なんとか喉を絞り上げて、なんとかか、はい。と声を出す。一瞬の間の後、姿勢をもう一度正した美城さんから、答えが出される。

「残念ながら社員として雇うことは出来ない。ここ346プロは芸能事務所の最大手だ。まだ17の元高校生など正社員はおろか契約社員にすらできない。社員としては無理だ。君は雇えない。」

「……………え……………あ……………?」

頭が真つ白になる。ダメだった? 覚悟を決めたのに? 高垣さん達に期待して貰ったのに? もしかしたら、ここなら、俺の見つけたいモノが見つかるかもしれないのに? ダメだ。思考がまとまらない。どうすれば? どうすれば? どうすれば???

……………ッそうだ! 説得。説得しないと! このチャンスを、あの人達が作ってくれたチャンスを、掴まないでッ…………

しかし、説得の為の言葉を出す筈の口は、パクパクとするだけで、何も話してはくれなかった。

絶望や苛立ち。焦燥のないまぜにした感情が、俺の顔を酷く醜く歪ませる。ごちゃごちゃな頭で考えるが、何1つとして名案も妙案も浮かばない。それが焦りを加速させ、余計に喋れなくなる。

もう諦めるよ。どこからか、声が響く。その声は無駄にはつきりと聴こえて、さつきまでの俺を小馬鹿にする様に嘲笑っている。これでわかっただろ? もう無理だ。もうお前に出来ることなんて何も無いんだよ。と、昏く、昏く、噛みながら。

……………もう、ダメなのか……………? 俺は、やっぱり、何も出来ないのか……………?

皆さん、ごめんなさい。ごめん、なさい————

「す、すまない。少し間を伸ばし過ぎた。話はまだあるから落ち着け。泣くな。」

少し焦りながら話を切り出す美城さん。

「えつとだな、私は社員として……………は駄目と言った訳でな? その、つまりだな……………」

……？え？社員として？えっと、それって一体……

……ん？社員として……？

………あつ

「つまり、君をバイトとして雇おうとしていたのだが、あくまでバイトだから、その境界線は引いておいてほしくてな。先にそう言っておきたかった。直ぐにバイトとして雇うことは言うつもりだったのだが、勘違いをさせてしまったようで……その、すまない。」

こうして、346プロにはまた1つ、屍が作られたのであった。つて今日俺2回死んでんじゃねーか。仕事しろヒーラー。……あ、いっけね。俺ボツチだから回復かけてくれるような人いないじゃん。

6話

「……んんっ。先程は紛らわしい言い方をしてしまつてすまない。」
「あ、いえ、こちらこそすいません。みつともないところをお見せしてしまつて……。」

あれから10数分後、なんとか今日2度目の大ダメージから復帰した。出来ればこんな羞恥は二度と味わいたくない。だから美城さん。お願いだからもうその話はやめてください。無かつたことにしてください。お願いします……!」

「取り敢えず、そろそろ話を戻そうか。大分逸れてしまつたからな。」
「はい。えっと、俺はバイトとして、雇っていただけなんですよね?」
「ああ。そうだ。と言つても、あまり社員と変わらない時間、働いてもらうがな。」

まあ、今俺は学生じゃなくなつて無職な訳だし、年中空いてるんだから当たり前だろう。

「そうだな……比企谷。君はもう住む家は確保しているか?」

「いえ、家を追い出されてからはずっと野宿でした。」

「そうか。まあ、家があるなら、雨に濡れてぶつ倒れるなんてことほとんどないだろうからな。」

「づっ!……本当に迷惑かけてすいません……。」

「構わん。倒れている者を放っておく程うちは落ちぶれてはいない。」

……そうだな。住居はこちらが用意しよう。就業時間は、午前9時から昼休憩を挟んで午後7時まで。残業や休日出勤の際は、その分の手当を出そう。仕事の内容は主に重要度の低い事務処理とアイドルのメンタル、健康のケア。あとは雑務だな。家賃諸々を引いて月給は25万円程でどうだ?」

「住居を?社宅があるんですか?」

「まあそうだな。アイドル寮がまだまだガラガラでな。そこに入つてくれ。」

「はっ。」

何言つてんだこの人。

「何だその顔は。バカにしてるのか？」

「……まあ、確かに男が女子の寮に泊まるのは、少し非常識だしな。訝しむのも仕方ないか。」

それなら何で……？

「まあ理由は2つある。1つは社員寮にもう空きが無いからだ。プロデューサー業は中々激務だからな。特にライブ前後などの忙しい時期に複数の芸能人を抱える者は、連日徹夜もザラだ。だから皆が通勤時間を減らしたがって寮に入る。その点、アイドル寮は最近出来たばかりで、増やしているとはいえ、今のところは入寮者が比較的少ない。だからだ。」

「そしてもう1つ。これが最大の理由だ。君のコミュ障の改善とアイドルとの会話練習。静さんから聞いたが、君は高校生の頃は所謂ボツチだったらしいからな。当然、アイドルは愚か外の人達ともまともに会話など出来ないだろう？」

「……まあ、そうですね。ところで、静さんって……？」

「ああ。君も知っているだろうが、平塚静さんのことだ。あの人は高校時代の先輩でな。10年程たった今でも偶に飲んだり遊んだり仲間良くして貰っている。」

おお、マジか。あの人美城さんとも知り合いだったのか。っていうか10年前高校生って、そうだとしたらあの人にじゅ——

『……おい、比企谷。これ以上は……わかってるな？』

——ゾゾゾツツ!!?——

「ヒツ!?？」

背後に殺気。思わず後ろを振り返る。そこには、誰もいなかった。「お、おい?…ってどうした!?？」

いきなり振り返った俺に、美城さんは驚き訝しみ、俺の顔を見て更に驚いた。きつと今、俺の顔はこれまでにない程で引きつっているだろう。

「い、いえ。少し殺気が……。」

「……何を言ってるんだ君は。」

「だ、だから殺気が……すいません。なんでもないです。」

なんでもない。なんでもないからその可哀想なものを見る様な冷たい目でこつち見ないでください美城さん。

取り敢えず、謎の殺気の事については置いておこう。

「んんっ。とにかく、君にはアイドル寮に入って貰う。いいな？」

アイドル寮か……。

「あの、納得はしたし、それが仕事に繋がるなら、俺は構わないんですけど、大丈夫なんですか？俺みたいな奴が寮を出入りしてたら。ほら、マスコミとか。それに俺も立派な男ですし、もしかしたらそういう事もあるかもですし、アイドルからの反発もあるんじゃない？。あと小さい子達が怖がりませんか？それで仕事に影響が出たらマズイと思うんですけど……。」

「ああ。それは大丈夫だ。まず芸能人の寮は、『部屋にいる時くらい気を緩めて貰いたい』という社長の方針で、この敷地の内側に建ててあつてな。周りから寮を見えない様にしてある。だから寮を出入りして何かを騒がれる事はほぼ確実に無い。」

……ここ確か渋谷だよな？地価めつちや高いんじゃない？そこに会社だけじゃなく寮まで建てる346って……やめよう。世の中知らない方がいい事もあるからな。

「次は……痴情のもつれとアイドル達からの反発か。確かに妥当な疑問だが、それも大丈夫だ。ウチのアイドルは節度を持って付き合えば恋愛は自由だしな。」

「そうなんですか。てつきり恋愛禁止だと思つてました。」

「あ、だからと言つても行為にまでは至るなよ？まあ、君は女子と行為に至れる程の度胸など無いだろうが。まあ、最悪責任は取れ。」

テツキトーだな！それでいいのか常務として！

「そして君の部屋の周りは比較的そういうことに寛容な者で固めるつもりだ。それでも苦情が来たら言つてくれ。私がどうにかしよう。大丈夫だ。私だぞ？ゆすりのネタなら沢山ある。」

そう言つて美城さんはニヤリと笑う。なんだろう。全然違和感が無い。というか怖い。仕事して違和感さん。

「そして最後だが、それも大丈夫だ。何せ武内で鍛えられているから

な。」

「ああ。なるほど。……つてあつ……。」

「……私は、怖がられていたのでしょうか……。」

横を向くと武内さんが幾らか困った様に、首筋に手を当てていた。どうしよう。さつきから何も話して無かったから完全に忘れてた。訂正をしようにも実際その通りなので何も言えない。心なしか、頭を少し俯けた武内さんが小さく見えた。ごめんなさい。ほんとすいません……。

「それに、君程度の顔で怖がついたらアイドルなんて出来ないからな。」

それは確かに。世の中もつと怖い顔の人もいる訳だし。俺で怯えてたらそれこそアイドルとしての営業なんてできないだろう。そう考えると俺や武内さんで慣れておいた方がいいのかもしれない。

「そういうえば、あまり嫌がらないんだな。もう少し渋ると思っていたんだが。」

「俺はここで働かせて貰う訳ですし、今はそれを言える立場では無いので。俺の心臓に悪いことと、これから負うであろう心の傷から目を背ければ、ちよつととんでもないくらいな高待遇ですし、断る理由がありませんよ。」

「まあ、それもそうか。」

美城さんが納得したところで、一旦一呼吸置く。

「ではもう1度、仕事の内容を確認しよう。就業時間は、午前9時から昼休憩を挟んで午後7時まで。残業や休日出勤の際は、その分の手当を出す。仕事の内容は主に重要度の低い事務処理とアイドルのメンタル、健康のケア。そしてその他雑務。寮は貸し出し、その代金は給料から10万円差し引いて、月額制で基本給は25万円程。これでいいか?」

「……はい。」

俺はここで初めて、仕事をする。まあ、バイトだけど。それでも溢れてしまう緊張と恐怖を払い除ける為、しっかりと、もう1度覚悟を決めてから、返事をする。

「では、歓迎をする前に私から一つ、伝えたいことがある。ここから先、辛くなる事も、嫌になる事もたくさんあるだろう。だが、どうか、最後まで投げ出さずに頑張ってほしい。」

「君は、その年にして、物事の本質を見抜く目を持っている。そして、君は優しすぎる程、他者に優しい。でなければ、自分を顧みず、あんな事をする事はできない。」

「——君には、人を見る才能がある。他所で野放しにしておくには勿体ない程に。」

「え……う？」

俺に、才能……？

「何を不思議そうな顔をしている？誰一人として見ていない中、誰よりも早く高垣を見つけ出して彼女のファンになったのは君だろうか？」

「それは高垣さんが凄かっただけで……」

「誰も見向きもしない中、その凄さを見つけるのは中々難しいと思うがな。」

「そう、なんででしょうか？」

「ああ。そこは私と武内が認めている。自信を持つていい。」

やっぱり褒められるのは慣れないな……。小っ恥ずかしい。

恥ずかしくて、視線を外す。すると美城さんは、仕方ないと言うように、フツと笑った。俺を見るその目は優しく、その仕草にちらりと、あの人の面影が見えた。

「君はここで頑張れば、必ずいいプロデューサーになるだろう。だから、そんなに自分を卑下するな。君は君が思っているよりも価値のある人間だ。少なくとも私達はそう思っているし、君がここに必要だと、思っている。だから、自信を持って、一步一步、焦らずに進んでいってくれ。」

「346プロダクションアイドル部門は、君のことを以下の条件でアルバイトとして雇う。これからよろしく頼む。期待しているよ。比企谷。」

……この事務所の人は本当に、なんでこんなに優しいんだよ……本当に、ずるい。

そして俺は、目の前の美城常務に、勢いよく頭を下げた。

「よろしく、お願いしま——」

「比企谷あああああああ!!?!!?」

……なんでこうなるかな……。……。

7話

勢いよく開け放たれた常務室の扉。そちらを見ると大声で俺の名前を叫んで凄い勢いで突進してくる少女が1人。そう。凄い勢いで突進してくる……つてちよつと待つて速すぎない!??それ俺受け止められないグフウツツ!??

「比企谷あー!比企谷ああ!!?」

さつきまでドアに背を向けていて反応ができなかった俺は、その少女から鳩尾への頭突きをもちに食らい、ぶつかつた勢いのまま背中から倒れこみ、常務のデスクの角に後頭部をもちにぶつけ、最後に倒れた時に追い打ちの様に床に後頭部を打ち付けた。更にその少女は俺に起きた惨劇に気づいて無いのか、トドメとばかりに鳩尾にぐりぐりと頭をねじ込んできた。そんな攻撃に俺の意識は耐え切れる筈も無く……

「何、これ……新手のいじめえ……?」

「比企谷あああああああ!??」

「比企谷君!??」

「奈緒ちやんちよつと待つ……比企谷君!??」

「奈緒速いつてえええええええええ!??」

俺の意識は、プツツンした。

「……ん……。」

意識が覚醒する。いつのまにか寝てたようだ。あれ、俺いつ寝たんだけ??

とりあえず身体を起こして横を見ると、高垣さんと長髪の少女に怒られ正座をしている神谷の姿があった。なんで神谷達がここに……?

「意外に直ぐ起きたな。大丈夫か?比企谷?」

「えつと、大丈夫、です?」

すると武内さんが俺の目の前に猫と、大きめの日本語の文字が印刷された紙が出された。

「比企谷君。この絵は何に見えますか?」

「え?猫ですけど?」

「では、これは何と読みますか?」

「神谷奈緒は太眉。もふもふ。ですね。何ですかこのふぎけた文章。誰が考えたんですかこれ。」

すると2人はホツとしたように息を吐いた。

「思考は正常のようですね。よかったです。」

「え?なんで頭の心配を?俺なんかやらかしましたか?」

「いや、あんなに強く頭を打ち付けていたら誰でも心配するからな?覚えてないのか?君は神谷にぶつかられて私の執務デスクに頭をガツンとやったんだぞ?まあ、念の為今度病院に行つて検査してきてくれ。」

「えっと……。」

その瞬間、頭の中にフラッシュバックするあの惨劇。あれ神谷だったのか。道理でなんか毛量が多いと思つた。にしても、あいつも少しゆっくり来れなかつたのかよ。もし頭が逝つてたらシヤレにならんぞ……。

「お、俺よく生きてましたね。」

「本当だ。今回ばかりは流石にヒヤヒヤしたぞ。」

「神谷さんを止められず、申し訳ありません……。」

「あ、いえ、武内さんは悪くないじゃないですか!」

「そうだよ。今回プロデューサーはどこも悪くない。あんないきなり来たら誰も反応なんて出来ないよ。」

声のした方を振り向くと、さっきの長髪の少女がこちらに歩いて来ていた。向こうでは高垣さんが未だお説教を続けているから、きつとあちらは高垣さんに任せて来たのだろう。

「ウチの奈緒がごめんね。大丈夫?どこか痛いところはない?」

そう言つて心配をしてくれる少女をもう1度しっかりと見てみる。少し黒の混じつた落ち着いた色の茶髪に、鋭めの目つき。深い緑の瞳

には、真つ直ぐな意思が感じられる。可愛いと言うよりは美しいと言う方がしっくりくる落ち着いた印象で、全体的に大人びて見える。しかし、少し着崩した制服や、まだ少しあどけない顔立ちから、年相応の幼さも感じられる。

……って俺年相応の幼さとか随分と偉そうに言ってるけど、あんまこいつと年変わらないだろ。いやホント、何様だよ俺は。……あ。お一人様か。

下らない1人コント(笑)は一回置いておいて、こいつは何度か神谷との話に出てきた1人に特徴が一致する。確か名前は……

「渋谷凛……だっけ?」

そう名前を呼ぶと、少女の目が少し驚いた様に見開く。どうやら当たりの様だ。

「知っててくれてたんだね……ありがとう。」

「いや、神谷との話の中でお前が出てたのを少し覚えてただけだ。」

「それでも、知っててくれてたことには変わらないから。ありがとう。」

「お、おう。」

にこりと笑った彼女の笑顔に、不覚にもドキツとしてしまう。

「ん?……ふふっ。顔赤いよ。ちよつと照れてる?ドキツとした?」

そう言つて渋谷は悪戯っぽく笑つた。

「うっせ。照れてねえよ。生憎と長年のぼっちゃつて来たからな。お前見たいな可愛い女子にこんな事される耐性なんて無いんだよ。あと照れてねえ。」

「可愛い女子つて、何?口説いてるの?」

そう言つて渋谷は携帯を取り出す。

「え、あ!いいいや、口説いて無い口説いて無い!頼むから通報だけはしないで下さいお願いします!?!?」

俺は今までで最高のスピードでDOG E Z Aを敢行した。職場でアイドル口説くとかこれ完全にセクハラどころか事案じゃねーか。雇つて貰つて1時間もしない内に社内問題で逮捕とかマジでシャレになんねえ。

「ご、ごめんごめん。ちよつとした冗談だよ。通報なんてしないよ。」

……でも可愛い女子か。奈緒に妬かれちゃうな。」
そう言うと、渋谷は戯けた様にくすりと笑う。

「じゃあ、改めて自己紹介。渋谷凜。高校1年生。よろしく。」

あれ……？反応が素朴だな。俺のDOGEZASルー？普通戸惑うか引くかするのにな。やっぱり芸能人はこんな事じゃ動じないのか？すげーな芸能人。

芸能人の肝の座り具合に驚いていると、何故が渋谷がこちらをじつと見てきた。高垣さんと神谷もそうだけどそれ割とマジでやめてほしい。もうね。やばいの。心臓が。

「な、何だ？」

「自己紹介。まだ聞いてないなって。」

「え、あ、ああ。そうか。わかった。比企谷八幡。高2……だったかもうやめたからな。取り敢えず、ここで働くことになった。今後ともよろしく頼む。渋谷。」

「あ……そっか。楓さんから聞いたよ。なんて言うか、災難だったね。」

「ああ。そうだな。ホントに災難だった。」

「うん。でも、私達は八幡を傷つけたりしないから。もう、八幡のあんな顔は、見たくない。」

「俺のあんな顔が見たくないって……俺達つてどつかで会ったか？」

「あ、奈緒と一緒に八幡を見つけたのが私でね。その時ホントにやられて死にそうな顔だったから……。」

なるほど。確かにあの時はロクな顔してなかっただろうな。

それにしても、いきなり名前呼びつてすげーなこいつ。同じアイドルの神谷や高垣さんでさえしてないぞ。

「随分と気にかけてくれるんだな。あと八幡つて……。」

「まあ、奈緒と加蓮の大切な人だからね。それに、奈緒の話を聞いた限りじゃ、そんな悪い人ではなさそうだし。」

「俺はお前が思ってる程いい奴じゃないと思うぞ。」

「それを決めるのは私だから。」

「……さいですか。」

「それと、これから一緒に同じ所で働くんだから、他人行儀だとなんか嫌じゃん。年もそんなに離れて無いしいいかなって思ったんだけど、嫌だったかな？」

「別に嫌って訳じゃねえよ。ただ女子に名前呼ばれるのが慣れてなくて、心臓に悪いだけだ。だから、その、好きにしてくれ。」

「うん。わかった。」

ここで一旦会話が止まる。そういえば渋谷が話しかけてきてから武内さんと常務の声が聞こえて来ない。不思議に思っただけを見渡すと……

「……なんでニヤニヤしてるんですか。常務。」

渋谷が言った通り、俺たちから少し離れた所でニヤニヤと笑っている常務がいた。それもなんか微笑ましいものを見る笑い方である。ああいう顔で見られるとなんか居たたまれなくなるよね。

「フツ。何でも無い。ここは若い集に任せて私は退散するとするよ。」

そう言うと、常務は颯爽と部屋を出ていった。

因みに武内さんは神谷たちの所でなぜかオロオロしてる。きっとそろそろ説教を終わらようと思ったけど、なんて言って止めればいいのかわかんなくてオロオロしてるんだろう。

「それにしても、ホントに目が腐ってるんだね。奈緒から聞いてたんだけど予想以上でびっくりしたよ。確かに死んで3日経った後の魚の目みたい。」

「うっせ。ほっとけ。元々だ。」

俺の反応が面白かったのか、渋谷はあははと声を出して笑った。

「まあ、とにかくよろしくね。八幡。あと、私のことは凜でいいから。」

「お、おう。よろしく頼む。り、り……」

……なあ。やっぱり慣れてきたらでいいか？流石にハードルが高すぎる。ちよつと無理。」

こればかりは仕方がない。いやだって、仕方ないじゃん？コミュニケーションのぼっちがいきなり名前呼びとか、木の棒で魔王倒すくらい無理ゲーだよ？むしろ俺よくやったと思います。俺結構頑張ったよ。わかる人はわかるよね。こんなに話せた俺すごい。

……これを毎日やらんとあかんのか。つらい。

「どうしたの？今なんか目が更に腐ったんだけど。」

「気にすんな。いつもの事だ。」

「そ、そうなんだ……。ま、まあでも、なるべく早く言ってくれるようになつてほしいな。約束だよ。」

「ああ。わかった。改めてこれからよろしく頼む。渋谷。」

「うん。よろしく。」

そう言っていると渋谷はスツと手を差し出して来た。

「え？何？」

「ほら、手。出して。」

「え。俺何されるの？」

「いいから。怖くないから。」

「その言い方は確実に何かある言い方なんだが。本当に俺何されるの？」

そう言いながらおすおすと手を出すと、渋谷は出していた手で俺の手を握る。所謂握手。シエイク・ハンスである。そのまま10秒の間2人揃って沈黙する。

「……な、何やってんですか？」

「ん。握手。」

渋谷はその小さい手で俺の手をにぎにぎしてくる。その手は思ったよりひんやりとしていて、握手とはいえ手を握られている状況にドギマギしてしまう。それを表に出さないように、そっぽを向いて、手を上下に動かして答えると、それで渋谷は満足したのかパツと手を離れた。

「じゃあそろそろ奈緒達の所行こうか。プロデューサーも困ってるしね。」

「おう。」

そうして、俺達は未だに説教を止められずオロオロしている武内さんを助けに行つたのだった。

8話

「比企谷ごめん！後先考えずに突進しちゃって、ホントにごめん！」
「ホントだよ全く。部屋入ってくるなりいきなり突進とか何考えてんだお前は。」

「うう……。ごめん……。」

その後、渋谷がまた説教に参加したり、武内さんが更にオロオロしたり色々あったが、なんとかして神谷への説教を止め、今は神谷からの謝罪を受けている。まあまあ話す知り合いが、俺に思いつきり頭を下げているこの状況に慣れてなくて、なんだかいたたまれない気分になる。

「でも、本当にもうこういう事は無い様にしてね。今回とつても危なかったし、次は本当に相手を怪我させちゃうかもしれないんだから。」
「はい……。」

「それにしても、八幡はよくあんなに早く起きたね。凄い強く頭を打ってたから凄く心配してたけど、起きるの早すぎてびっくりしちゃった。」

「お、おう。因みに、俺どれくらい寝てたの？1時間くらい？」

起きてから時間見てなかったから、さつきからどれくらい経ったか知らないんだよね。

「ううん。もつと短い。」

「じゃあ3分。」

すると渋谷が少し驚いた様に見開いた。

「正解だよ。2回目で当てちゃうのか。凄いな。」

え、マジで？ボケのつもりで言ったんだが……ていうか俺起きんの早すぎない？ゾンビなの？目だけじゃなく全身くまなく腐っちゃったの？じきにゾンビウイルスもとい比企谷菌振りまいてゾンビ帝国でも作るの？なにそれ暗そう。

「マジか……。全然時間立ってねえじゃん。」

「うん。本当に早くてびっくりしたよ。八幡が倒れてみんな慌てて対応してる間にいつのまにか起きてたんだから。」

「神谷の突進って思ったより勢い無かったのか？」

「いえ。比企谷君が少し浮いた程ですから。勢いが無かった。というのは、無いと思います。」

「「浮いた!?」?」

「ご、ごめん……。」

「よ、よく生きてたわね……。」

「本当ですね。多分、次アレを受けたら本当に死ぬと思います。」

「しッ!?」?

今度は神谷が目を見開く。え、何?理由がわからないんだけど。今の言葉のどこに驚く要素があったんだろう。

そう思っって首を傾げていると、渋谷がぼしよぼしよと耳打ちをしてきた。

「さつきから奈緒こんな感じで。多分八幡が死ぬってニュアンスのことを言うところなりアクションで。」

チラリと神谷を見てみると、俺の冗談を真に受けたのか、何かとても不安そうな顔をしている。目なんて若干涙目で、相当取り乱しているのがわかる。確かにこれは異常だ。

「そ、そうなのか?」

「うん。心当たりない? 私達はさつきぱりなんだけど。」

「い、いや、俺もにや、無い。大方学校でなんかあつたんじゃないか?」

「ホント?」

「あ、ああ。」

というかその耳打ちはやめようか。息が耳にかかって俺の心臓がハートでブレイクが壊れちゃうから。

「そっか。やつぱりそうだよ。ありがとう。」

やっと俺の回答に満足したようで、渋谷は耳打ちをやめた。さつきから息がかかっていたので、耳が涼しく感じる。……べ、別に耳打ちが終わって少し寂しくなったとか、そんなんじゃないんだからねっ!!
?

「お前ら顔赤くして一体何を話してたんだよ?」

ジト目で神谷が話の内容を聞いてくる。だがこの内容は神谷には

あまり聞かれたくない。だって心配してた本人にそういう話の内容聞かれるって恥ずかしいじゃん。さあ。さつきから考えてて、全然わかんないけど、どう誤魔化そうか……。

「え、あ、えっと、な、奈緒可愛いって話をしてたんだよ！」

「か、かわつ!!?」

そう言われて顔を真っ赤にする神谷。ナイス渋谷。いろんな意味で。

と、とにかく、話を逸らすチャンスができた。

「まあ、とにかく次からは気をつけろよ？お前一応アイドルなんだから。こんなんで傷害事件なんて起こしたらお前も周りもシャレにならないぞ。」

結構無理矢理な話題転換だったけど、どうなんだろう。少し心配だが、大丈夫か？

「え？あ、うん。もうしない。」

と神谷。よかった。ここで神谷が話に乗っからなかったらどうしようと思ってたが、このままいけば話題の転換ができそうだ。

「ところで、どうして奈緒ちゃんはあるのに急いでたの？学校で何かあったの？」

気を使ってくれたのか、高垣さんが神谷に別の質問をした。それは俺も知りたいところだし、丁度いい。

「あれ、高垣さんも知らなかったんですか？」

「うん。まだ学校にいる筈の時間に奈緒が来たって思ったら、凄く焦って八幡の居場所を聞いて行っちゃったから。」

2人共知らなかったのか。てつきり2人には何か大雑把でも話してるのかと思ってた。

「あの時の奈緒ちゃんの顔、凄く焦ってる感じだったわよね。」

「確かに凄い形相でしたよね。それに、なんだか今にも泣きそうな顔してた。」

何でそんなに焦ってるんだよ。しかも何泣きそうって。どんだけ俺のこと心配してたんだよ……。いやまあ、確かにそりや人が死にそうになってたら心配もするし、どうせ学校で何かしらあったんだろう

けど。

「で、学校で何があったの？奈緒。」

「いいい、いや！学校じゃ何もなかったって！」

「やっぱこいつわっかりやすいな。目が泳ぎまくってる。」

「じゃあ何であんなに焦ってたの。」

「そ、それはその……ひ、比企谷が心配で！」

「本当？」

高垣さんの見透かす様な目が、神谷に向けられる。神谷はその眼差しから逃げる様に視線を泳がせ、答えをはぐらかす。

それが幾ばくか続き、高垣さんが口を開きかけたこの時。きいと扉の開く音がした。全員がそこを振り返ると、そこには俺には見覚えの無い、少し老けた、そこはかとなく気怠げな目をした男の人がいた。

「やばっ」

「失礼します……っと。いたいた。」

そう言うとその人は俺達のいる方に向かってつかつかと歩いて来る。

「あ、楓さんのプロデューサーだ。」

あの人が高垣さんのプロデューサーか。思ったより普通な感じだな。高垣さんのアレダジャレを黙認してるからもつとこう、うん。ほら……そう！個人的！個人的な人だと思ってた！

「ほら。仕事だ楓。時間押してるからサボってないでとつとと行くぞ。」

仕事だったのかよ。

「ちよつと！まだ奈緒ちゃんから話を聞いてな……」

「そもそも仕事なのにサボってんじゃねえよ。俺の仕事が増えるだろうが。じゃあ行くぞ。では武内さん。そこの君たち。楓借りてくよ。」

そう言うって、高垣さんのプロデューサーはガツと高垣さんの襟首を掴むと、そのまま高垣さんを引きずったまま歩き出す。ってかサボってたのかよ。

「えっ？あ、はい。」

ちよつと待つてええええ、と悲鳴をあげながら、ずるずると引きずられていく高垣さん。あの人すげえ手慣れてんなあ。しよつちゅうあんなかんじなんだろうな。

「……とにかく、学校で何があつたの？ 奈緒。」

「そ、それは、その……。」

口ごもり俯く神谷。その顔は前髪に隠れて見えないが、もじもじと弄る手は微かに震えている。

……はあ。

「なあ。とりあえず、それは神谷が落ち着いてから聞けばいいんじゃないか？」

「え？」

「あんなに取り乱してたんだ。どうせ今聞いても俺達が納得する様な答えは出ないだろうし、少し落ち着かせてから聞いた方が効率がいいだろ。」

「八幡何を……ああ。うん。そうだね。そうしよつか。」

「はい。そうしましょう。」

渋谷と武内さんは、神谷を見て納得した様に頷いた。

「2人共理解が早くて助かります。」

「え？ え？」

一方で、当事者の神谷は突然のことについて行けず、あたふたしている。まさか、何でいきなりそんな意見が出るんだ？ とか馬鹿なこと考えてるんじゃないだろうな？ あれかな？ 自分が動揺してんのバレてないか思ってるのかな？ そうだとしたら、何というか、お可愛いこと。ていうか可愛い。

そんなことを考えていると、またドアが開き、今度は何かのプリントを持った常務が入ってきた。

「比企谷。契約書を持ってきた。これにサインを書いて貰うからそこに座ってくれ。それと武内。もうすぐ^{アスタリスク}*の2人の迎えの時間だ。ここはいいから行ってこい。」

「はい。では、失礼致します。」

そう言つて、武内さんは部屋から出て行つた。

「……高垣はどこへ行つた？」

「あ、高垣さんならさつき高垣さんのプロデューサーに連れて行かれました。仕事あつたみたいです。」

「そ、そうか。ならさつき聞こえたのは高垣の……。あの25歳児め。」

やはりいつものことだったんだろう。こめかみを抑える常務を見て俺達は苦笑いを浮かべる。

「まあとりあえず、これを書いてくれ。」

そう言われて渡された契約書に、じつくりと目を通し、名前を書く。

「あの、印鑑のところはどうしましょう？」

「ああ。そういえばそうだったな。拇印で押してもらえばいい。今朱肉を用意するからちよつと待っててくれ。」

それから間も無く、常務が朱肉を持ってきた。それを俺の手元にコトリと置くと俺の対面に座った。

「無いとは思うが最後にもう1度確認させて貰う。君は本当に、ウチで働きたいか？」

常務から出された問いに、俺は直ぐに答えず、先に指に朱肉をつけ、拇印を押す。

「……はい。働きたいです。働かせて下さい。」

すると常務はフツと笑った。ニヒルに笑うその姿やつぱり、少しだけ、平塚先生あの人に似ていた。

「いいだろうー！346プロダクションは君を今一度歓迎しよう。ようこそ。346へ！」

「まあこれで君の正式なアルバイトになった訳だが、残念ながら、今仕事を教えるはずの者が臨時のアイドルの付き添いでいなくてな。やらせられることが無いんだが、どうしようか？」

「え、じゃあ仕事はいつからになるんですか？」

「まあ、彼女の都合にもよるが、大方明日には始まるだろう。だから今

日は仕事は無いんだが……。何かあるか……。ああ。」

常務はチラリと時計を見るとなにかを閃いた顔をした。そして財布を取り出すと、諭吉さんを俺に渡してきた。

「なあ君達。ちようどいい。年もあまり変わらないしこれでなにか食べてこい。お釣りは比企谷がとっておけ。」

「はっ。」

時計を見てみるともうお昼頃。確かに食事をするにはちようどいい時間帯だ。でもあれ。おかしいな？さつき朝だったと思うんだけど。まさか筆者がめん d O ★%アレか。集中してたりすると体感時間が短くなるアレか。そうだなソウニチガイナイ。

「あ、ちようどいいね。私も八幡のこといろいろ知りたいし。奈緒もいいよね?。」

「え?あ、お、おう。」

「い、いやでもこれは貰えないですよ!俺まだ何もしてないし……。」

「君は今一文無しなんだろう?。」

「……そうですけど。」

「やはりな。どうせたった1か月だ。そこまで手痛い出費でもない。給料が出るまでは食費は私が出すからそれは受け取っておけ。」

「でも、1ヶ月の食費なんて、俺直ぐに返せないです。」

「返さなくて構わん。返すなら出世して企業に貢献して返せ。」

「ですが……いや、はい。わかりました。ありがとうございます。必ず、返します。」

これ以上は、しつこいし、せつかくの常務の好意に失礼だろう。それに。

「君は思いの外強情だな……。まあわかったなら早く受け取ってくれ。」

それに、この人は俺に期待してくれているんだろう。俺なんかのどこに期待してるのかはわからないが、その期待に応える為に、このお金は貰ってもこう。これを返す為に、自分に注がれる期待から逃げ出さないように。

「ありがとうございます。」

「あつ、ありがとございます！」

「気にするな。そろそろ混み合ってくるだろう。変装もしておけよ？」

「はい！行つてきます！」

「……行つてきます。」

「行つてきます。じゃ、行こっか。」

そう言つて、俺達は踵を返し歩き出す。

「ああ。行つてらっしゃい。車と身バレには気をつけてくれ。」

常務の言葉を背に受けながら、神谷と渋谷と、どこの店に行くか話し合う。

まだ仕事は無いけど、俺は仕事に就いたことを再認識し、右隣を歩く2人を見て、気を引き締める。

こうして俺は、新たな生活のリスタートを切った。

9話

あの後、どこの店に行くかを軽く話し合った俺達3人は、その話し合いで決まった店に向かっていた。

「そろそろだな。」

「うん。今日はなに食べよっかな……。」

「まあなるべく安いのにしような？一応、そのお釣りが比企谷の小遣いになるんだから。」

「できたらなるべくそうしてくれ。お金足りない。お、見えてきたな。」

漸く目当ての店が見えてきた。子供からお年寄りまで、幅広い客が出入りする店内は、いつ来ても賑やかだ。自動ドアの上に取り付けられたプラスチックの真つ赤な看板には、黄色く輝くMの文字。

そう。現在、日本中の誰もが知っているだろう。日本一有名なファーストフードチェーン店。くしゃみをする让世界が吹き飛ぶ、あの愉快なアイツがいる店。偶に俺達の好きなプリティでキュアキュアなおもちやが貰える店。そう。マ●クである。

数ある飲食店の中からここを選んだ理由は簡単。安いからだ。現在無一文の俺は、今のところ常務から借りた1万円で食いつながなければいけない。少なくともこれで5日は持たせたいところだ。

店内に入ると、やはりというか、凄まじく混んでいた。もう千葉なんて比じゃないくらいに。

買つてから席が無いなんて事があると面倒なので、とりあえず先に席を確保することにした。3人で座れる席を探していると、運のいいことに直ぐに空いている4人席を見つけた。そこを占拠し、席を確保する。そしてものを盗まれたり勝手に席を取られない様に渋谷に残って貰い、神谷と注文をしに行った。

レジ前の列に並んで2分くらいした時、ウィーンと、自動ドアが開く音がした。するとドアの方を向いた神谷が「あ、おーい！かれーん！」と呼びかけていた。どうやら知り合いだったらしい。

「え、奈緒？なんでここに……つてええええ！！？」

そちらを見ると、さながらパンのコロネの様にカールをかけた、どこか見覚えのある顔立ちをしたツインテールの美少女が、スマホを持ったまま俺を見て固まっていた。なんだろう。俺なんかしたかな？あ、俺みたい不審者と友達が一緒にいたらそりゃ驚くし固まるわ。

「え!?あ、ちよ、な、なんでこんなところにハ、ハハチ……」

お、慌て始めたな。これはそのまま通報ルートだ。だが大丈夫。俺にはとっておきの秘策があるのだ。見よ！俺の最終奥義!!?」

「すいません通報だけはしないでくださいお願いしますう!!?」

「ちよつと!??な、なにやってるのハチ君!??なんでいきなり土下座してんの!??え、ええつとこういう時はどうすればば」

「馬鹿!!?早く頭上げろ比企谷！人目が集まっちゃうんだよ！」

「え?あつ……ごめんなさいいい!!?」

「だから土下座をやめろおおおおお!!?」

騒ぎを聞きつけた渋谷が俺の頭ひっぱたいて連行するまで、俺の土下座は続いたのだった。

「すいませんでした。」

「……。」

「……はあ。」

「あ、あははは……。」

あの後、渋谷に連行された俺は、注文から帰ってきた神谷と、コロネの美少女の前で頭を下げていた。あ、土下座はしてないよ?いやだって、さつき渋谷さんが次やったら……なんでもない。渋谷さんはなんも言っってなかった。なんも言っってなかったからこつち睨むのやめて下さいお願いします。

「と、とりあえず。頭上げてよ。驚いただけでアタシ達そんな怒って無いから。ね。2人とも。」

「ま、まああたしは別に怒って無いけど……。」

「怒ってるけど、次から直してくれば大丈夫だよ。そもそもいきなり土下座する機会なんてそうそう無い筈だしね。ね？」

「お、おう。すまん。これからは気をつける。ありがとう。」

「よしーこの話はこれでおしまい！じゃあとりあえず食べよう！食べながらいろいろ話せばいいしー」

「うん。」

「そうだなー」

それから、俺達はそれぞれ買ったハンバーガーをぱくぱくと食べ始めた。俺、神谷、渋谷の3人はワンコインのセットを食べている。俺のお財布事情を案じてくれたのだろう。気を遣わせてしまつて申し訳ないがこちらとしてはかなりありがたい。

そして北条だけはポテトを食つていた。

ポテトだけである。それも結構こんもりと。どうやらセツトに費やす金を全てポテトに回したそうさ。そんなんで栄養大丈夫なんだろうか。マツカンキメてる俺がちよつと心配するレベル。そんなんで太らないんだろうか。塩分過多で高血圧とか意外とシャレにならないぞ。

というか、いろいろ話そうとかそんな感じなこと言つてたくせに、当の本人は相槌ばかりで全然喋つて無いんだが。あとなぜか微妙に気まずそうな顔で頬を赤らめて俺をチラチラ見てくるのはなんなんですかね。いいですね。実にいい。可愛い。

「あ、あのさ。比企谷、八幡君……だよね？」

「え？あ、おう。そうだが……。」

なんで俺の名前知ってる……まあ、十中八九さつき神谷に教えてもらつたんだろう。それ以外に俺の名前を知る方法なんてないし。やだ八幡レアカヤラみたい！需要0どころかマイナスだけど！

「じゃ、じゃあさ。アタシ北条加蓮つて言うんだけど、覚えて、ない？」

……えつと。覚えてないつて、どういうことだろう。心当たりが無いんだが。

「あー。すまん。身に覚えが無いんだが、どっかであったことあったか？」

「え……。あ、あはは、そっかー。覚えて、ないかー……。」

俺の返答を聞き、シヨックを受けたように目を見開いた北条は、直ぐにどこか引きつった笑顔を貼り付けながら、俯いた。

なんだよその反応。なんでそんな傷ついたみたいなの……。どこかでこいつと会って……。いや、そんな覚えは無い。

ダメ元でもう一度、北条を見てみる。独特な形のツインテールをした明るい茶髪と、若干着崩した制服。爪にはミント色つて言うんだっただか、薄い緑のネイルをしている。さっきまで纏っていた雰囲気は明るめで、正に今時のギャル、といったものだった。他には、薄いメイクの下からでもわかる整った顔立ち……。くらいか。ダメだ。全くわからない。

未だに思い出せず悩んでいると、ふと、白いカーテンが風にたなびく、真っ白な部屋の光景が頭によぎった。

……。！今のは、あいつの病室？いやでも、あいつがアイドル？でも確かに、あいつの苗字は北条だったはず……。いや、あいつとは雰囲気が全く違った。いやでも、まさか、な……

今よぎった予想を確認するなら……

「……ちよつと髪を下ろして貰ってもいいか？」

「……え？」

北条は思わず顔を上げる。目は潤み、充血して少し赤い。惚けた様に発したその声は鼻声で、若干上ずっていた。

「あ、いや、すまん。嫌だったなら無理には言わん。」

「え？……あ！ううん！大丈夫！わかった。下ろすね？」

「お、おう。」

そう言つて、北条は髪ゴムを外し、髪を下ろした。

「……マジか。」

人の雰囲気とはこうもガラリと変わるものなのか、ポロリと声が出るくらいには驚いた。髪を下ろした北条は、高校1年の春、入院先の病院で会った、どこか儂げな雰囲気を持った少女、北条加蓮その人

だった。

「お前、北条……なのか。」

「……っ！……あはっ！さつき言ったじゃん！全く。ホントに気づくの遅いんだから！女の子を泣かせるなんて、ダメだなあハチ君は！」
一瞬、ポカンと惚けた表情をした北条は、次の瞬間にはぱあつと、心底嬉しそうな、そしてホツとした様な明るい表情を浮かべた。

「あ、あのなあ。一年以上間が空いてて、しかもそんなに雰囲気変わったたら、そんなの気づかぬえよ。……でもまあ、すぐに思い出せなくて、すまん。」

正直、北条には本当に申し訳ないと思っている。友達だと思ってた人から名前すら覚えられてなかった時の悲しみは尋常じゃないからな。ほんと、なんで俺の名前忘れるんだよ武田君。知り合ってみんなで遊んでから3日しか経ってなかったじゃないか。あの時かくれんぼしてたらみんな見つけられなかったしなあ。みんな隠れるのうますぎだろ。

「ふふっ。いいよ。許してあげる！でも次は無いですよ？」

やっぱり北条は、根は素直で、とても優しい少女なんだろう。俺に名前を覚えられて無くて、涙目になる程傷ついていたのに、貶すこともせず、許してくれたんだから。

「……おう。」

それから、少しの間、なにかをこらえる様な仕草をした後、っはああー、と大きく息を吐いた。

「でも、本当によかった。ハチ君がアタシを思い出してくれて。本当に……。」

「お、おう……？」

「これからずっとずっと！よろしくね！」

そう、花が咲いた様に笑う北条は、なんていうか、うまく言葉にできないけど、とても可愛くて、心臓の動きが速くなるのを感じた。

「おっ、おうーよ、よろしく頼む。」

なんだか気恥ずかしくなって、北条から目をそらす。そらした視線の先にはなにかを悟った様にニヤついた渋谷と、なぜか俺たちの方を

見てぼーっとしてる神谷がいた。

「へえ……。」

「ホウジヨウ？ハチクン？……えっ」

「……。」

「……あはは……。」

「お、おい加蓮。まさか昨日言ってた、えっと、その、あの人ってまさか……」

「えへへ。……うん。ハチ君のことだよ。」

神谷はそれを聞いて、1、2秒固まった後、ゆっくりと肩を震わせながら俯いていった。え、なんだあいつ。なんか怖いんだけど。

渋谷は更にニヤつきが増していた。だから怖いよ。なんなんだよ。

「ど、どうしたの？」

若干引き気味でさく北条。気持ちはわかる。

「……しもだよ。」

「え？」

「私もだよ。私も昨日言ってたのは比企谷のことだよ。」

その言葉に、この場が完全に沈黙した。渋谷さんは堪え切れなくなられたのか、机をバンバン叩きながら吹き出しておられた。……もうこいつには触れないでおこう。

「……。」

2人は互いに見つめ合って沈黙する。北条がポカンとする一方、神谷は何かを悟った様に互いを見つめ合う。

見つめ合って10数秒。とんでもない偶然を呪った神谷はやけになって。そして今やっとな今起こった事象を理解した北条は驚きに顔を染めて。

「ええええええええええあああああああ!?？」

このマ●ク346プロダクション前店店内で二度めの絶叫が響いた。俺だけ店員さんに叱られた。解せぬ。

10話

「あ、危なかったね……。」

「マジで、ヒヤヒヤした……。」

「アイドルになってこんなスキャンダルが怖くなったのは初めてだよ……。」

「……すまん。マジですまん。」

その後、俺達は逃げる様に店を後にした。スキャンダルとしてネットに拡散されて無いようにというダメ元な望みと、現実的に考えた身バレの確率とその後の炎上の未来に覚える絶望と恐怖を抱え、事務所に帰った。しかし、奇跡的に、本当に奇跡的に、俺達は身バレしておらず、間一髪、渋谷達のアイドル人生はなんとか守られたのであった。この時ばかりは本当に神様に感謝しました。助けて下さった神様のお名前がわかったら速攻でその神様の宗教に入信するか創るくらいには。

「二「よかつつつたあー……。」三」

炎上も無いのが確認できて、全員が張り詰めた糸を緩める様に力を抜く。嫌かって？当たり前だ。炎上なんて嫌に決まってる。それで喜ぶのは真正のDMかクソ雑魚メンタルの炎上野郎だけだ。その証拠にほら。神谷なんかは炎上してないことに安心して力抜きすぎて「おわっ」って言いながらソファから落ちた。ちくしょうかわいい。

「さっきから何回も言ってるけど、本当にすまん。浅慮だった。今回は奇跡的にバレなかったとはいえ、本当に危険だった。」

そう言って3人に頭を下げる。目の前3人は驚いているが、自分のこの行動が大げさだとは思わない。あと一歩で彼女達に多大な迷惑をかける所だった。もつと深く考えて、行動するべきだった。

「そ、そんな!? 頭上げてよ八幡!」

「あ、アタシ達だって叫んだんだしお互い様だよ! ねえ奈緒?」

「あ、ああ! だからそう気に病まないでくれよ? な?」

「いや、慰めてくれるのは嬉しいが、それも俺の監督不行き届きだ。止められなかった俺にも責任がある。」

「そ、そんなこと」

「ありますよ。」

北条の声を誰かの声が遮った。思わず全員がそちらに向く。

アイドルにも劣らない整った顔立ちに、茶髪の三つ編み。蛍光色のパリツとしたスーツをきつちりと着こなした少し華奢な身体は、女性特有の柔和さを感じられる。しかし彼女の纏う雰囲気はどこか謎めいていて、第1印象は掴み所がない人だな。というものだった。

その声の主は、今まで俺達を手伝ってくれていた事務の女性。千川ちひろだった。

「責任は間違いなく比企君が負いますよ。例え彼が悪くなかったとしても。」

「……どういうことですか？」

千川さんの発言が気にかかったのか、ムツとしながら聞く渋谷。

「簡単なことですよ。凛ちゃん達はアイドルで、比企谷君はこの職員です。彼がどんなに周りに気を使って行動していたとしても、アイドルが問題をおこしたら、それは比企谷君も責任を取ることになります。アイドル達の行き過ぎた行動を抑えるのも、私達の仕事の1つですから。もし、貴方達が問題を起こしたとすれば、叩かれるのは貴方達ですが、それと一緒に比企谷君や関係者の人達も同じ様に叩かれます。教育不足だと。お前はまともなアイドルの教育すら出来ないのか、と。」

「それに、今回は比企谷君も目立つ行動を取ってしまっています。346の職員として、これは看過できません。比企谷君はまだ346の職員としての自覚が足りない。アイドル達と親交を深めようが恋仲になろうが別に構いませんけど、この業界は、ちよつとした間違いで一瞬で潰れるんです。もつと気をつけて行動してください。」

「はい……。」

千川さんすつとは目を細めて俺達を見据える。全くもってその通りだった。ぐうの音も出ない。千川さんの正論に、俺達は何の反論も返すことが出来ず、顔を伏せる。

「はい！今回はどうやらバレた訳でもない様ですし、特例で今回は不

問にしましょう！次からは、気をつけてね？」

パチン。と手を叩く音が聞こえ、驚いて顔を上げると、そこには真剣な顔を崩し、快活な雰囲気をつらした千川さんが、明るく今回の件を不問にしてくれていた。本当は、今回の件を不問にしてくれたことに驚いて、感謝しなきゃいけないんだろうけど、俺達は、千川さんの速すぎる切り替えに驚いて、とうか戦慄して固まってしまった。

なんか、千川さん怖いんだけど。切り替え速すぎない？何考えてんのか全然わかんないんだけど。

「あれ？どうしたのみんな？そんな驚いた顔して。おーい？」

「あ、すいません。ちょっと驚いてました。」

「え？あ、ううん！失敗なんて誰にでもあることだから！比企谷君がちやんと反省して次に活かしていけるなら、そんなに気にしなくても大丈夫！それに、常務と武内さんが認めた子だから将来が楽しみだしね。こんなところでいきなり躓かせるのはもったいないですから♪」

どうやらうまく誤魔化せたようだ安心あんし……い、いや？別に俺嘘ついてないし？本当の事だし？ちょっと引くくらい切り替え速すぎて怖かったなんて思っていないし？

そういえば、千川さんは怒っていたさつきとは違い、物腰の柔らかい少しフランクな話し方になっている。これも、千川さんなりの切り替えのけじめのつけ方なんだろうか。

「じゃあ、これでこの話は一旦終わりにして、早速お仕事に取り掛かって欲しいんだけど。いきなり慣れないお仕事っていうのは辛いだろうし、先ず今日は寮に入って身体を休めてもらいます！きつと疲れも溜まつてるでしょう？」

「あ、え。え？」

「さあ！時は金なりですよ！行きましよう比企谷君！あ、凜ちゃん達はこの後プロデューサーさんが来るから、合流してレッスンに行つてね！」

「え？は、はい……？」

そう言つて千川さんは俺を引っ張りながら颯爽と部屋を後にしたのだった。

「……途中から完全に空気だったよね。アタシ達。」

「あたし、3回しか喋ってない……。」

「……………はああ…………。」

他の女性がいる前で半ば強引に話を切り、2人きりで部屋を出る。しかも腕を引っ張られて、満面の笑みを浮かべながら。こんな状況になつた場合、君達男子諸君は、相手からの好意に期待する者もいるのでは無いだろうか？

しかし失恋マスターと呼ばれる（自称）俺は違う。

まず状況。年齢は不詳だが、恐らく成人はしているだろう彼女は、俺になんてさらさら興味無いだろう。だって俺だよ？はい論破。

次に、俺と千川さんは初対面だということ。初対面でしかも目が死んでるやつなんて普通に怯えるか警戒するし。そもそも興味なんて示さないだろう。更に俺だよ？はい論破。流星は俺。なんか自分で言つててちよつと悲しくなつたけどこんな時でもクールルだけ！

その後、間も無くして案の定、俺と千川さんは何事も無く女子寮にのエントランス前に着いた。

「…………。」

「さあ着きましたよ比企谷君！……ここが君の新たな家となる…………つて、どうしたんですか？なんだか残念そうですね。」

「…………いえ、なんでもないです。」

べ、別に残念だなんて思つて無いし？わかつてたし？最初から期待なんてしてないからー！むしろ凜達がいなくなつてから…「テメエよくもやつてくれたなあ？ああ!?!？」みたいなことになんなくてよかつたですわー！

………あんな素ぶり……い、いや、期待なんてしてないし。

「まあ、とりあえず行きましようか。」

「はい。」

ここ346プロダクション女子寮は、大手346プロダクションが直轄で管理している寮の内の1つだ。名前の通り、基本的に男子禁制で、事務所の女優や女タレント。そして女性アイドル達が住む寮だ。しかし、アイドル部門の設立と共に新しく建てた寮の為、今のところ入居者が少なく、部屋が余ってるんだそうだ。

エントランス前にあるパネルに千川さんがにカードを通して、そこで開いた自動ドアを潜る。そこでエレベーターに乗り、千川さんが3階を選択する。ふと辺りを見渡すと、防犯カメラと非常時用のアラームが設置されていた。流石大手の芸能事務所と言ったところか、防犯はしっかりしていた。

そんなことを考えていると、ようやく3階に着いたのか、エレベーターが止まり、扉が開いた。

「そうそう！それでね？卯月ちゃんったら……あつ！こんにちは！ちひろさん……と男の人？」

「あつ……、こんにちはっ！ってふえっ!?？お、男の人!?？」

その目の前にいたのは、所謂フリースペースの様なところで談笑している2人の少女だった。

11話

「えーっとっ？……こんにちはー！」

「あわわわわ……。」

目の前にいるのは茶髪のサイドテール少女と黒髪のアホ毛少女。もちろん美少女はパツシブだ。

どうしよう。こうなることはだいたい予想ついていたから千川さんが寮の人達集めて俺を紹介するって時まで誰とも会いたくなかったのに。

初っ端からエンカウトとか……もうやだ。気まずすぎて死ぬる。

現在俺は向こうの2人同様固まっている。……いや、あっちの2人は困惑してると言った方が正しいか。特にアホ毛の方はあわわわしか言っただけだし。

このとにかく気まずい空間をなんとかして欲しくて、縋る様に千川さんに助けるとアイコンタクトを送る。千川さんはそれに気づくと、にぱあっと、心底楽しそうな笑顔をこっちに振りまいてきた。

……畜生絶対この人楽しんでやがるな!?!?

多少の恨みを込めて千川さんをじっとと見るも、当の本人はどこ吹く風。というか楽しそうな気を隠す気も無くニッコニコだ。

「……千川さん。お願いします。」

それに少しムカついて、少し語調が強くなった。無言の圧力で、早くどうにかしろ”と急かす。

すると、千川さんはそれに気づいたのか、こちらを見てめっちゃニマニマしてくる。いいから早くしてくれ。

「この男の子はバイトの子で、前にも言ったようにこの女子寮と一緒に住むことになる子です！仲良くしてあげてね！じゃあまずはお互いに自己紹介をしましょうか♪」

漸く千川さんが助け船を出してくれる。やっとできた機会に、俺たちはここぞとばかりに乗っかった。

「あれ？……こっつて女子寮ですよ？男の子が入っちゃっていいんですか？」

はい。全然乗っかって無いですね。ごめんなさい。

まあでも、その疑問は誰しもが持つものだろうし、至極当然だろう。なんて言ってもここは女子寮。本来ならば男子禁制のはずのこの場所に男子の俺が居座っているのはおろか、住むと言っているのだ。そりゃ簡単には信じられないだろうし、ましてやこんな目の腐った男だ。怪しむだろうし、自分に被害があるかもしれないと警戒する方が普通だろう。

「それには深い深い、事情があるんです！」

「いや、そんな深くないですよ？社員寮がいつぱいだけだけじゃないですか」

「えっ？そうだったんですか!?!?」

「え？はい。そうですけど。」

「そ、そうだったんだ……。あれ？ミキちゃん常務に教えてもらったことと違うんだけど！平塚さんから引き継いで比企谷君に脱ぼっちして心を開いてもらう為じゃないの!?!?」

途中から聞き取れなかったが、まあ俺の悪口も言ってるんだろう。べ、別に悲しくなんてないんだからねっ！勘違いしないでよねっ！
……………。

「あ、あははは……。ま、まあとりあえず！これからこの寮で一緒になるってことですよ！よろしくお願いしますっ！」

おお……。え、ええ子やあ……。いかん溶ける。余計に優しさが染みる！笑顔が眩しいっ！

と、とにかく。確証は無いが俺が怪しまれて無いようでよかった。嘘を付いている感じも無いし。ずっと気まづいままここで過ごすことにならなくて本当に良かった……。

「あーそういうえば自己紹介まだでしたね！すいません！じゃあまずは私から！五十嵐響子！高校1年生です！今年の8月で16歳になりました！趣味は掃除に料理にお洗濯……。えっと、家事全般です！女子寮だから色々不便なこともあるかもだけど、何か困ったことがあったらなんでも言っして下さいね？できる限り力になります！これからよろしくお願いします！」

「お、おう。よろしく頼む。」

「はいっ！」

それにしても、趣味が家事全般っていうのは驚いた。今時そんな人中々いないんじゃないだろうか？いや、いるんだろうけど、大体は自分を良く見せる為のステータスの1つにそう言ってる人なんだろうし。でも本当に家事ができて、しかもそれが趣味だとしたら、きつと五十嵐はとても家庭的な娘なんだろう。

「あ、ああああああのっ！わ、わたっ、わたわたわたしはこっこここ小日向美穂ですっ！よ、よりっ、よりよ、よりしくお願いしみやっ！あううううう！」

「OK。少し落ち着こうか。何を言ってるのか全然わかんない。」

「ほら深呼吸！深呼吸して美穂ちゃん！はい吸ってー、吐いてー。」
「すうー、はあー。すうー、はあー……」

深呼吸をし続ける小日向を見て、さっきまで感じていた緊張が緩む。あれだ。自分よりテンパってる人を見るとなんか逆にテンパらなくなるアレ。みんなも一回はなったことあるだろうアレ。

「……ふう。ごめんなさい！私あがり症で、男の人と話したこともあんまりなくて……。こ、小日向美穂です！よろしくお願いしますっ！」

「おう。よろしく。小日向。」

「は、ははは、はいっ！」

……なんだろう。なんかこいつとはえらい親近感を覚えるんだが……会ったのは初めてだし、一体何が……？

「じゃあ最後に比企谷君！お願いしますね？」

「……了解です。」

「なんでそんなに真剣な顔してるんですか。」

「緊張してるんです。」

息を吸って、吐く。小日向のお陰でだいぶ緊張がほぐれた。やるなら、今しかないッ！

「ひ、比企谷八幡。17歳だ。これからいろいろ迷惑かけるが、よろしく頼む。」

よ、よかったああ！ちゃんと噛まずに言えたあ！偉い。偉いぞ俺エ
!!?」

「よ、よろしく願いますっ!」

「よろしく願いますっ! ええっと、比企谷さんは17歳……じゃあ美穂ちゃんももうすぐ17歳だから同い年ですね!」

「おう。よろしく……って、えっ、小日向って17なの?」

「は、はい……。今年の12月で17歳、ですけど。」

「ま、まじか……。」

絶対年下だと思ってた。いや、実際年下なんだけど、もっと年下だと思ってた。だってほら、あんな小動物然とした態度だよ? 同い年だなんて信じられないんですが。やっぱこの業界って見かけによらないわ。まじで。

その後も、ぎこちないながらも会話を続けていった。案の定というか、見た目通りというか、五十嵐はやっぱリコミュ力が強く、千川さんと一緒に俺たちが入りやすい話題を振って、俺と小日向をリードしてくれた。正直場違い感が凄いとつと逃げ出したいが、俺はいつかこのアイドルのプロデューサーになるのだ。その為にはアイドルとのコミュニケーションも必要だろうし、今の内に練習して慣れておいた方がいいだろう。

「比企谷君、そろそろ部屋に行こっか。」

「あ、はい。」

ある程度話したところで、千川さんが話を打ち切る。

「あ、もしかして、この後用事とかあったりしましたか? 長話しちゃつてごめんなさい!」

「ううん。お仕事は今日はもう無いから大丈夫なんだけど、今日は荷物の整理とかがあるだろうし、寮のみんなにも紹介する時の準備もするから、先に部屋を案内することになってるの。」

「なるほど! わかりました! じゃあお荷物の整理、手伝いますっ!」

「いや、大丈夫だ。」

まあ、荷物の整理なんて言ったって、私物なんてこの今追い出された時に持ってたこのバッグ1つだけであって無いようなもんだし、確

実にすぐに終わんだろ。

「あ、そうですね。男の子にもいろいろありますもんね。ごめんなさい!」

えっ。あ、しまった。勘違いされてる。言葉が足りなかったか。

「えっと、あー、すまん。荷物の整理って言っても私物なんてほとんどないし、多分すぐに終わるだろうから手伝わなくて大丈夫なんだ。言葉足らずだったな。すまん。」

「あっ!そういうことでしたか!よかったです!あ、そうそう!比企谷さんはまだお夕飯食べてないですか?」

「え?いや、食ってないが。」

「そしたら後でみんなと一緒に食べましょう!実は今日入って来る人の歓迎会しようって、比企谷さんの歓迎パーティーを準備してたんです!」

「か、歓迎、パーティー……?」

「はい!歓迎パーティー!私も腕を存分に振るうので、みんなで美味しく、楽しみましょう!」

「お、おう。」

確かに、この部屋を見渡してみると、パーティー用の飾りが壁や机に華やかに散りばめられていた。自分がこんなに盛大に祝って貰うのは初めてで、思わず少しだけ感動してしまう。

「あっ、あのっ!」

「おうっ!?……っつと、な、なんだ?」

感慨に浸っていた最中、いきなりの大きい声に驚きながら答えるのと、その声の主は意外なことに小日向だった。

「え、えっと、あの……。」

しかし小日向は言いづらそうにもじもじして、一向にこの先の言葉を出さない。まあ、こういうときつてのは凄い勇気がいるのは知っている。気持ちもわかるし、急かすなんてことはせず、じっと待つ。

「美穂ちゃん!頑張ってる!」

約10秒、恥ずかしそうに顔を赤らめながら小日向は、喉から出かかっている言葉を出して、戻して。出して、戻して。そして、ぎゅっ

と目を瞑りながら、漸く、言った。

「あ、あの！わ、私人見知りだし、不器用だし、いろんな迷惑かけちゃうかもだけど！私、ここにいるみんなと仲良くしたくて！だからっ！えっと、あの、その……と、ととと、友だちになってください!!？」
そう言つて、小日向は勢いよく頭を下げる。その姿はとても初々しくて、人見知りの妹が友人を作ろうと頑張っている。そんな風に見えてしまつて、思わず苦笑してしまう。

「……おう。俺からも、友達として、よろしく頼む。」

思わずというか、小さい頃からの癖というか、ついつい俺はお兄ちゃんスキルを発動させて、友達になろう宣言をしてしまった。いかん。恥ずかしい。こんな年になってこんなこと言うなんて。お兄ちゃんスキルは休んでてくれよ。

「えっ！あつ……。」

すると小日向はこれ以上ない程に顔を真っ赤に染めて俯いてしまう。そうだよな。恥ずかしいよな。この歳で友達になつてつてなんか凄いやらしいよな。だつて俺もそうだよな。

「ひう……あう……。」

小日向は更に顔を手で覆い始める。そうだよなあ。今絶賛悶絶中だよな。わかる。わかるよその気持ち。今すぐ布団に潜つてバタバタしたくなるよな。俺もそうだよな。そこでそのまま寝てしまいたくなる。

「あ、あのう……。」

「ん？どうした？」

まだ恥ずかしいんだろう。小日向が落ち着くまでゆっくりと待つ。するとおずおずと、蚊でも鳴かない様な小さな声で呟いた。

「あ、あの、て、手……。」

「ん？手？」

手に何かあるのだろうかとうと自分の腕を見てみる。肩から伸びた腕は肘から更に伸び、その先には小日向の頭の上に置かれる俺の手があった。

小日向の頭の上に置かれる俺の手があつた。

「……………えっ。」

「や、やっと気付いた…………。」

「あ、あはは…………。」

周りを見渡すと人2人。困った様に、若しくはドン引きして、引きつった笑みを浮かべる彼女らを見て、目の前で俯いてる彼女は決して自分の発言では無く——いや、それもあるんだろうが——俺の無意識黒歴史第247番：『またでたよ無意識お兄ちゃんスキル。なでなでとかセクハラだぞ馬鹿め』のせいで顔を赤くしていることを察した。そして、なにかを悟り、無のままに次の行動へと移るのは、然程時間は変わらなかった。

「……………すいませんでした。」

……………本当に休め。自重しろお兄ちゃんスキル。金輪際出てくるんじゃない。

「……………ふう。」

何日かぶりのベットにダイブした俺は、今日の出来事をねっころが

りながら振り返っていた。

「いろいろ、あつたなあ……。」

今日はとにかくいろいろあつた。濃密だなんて生ぬるいほどに。朝起きたら憧れの高垣楓がいて慰めてもらって、落ち着いたと思つたらここで働くことになった。働く為に常務を説得してクソみたいに精神すり減らした直後に神谷に殺されかけて、マ●ク行ったら北条と再会してアイドル達を身バレさせかけて。女子寮に行ったら行つたで初っ端から心を折りにくる様な黒歴史作るっていう。あの後謝りに行つたらまたお互いに2人であたふたしたけどなんか変なこと口走らなかつただろうか。……大丈夫だろう。と信じたい。

あの後、一旦部屋で準備をしてから地獄の自己紹介が始まつた。大勢のアイドル達が俺に好奇の視線を向けてくるという、もう訳がわからん状態で俺が平然としていられるわけも無く、散々噛んだ挙句に数人のアイドルにいじり倒され、主役がいじられたままという謎な状態のまま、そのままパーティーになった。もうここからなにを話したのか、俺は一切覚えてない。屋内でちびっ子達とサッカーしたり、酒が入つた妙に艶めかしい女性に酒飲まされそうになったり、なんか猫みたいなやつになんか飲まされたり、いろんなことした気がする。

………記憶無くなつたの絶対最後のだろ。一体何飲ませたんだあいつ。

ただ唯一はつきり覚えてるのは、五十嵐が作つたというパーティー料理が思わず真顔になるほどうまかつたことだ。タツパーに入れて持ち帰りたいところだったが、流星にはしたないし、そもそもタツパーを持つていなかつたのでそれはできなかつたのだが。思わずとんでもないこと口走りそうになつたが、理性を保つてなんとか耐えた。ナイスグツジョブ俺の理性。

その後俺のS A N値がマイナスを振り切つたのと同様、ちょうど時間もいい頃だしお開き、ということになった。部屋に帰つた時にわかつたのだが、どうやら五十嵐の部屋と俺の部屋は隣同士らしい。流星の五十嵐も困つた様な顔をしていて、ぎこちないままに挨拶を交わして別れた。なんかもう本当に申し訳なかつた。ごめんね？

「……振り返ってみると、本当に濃密な1日だったな……。」

今日は本当に大変な1日だった。明日もこんな大変なのが続くと思うと、明日が憂鬱で仕方ない。

でも。

それでもここには、あいつらには、自分が嫌だなど思えるものが何一つ無くて、それは俺には初めてで、新鮮で、心地よくて。

「ここで過ごすのも、案外楽しいのかもな。」

今日は、俺のスタートライン。全て捨てられて、リセットされた俺が踏んだ、初めの一歩。

ここからだ。

ここから始めよう。平塚先生にも言われた通り、前を向いて。新しく。

柄でもないポジティブな自分の思考に可笑しきで笑ってしまう。

むくりと差を起こし、ハンガーに掛かった真新しいスーツをちらりと見る。パリッとしたスーツの胸ポケットの中には名刺。新しく作ってもらった、ここで働く為の、俺だけの、証明書。

「……明日は9時出勤か。」

なら今日は疲れてるだろうし早めに寝よう。起きるのは……念のため7時でいいか。目覚ましを7時にセットして、少しゆっくりしてから出勤しよう。

そう思ってズボンのポケットに手を入れる。しかし、そこには目当てのものは無く、焦った俺はズボンの全てのポケットに手を突っ込む。しかしその中にも無くて、本格的に焦り始める。探して探して、とうとう顔を真っ青にしたところで、思い出した。

「俺、スマホ持って無いじゃん。てか、目覚まし持って無いじゃん。」

俺が入寮初日からお隣を頼ることになることが確定した瞬間だった。

12話

「まじ、か……。」

朝8時40分。今朝の長い、永い悶絶の後、俺は玄関に立ち尽くして、暗い、昏い絶望の真っ只中にいた。生まれるのは焦りと不安。それは送風機に括り付けられた風船の様に、どんと膨らんでゆく。

「どうしよ。これほんとどうしよ……ドア、開かないんだけど。」

これほんとどうしようか。さつきからそう思わずにはいられない。だってドアが開かないんだもん。仕方ないじゃん。

ドアの建て付けが悪い……訳じゃ無いと思う。何せこの大企業の新築寮だ。扉が開かなくなるなんて事はないだろう。それに、動かない、というよりは、何かがドアの前で突つかかかっている感じ。とでも言えばいいのか、ドアを押すと、ドアが何かに押さえられている感じがするのだ。それに、その感覚はなんだか柔らかい。例えるなら、シリコンのブロック……みたいな感じ。多分。とにかく押す感触が柔らかいので、前にいるのが動物だったりすると、とか思うとあまり強く押せないのだ。怖くて。電話で助けを呼ぼうにもそもそもスマホが無いので連絡手段が無く、お隣に助けを呼ぼうにもそもそもドアが開かないから困っているのであって、しかもこの寮無駄に防音なのでいくら壁を叩いても向こうには聞こえない。いや別にアイドルにもプライバシーはあるんだからむしろ防音でいいんだけどね?……まあとにかく。長々と考えたがやっぱ詰みだ。どうしよこれ。

念の為早めに支度をしていた為、まだ時間に余裕があることだけが

不幸中の幸いだろう。しかし残された時間は少ない。どうにかしないと俺は初日から遅刻である。そうして遅刻魔のレッテルが貼られた俺は、間違いなく破滅の道を最短ルートでぶっちぎるだろう。それを回避する為に、死ぬ気で頭をひねってうんうん唸っていると、天啓か、ある妙案を思いついた。思い立ったが吉日。早速行動を起こす。俺はベットの从上から昨夜五十嵐に貸して貰った目覚ましを手にする。それを1分後ににセットし、玄関ドアの前に持ってきてじっと待つ。これが鳴って何か反応があれば多分生き物だつてことになるだろう。

そして数十秒後、その可愛らしい目覚まし時計から、ヂリヂリとけたたましい音が鳴り始める。

これで生き物かどうかわかるだろうが……どうか？

待つこと数十秒、未だ煩く鳴り響く音の中、未だ反応は無い。ダメ押しで鍵を閉めてドアをガチャガチャしてみる。けたたましい音と身体を揺らされる衝撃の二重攻撃。こんな寝づらい環境だ。もしここで動物かなんかが寝ていたとしても、流石に起きるだろう。

……いくら経っても反応が無い。まあここまでやって反応が無いんだつたら多分俺の勘違いだったんだろう。大分こじつけっぽいが多分誰かがここに重い荷物を置いたまま帰ってしまったんだろう。傍迷惑過ぎる話だが、多分もうちょい強く押せば退けられるか。もうそろそろ時間も押してきてるし、とつとと済ま『ドンッ』

「うおうつ？？」

いきなりの衝撃音に驚いて変な声を上げると同時、慌ててドアノブから手を離れた。そのあとドアの向こうから微かに音がしたので、おっかなびつくりドアに耳をつけてみると、ドスの聴いた低いうなり声が聞こえた。

「あつぶねえ……。」

ほらやつぱりだよツツ！やつぱりいたあ!!？あつぶない！あつぶないよマジでえ!!？あと少しで動物虐待になるとこだったよ！ほんつと怖いなあ!!？

と、とりあえずドア開ける前に気づけてよかった。そうなると向こ

うから起きて退いてもらおうしかないか……。

という事でまた目覚ましドアガチャコンボを決めていく。そろそろ時間がやばいから早く起きてくれ。ほんとに。

またしばらくガチャガチャとやっている、ドアの向こうから声が聞こえてきた。動きを止めて耳をすますと、向こうの会話が聞こえてきた。

「なんだろ。隣から音が……ってシキちゃん!??なんでこんな所で寝てるの!??起きてー!ほら起きてっ!」

「●☆・%T*……」

「駄々っ子言わないの!ほら起きてっば!」

今の声は五十嵐だろうか。俺が出したサイン(?)にようやく気付いて貰えたらしい。ついでに内容は聞き取れないが、知らない女の子の声も聞こえた。どうやらドアを塞いでいたのは「シキちゃん」なんていう女の子?らしい。いやどこで寝てんだよ。怖えよ。開けたらマジでドアで引くところだったじゃねえか。

「比企谷さーんっ!もう開けて大丈夫ですよーっ!」

あと少して人の子に怪我させるところだった恐怖にまた固まっていると、五十嵐から開けて大丈夫とのこと。今度こそ安心してがちやりとドアを開ける。

「おはようございます比企谷さん!」

ドアの前にいたのは、やっぱり五十嵐と、五十嵐に抱えられたまま眠っている癖っ毛ロングの女性だった。因みにやっぱり美女さんです。知ってたけどレベルたっけえなこの事務所。

なるほど。この人が「シキちゃん」か。なんかどつかで見たことがあるな。

「おう。マジでさんきゅな。助かった。あと少して傷害罪になるとこだった。あとこれ。目覚ましありがとな。こっちも助かった。」

「あはは………確かにちよーっと危なかったですね……あつ、ありがとうございます。ちゃんと起きれたみたいですね。えっと、ともかく比企谷さんがあらぬ罪を着ることにならないでホントに良かったです。あの、ところで、比企谷さんは今からお仕事ですか?」

「おう。今日で初出勤だな。そいつのおかげで中々焦ったが。」

当の本人が眠ってる側で2人で苦笑し合う。するとどこからかコール音が鳴り響いた。多分誰かのスマホだろうか。

「あっ！すいません私です！出ちやってもいいですか？」

「ん？お、おう。」

どうやら音の発信源は五十嵐だったらしい。俺の返答にありがとうございますっ！と言ってからスマホを取り出す。この歳でこういう事が出来るって……やっぱええ娘やわあ……。

「はいもしもし……はい。響子です。フレデリカさんどうかしました？……はい。……えっ？シキちゃん？ここにいますけど……ええっ!?？失踪した!?？もうすぐレッスン!?？……え？連れてきて？わ、わかりましたっ！って言ってもどうしよう……私これから外せない用事があったて事務所に行けなくて……。うーん……あっ！」

そう言っって『思いついた！』って風な閃いた表情でこちらを見た五十嵐は、その期待で輝いた目をこちらに向ける。

「すいません比企谷さんっ！シキちゃんもうすぐレッスンなんですけど、失踪してたらしくて……。このままだとシキちゃんレッスンに遅れちゃうんです。できるなら私が送って行きたいんですけど……私、これから外せない用事があったて手が離せないんです……。なのでシキちゃんも一緒に連れて行ってもらえませんか？」

そう言っって五十嵐が頭を下げる。もちろん断る理由は無いらしい、二つ返事で引き受けた。にしても、レッスン前に失踪で。この業界って時間にシビアなんじゃないの？

「ありがとうございますっ！お願いします比企谷さん！」

「とりあえずこいつ起こすか。」

「はいっ！」

しかしいくら声をかけて揺さぶってもピクリともせず、スヤスヤと眠っている。……とかさつき起きてたよね？なんで？まさか今の十数秒で寝たの？その体制で？の●太君かよ。

「……起きないな。」

「……はこ。」

「というかもつかい寝たな。」

「……そうですね。」

「これどうしようか。」

「……………おんぶする？」

「いやそれ大丈夫なのか？叩かれない？」

「大丈夫ですよ！だってここから会社の裏口まで凄く近いじゃないですか！しかもほら。人通りも少ないし大丈夫ですよ！……………多分。」

「多分ついちゃうのかあ…………。」

「でももう時間ギリギリなんですよ。今から人を探して頼んでもレッスンは始まっちゃうし…………。」

時間を確認すると8時50分。俺もそろそろ行かないとまずい時間だ。あそこ建物でかいから迷いそうだし、できるだけ余裕を持って行きたかったんだが。

「背に腹は変えられない、か。」

「比企谷さん？」

「五十嵐。ち、ちよつとおぶるの手伝ってくれ。」

「あ、は、はいっー！」

五十嵐に助けってもらって、シキちゃんをおぶる。まあまあな高身長割に思ったより軽くて少しだけ驚くが、運動なんてしてきていない自分には十分重く、ちゃんと事務所まで運べるか不安になってくる。いや、それもあるけど、正直いうとですね。この娘おぶると、その、当たられるんですよ。お山様が。はい。柔らかいですねありがとうございます。ございます。心臓バツクバクですよ。ええ。まあ、一度受けてしまったとこだし、一応頑張れば色々和我慢できる程の距離だとは思いますがちゃんと運ぶのだが。

「じゃあ、とりあえず行ってくる。ありがとな。」

そう行つてから、五十嵐に背を向けて歩き出す。おぶってしまった以上、一刻も早くこの娘を運んでこの幸せな地獄から解放されたい。持ってくれよ。俺の理性と心臓……………！

「比企谷さん！行つてらっしやーい！」

その言葉に思わず振り返ると、五十嵐が手を振っていた。何日かぶりに見られた光景に、感じていた緊張も忘れて思わず頬が緩む。

「……おう。」

そう返事をしてから、今度こそ踵を返して歩き出す。

もうされることは無いと思っていたから、嬉しくて少し泣きそうになったのは、恥ずかしいから墓まで持って行こう。

「んう……。」

寮のエレベーターを降り、エントランスに差し掛かったところでシキちゃん……あれ、呼び方これでいいのか？ まあいいや。だってこれしか知らないもんね。仕方がないね。ということでシキちゃんが声を漏らした。

「お、起きたか？」

「んにやああ……。シキちゃん、おきてませーん。ねたまーす。」

思わずポロリと出た言葉に、やっぱり起きてたのか、シキちゃんが反応する。しかし反応されるのは予想外だったので、軽くどころか凄く驚いてしまう。

「うえ!? あ、えつと。えー……いや、寝ないでください。」

「くふああ……。じゃあおやすみ……。」

「ちよっ!? また寝ないでくださいー！ 歩いて!?？ 自分で歩いて!?？」

「もー。うるさいぞー。シキちゃん怒っちゃうぞー。……なーんてにや。あははっ！ ウソウソ。だからそんな怖い顔しないでよー？ もう降りるからー。」

やっと俺から降りてくれることになった。やっと解放されるとわかってか、なんだかどつと疲れてはあ、と嘆息する。

「あららー？ もしかしてお疲れかな？ どうするどうする？ サボっちゃう？ 失踪しちゃう？？」

「いやサボらないでくださいよ。あと失踪もしないですよ。とつと俺から降りて歩いてください。俺が仕事に遅れる。」

なんかもう、この人フランク過ぎて緊張とかどうでもよくなってきた。外だけ見りやなんかもう凄いくらいの美人なのに。なんかもう色々台無しだよ。

「もー仕方ないなー。キミの匂いもうちよい嗅いでたかったのになー。降りてあげるよまったくもー。プンプン♪」

「俺今まで生きてきて理不尽なこといっぱいあったけどここまで理不尽で楽しそうなプンプン生まれて初めてだわ。」

「お？じゃあシキちゃんはキミの初めてを貰っちゃったのかな？」

「……とうっ！」

なんか物凄く誤解を生みそうなことを言いながらシキちゃんが俺の背から飛び降りる。

「おわっ!??っど。なんで跳ねるんですか。危ないじゃないですか。普通に降りてください普通に。あと変なこと言わないでください。」

「にやははー♪あり?んー……あーなるほどなるほど。キミは昨日の実験の子かー。道理でちよつと薬の残り香が。」

じつと俺を見つめて数秒、妙に納得した顔をしてさらつととんでもないことを口にするシキちゃん。

「あの?実験ってなんですか……ってあちよつとっ！」

「にやはははははーシキちゃんしゅっぱーっ！」

「ねえちよつと!??実験ってなんなんですかあ!??」

こうして、俺たちたった2人での謎鬼ごっこは開始された。

13話

「ふう……。」

「お疲れ様です比企谷君。初めてにしては上出来だよ！はい。お茶飲む？」

「あ、ありがとうございます。いただきます。上出来……なんですかね？自分じゃよくわかんないんですけど、その、ありがとうございます。」

千川さんから貰った暖かいお茶をくびりと飲む。デスクワークで乾かされた喉が潤い、ホッと息を吐く。

今は昼休み。あの後なんとか時間に間に合った俺は千川さん指導の下、基礎的な説明を含めながら事務作業を始めていた。と言っても、最初は仕事に関する説明や注意だった為、事務作業はまだ手をつけ始めたばかりだ。昼休みを挟んで、また始めるのだ。

「そんな謙遜することじゃないよ比企谷君。実際ホントに呑み込みが早いんだもん。これだったらすぐにお仕事を任せられるようになるかも！」

「そう、ですかね？だとしたら、文化祭の準備に他の奴らがサボった分の事務仕事を押し付けられたおかけですかね。」

「……う——ん。こっちがなんとも言えない様な捻くれ過ぎて気まずい返答は極力やめてね？正直何言えいいかわかんなくなるから。ね？比企谷君。ね？」

「え？なんアツハイ。」

いやーダメだなー俺。こういう自虐ネタは慣れた人じゃないと場が凍るんだからやっちゃダメじゃないか！いやーうっかりうっかり！テヘペロ☆……い、いや、違うよ？別に千川さんが笑顔で魔王オラオーラ……というか、魔王覇気？を出してて生命の危機を感じたらじゃないぞ？むしろ千川さんの笑顔は優しいよ？天使だよ？ホントだよ？ハチマン、ウソツカナイ。ホント、ウソツカナイ。

「まあそんなことはどうでもいいんですっ！とりあえず、午後からも仕事に集中できるようにゆっくり休んで下さいね！ということ、今

日は私とお話——」

「千川さーん！ちよつとここの書類聴きたいことがあるんですけどいいですか？」

「——はお預けですね！ちよつと待っててくれるかな？用事済ませたら戻って来るから、その後に昼食がてらお話しましょう！まだ私比企谷君のことを何も知らないし、バイトとはいえ、一緒に仕事をする仲間だし、色々聞いておきたいから！」

「千川さーん！」

「はーい！今行きまーす！じゃあすぐに戻るからちよつとそこで待っててね！比企谷君！」

「は、はい。」

そういうと千川さんは席から立ち上がり、呼ばれた方へと小走りして行つた。

「さて、と。とりあえず、待つとくか。」

俺は席に座り直し、じつと千川さんの帰りを待つ。しかし、待っている時に暇を潰す物など持つてる訳もなく、やる事が無い俺は、数分後には手持ち無沙汰でそわそわしていた。やる事無くてじつとしてるとなんか場違い感を感じる。結構あるあるじゃない？え？俺だけ？そう……。

馬鹿みたいにそんな事を考えていると、何かこちらに来る気配を感じる。千川さんかな、と思つて振り返つて、

そこで、俺の意識は途絶えた。

「比企谷くーん！ やつと終わったよ！ ごめんね遅くなつ……………て……………？ 比企谷君……………？？」

「なあちよつとシキちゃん。この人どうするん？ ちゃんと目覚めるんやろな？ 失踪はまだ良くても、誘拐と殺人は流石にヤバイよ？」

「うーん、ちよーつとまずつたかにや？」

「シキちゃんシキちゃん。流石にちよつとヤバいんじゃない？ この子だいじよぶ？」

話し声が聞こえて、意識がだんだん上がって来る。まだ意識がはつきりしないまま、無理やり目を開く。

「あ、起きた。」

「だいじよぶ？ 体調悪くない？」

「にやははー。よかったよかった！ うっかりやつちやつたかと思った

！」

「え、何これ。」

目の前に見えたのは俺を覗き込む3人の美女達だった。

あ……ありのまま今起こった事を話すぜ！

「目の前に見えたのは俺を覗き込む3人の美女達だった。」

な……何を言っているのかわからねーと思うが、おれも何がどうなってるのかわからなかった……。

「なんやこれ……目が腐って……顔がなんか、濃くなってる……？」

「にやはは！無言だとなんか面白いねー！」

というかお前もいたかシキちゃんや。

「これもおクスリの副作用なのかな？」

「んにや？」概には言えないけど、そんなコンセプトで作ってないし、多分違うと思うよ？」

「おいクスリってなんだ。何飲ませた。」

「んー？ちよーつとだけ眠くなっちゃうスプレーとなんとなく落ち着く感じになる香りの粉末だよ。」

「なんだちよつと眠くなっちゃうって。なんとなく落ち着くって。怖いわ。まさかとは思うけど違法薬物とかじゃないよな？」

「違うちがーう。違法じゃないよ。法律の穴は突いてるけど」

「突いちやってんのかよ。」

「うん。突いちやってんのだー！にやはははは！」

「いや笑い事じゃねえよ。初対面で何を飲ませてんだよ。というかここどこ？何この状況？なんでこうなったの？俺死ぬの？ちゃんと生きて帰れる？あと目はデフォだ。顔は知らん。」

「わーお！一気に質問きたね！」

「というか目はデフォなんだ……。」

「デフォなんです。あと質問に答えてくれると嬉しいです。っーか答えろ。」

こっちは結構焦ってた。とつとと答えて欲しくて語調が荒くな

るごとくらい許してほしい。

「ご、ごめんごめん。じゃあ順々に答えていこか。まずここは事務所の一室……事務室はそんなに遠くないからすぐに戻れるよ。次は……何だっけ？」

「状況はねーラ致監禁？」

「は？」

「確かにラ致監禁やね……。」

「うーん……アタシもそれ以外思いつかないな。」

「待つて。ちよつと待つて。理解ができない。え、ちよつとまつて。お前らゆうか、誘拐したんだよな？俺を？」

「まあそういうことになつちやうね。」

「ねえ、おかしいの俺だけ？普通もうちよいなんていうか、えつと、ほら、そういう空気になるもんじゃないの？なんで普段通りみたいになりラックスしてるの？なんなの？そういうネタなの？茶番なの？」

「いや、そう言われても……。」

「なんたつてここ、事務所の中だしね。」

「じゃあクスリのことに関してはどうするおつもりで？」

「………次の質問行こうか！」

「あつ！こいつ今明らかに話題逸らしあがつた！」

「はいはいじゃあ次はーつと。なんでか、だっけ。」

「まあそうだが。それよりも俺はクス「えーつとそれはね！シキちやん任せた！」

「いやだか「それはですねえ——」

——「デデン！なんと、なんとなんと！その理由は！」

「その理由は！」

「……な「このコの匂いが嗅ぎたかったからでした——！！？」」

「「な、なんだつてー！！？」」

「……。」

俺の言葉をまるつきり無視した大して面白くない茶番と、頭の悪い誘拐理由。あとなんかイライラして、ぶつりと、俺の中で何かがキレた音がした。

「……おい。」

ゆつくりと、そして低く出した俺の声に、3人はびくりと肩を震わせる。

「は、はい。なん、なんででしょうか……？」

「……正座。」

「「ウツス」」

この時の俺は、武内さんもびくりな、それはもう震え上がる程恐ろしい顔をしていたと、後に彼女らは語るのだった。

「……とりあえず、ここまでにしとく。俺も疲れた。」

「お、終わった……。」

「流石のフレちゃんでもちよつと、キツかった……な。」

「……。」

話を止めて気がつく、なんか目の前が死屍累々としていた。人間マジで怒ればキョドリとかそういうのがなくなるらしい。なんか結構ズケズケ言ってた気がする。相手美人3人なのに。だからか、3人は正座したまま手を繋ぎ合ってガクブルガクブルしていた。それはもう狩られる寸前のウサギみたい。そんな怖かったのか。それはそれで傷つくんだが。というか、えーつと、シキちゃん……？だっけ？についてはもう手を繋いだまま半分意識がとんでた。なんかエロ

とりあえずここで寝られても嫌なので起こしておく。

「おい起きろ。こんなところで寝るな。」

まあ、自分でもちよつとやりすぎた感はあるが、これだけやったんだ。きつと今回で反省くらいはしてくれただろう。特にシキちゃん……は。きつと目がさめる頃には自分の行いを反省して、今後に生かすことだろう。

「シキちゃんは、もうダメです……。アタシを置いて、先にゆけい！……カクッ。」

前言撤回。やっぱこいつ全然反省してねえ。ただ寝てただけだこいつ。

相変わらずの自由過ぎる猫女にもう一度地獄のヒツキー講座く正座で30分コースくを開講しようとしたところで、がちやり。と扉が開かれた。

「失礼します……って3人ともやっと見つけた！……ってというか……」

「何……この状況？」

そこにいたのは、どこ見ても艶めかしくて妖艶過ぎる美女と、ギャルギャルしくてギャルギャルしいギャルさんだった。

14話

「ええっ!??比企谷さんってアタシと同一年だったの!??ってことは比企谷君ってこと?。」

「そう、みたいですね?。」

そう言っって驚きに目を見開く城ヶ崎さん。俺としてもまさか同い年とは思ってもいなかったの驚きである。

あの後、なんとか事態を收拾して、今に至るわけだが、自己紹介から始まって、とりあえず今は年の話で盛り上がるところだ。もうちよつと具体的にいうと、俺の歳である。俺が暴露した年齢に聞いた全員が驚いていた。どれくらいかっていうと「う、嘘やろ?アタシより年下……!??」なんて塩見さんが結構なガチトーンで言うくらいには驚かされている。結構歳増で見られることは多いけどそんなに驚くこと?てか俺何歳に見えてたのさ。

目の前にいる5人は、『プロジェクトクローネ』という、美城常務直々に手がけるプロジェクトと並行して計画されている、『L i p p s』というオトナな5人組アイドルユニットだ。クローネのリーダーである速水さんをリーダーに据えて、塩見さん、宮本さん、城ヶ崎さん、一ノ瀬さんの5人がメンバー。今言った通りオトナなユニットがコンセプトなので冗談抜きにV i全振りの様な超美人ばかりだ。俺個人の意見だが、ここの事務所のアイドルの中でも群を抜いてると思う。

まあ高垣さんにはかなわねえけどな!!?↑重度の楓ファン。1話参照。

そういえば余談だが、あの後事情を説明した際、城ヶ崎さんは顔を青くして3人と一緒に凄い勢いでぺこぺこしてきた。超自由トリオの頭を何回も無理やり下げさせる城ヶ崎さん。そのしつかり者の姿はさながら息子達のバカを必死に謝るオカンの様で、なんか見てて気苦労が絶えなそうだなあ、と思っって苦笑してしまった。この中で1番派手でチャラそうなのね。

「あ、なるほど。ハチ君はそのこの世の中の理不尽全部諦めて世間っ

て言う菌に侵されて死んでるみたいなの腐った目がキミを無駄に哀愁漂う大人に見せてるのか！シキちゃん発見！」

「ねえ、あの、何か俺の目に恨みでもあるんですか？なんで盛りに盛って俺の目をいじるの？あとなんか無駄に詩的ですね。なに？新手的いじめ？あいや、今まで何回も腐つてるとかキモいとか言われてるし新手じゃないか。」

何ですか？もしかして心の中でバカ共って言ってたのに気づかれたんですか？じゃあ心の中で謝っておくので許してくださいトラウマがぶり返して泣いてしまいます。

「おうふ……比企谷君の闇深過ぎない？」

「最後のところが悲しすぎてなんだかこっちまで悲しくなってくるわね……。」

「ま、まあまあ。比企谷君にはこれか「あー！フレちゃんも発見発見！やあつとわかったー！ハチ君って奏ちゃんみたいなんだよ！」

「は!?？」

宮本さんの謎発言に思わず速水さんと揃えて驚きの声を出す。それは流石に失礼だろ速水さんに。宮本さんほんといみわかんね。因みに、何か言い出そうとしたところでいきなり話を切られた城ヶ崎さんは、半ば声を出した状態で口を開き固まっていた。………うん。まあ、どんまい。

「おー！確かに確かに！似てる似てるー！」

「どこがだよ……。」

「それって、まさかと思うけど私の目が腐ってるということかしら……一応、自分では腐ってはいないと思うんだけど。」

おっと。間接的に俺にダイレクトアタックしないでください。がらすのはあとに効きます。結構。

「えっ？でも、ホントにどこが……ああつ！もしかして2人とも大人っぽいからって、そういうこと!?？」

知らずのうちに中々速攻で復活していた城ヶ崎さんが納得した顔で掌をぽん、と打ち付ける。

「そうだよー！フレちゃんはそれが言いたかったのです！いや〜さっ

きからずつと気になってたんだよね！スツキルスツキリ！」

「ああ。なるほど。そういうことね。」

それを聞いて漸く納得する速水さん。なるほど速水さんは大学生なんだな。ちよつと驚きだが、まあ確かに。大学生にも普通に見えるな。別に雰囲気がおトナつてだけで年は普通に若そうだし。もつと上かと思っていたが違ったみたいだ。OLやってんのかと思つてた。シャツ着てるし。

「ん？速水さんつて20代じゃ無いんすね、てつきり社会人かと思つてました。大学生だったんですね。すいません。」

それを言うと、速水さんは結構ガツツリ目に残念な顔をした後、少し諦めたようにはあ。とため息を吐く。

「私まだ高校生よ。現役高校生2年生。」

コウコウセイ？……えつと？高校生……女子高校生……J o s h
i K o k o s e i……J K!?

「い、いやいや、いやいやいや、流星に嘘だろ………嘘だよな？」

「学生証見せましょうか？」

そういうと速水さんは自分のバッグから青皮の手のひらサイズの手帳を渡してきた。おそらく学生証。貼つてある写真は恐らく速水さんのもので、印刷された日にちで、今年作られた物だとわかる。学年は、高校2年。学校に通つていれば同学年だった……。

「まあ、いつもの反応やね。」

「もう慣れちゃったわね。」

「……こんな大人っぽい高校生つて、本当にいたんだな。」

「あら、それ貴方も大概よ？八幡。」

「!?？ゲホッ！ゴホッ！」

「ど、どしたの比企谷君……？」

「だ、大丈夫、です……。」

名前呼び捨て、だと……!?？

ど、どういうことだ。どうなっているツ!?？い、今、目の前のこの人はなんて言った？ハチマン……80000……八幡!?？なんだ……なんだよこの人!?？なんでそんなに照れるそぶりもなく初対面

の人の名前を呼び捨てにできるんだ！これが……これが陽キヤの最高峰であるアイドルのスキルとでも言うのかよ？？よ、陽キヤってレベルじゃねーぞ！？？」

「おーい。何に戦慄しとんのー？八幡くーん？」

「……はっ！あ、いや、ちよつと、いきなり呼び捨てでびっくりして……っ！！？」

咄嗟のことについて本当のことを言ってしまう。気づいてすぐに口を覆ったが、殆ど、というか全部言ってしまったものは、今更口を塞いでももう遅かった。

「へえ。初心なのね。」

と、速水さんに可愛いものを見る目で優しくそう言われた。しにたい。でもーっだけ訂正したい。

「いや、それは違う。俺はそもそも名前と呼ばれ慣れてない。元々ぼっちの陰キヤだ。家族を含めなきや俺を名前で呼んだのは覚えてる中じゃー人しかない。それどころか大体の奴らには俺のことヒキタニ君とかヒキガエルとか、ついにはカエルと呼ばれてたからな。比企谷だよ誰だよヒキタニ君って。そんな奴いねえよ。カエルってなんだよ。もう原型留めてねえじゃねえか。一体何回枕を濡らしたか……んんっ。次に普通世間一般の日本社会じゃ普通初対面で名前は呼ばない。まずは名字にさん付けから、だ。その過程全部すつとぼししていきなり名前呼び捨てだ。どういうことかわかるよな？それに加えて俺だぞ？だから俺は悪くない。QED。証明終了。」

「何その超理論……。というか貴方のこと悪いだなんて私一言も言っていないのだけど。」

「それ自分で言っつて悲しくならないの？ていいうかながー。」

「ちよつとかわいそうだねー。」

「ちよつとシキちゃん！フレデリカ！そういうこと言わないの！比企谷君傷ついちゃうでしょー！」

ちよつとやめて。みんなやめて。特に城ヶ崎さんやめて。純粋な好意が胸に来る。

「なあ八幡くん。」

「何ですか？」

「あたしが君の名前呼び捨てにしてるのはスルーなんやな。」

「えっ？」

「だから。あたしが君の名前呼び捨てにしてるのはスルーなんやなつて。」

ど、どういう(ry

「あー！また固まっちゃった！ハチくん？だいじよぶー？」

「あちゃー……またやっちゃったかあ。」

「周子？」

「あははー。ごめんごめん。つい出来心で。」

「はあ……。」

「でも奏ちゃんもハチ君のこと固まらせてたじゃん。」

「それは……だって、あんな反応するとは思わないじゃない？ 不可抗力よ。不可抗力。」

「んじやあたしも十数秒前まで知らなかったし不可抗力ってことでー。」

「いやならないから。周子の場合完全にわざとだったでしょ。」

「やーん！ ミカママがいじめるうー！」

「ミカママー！」

「だれがママだーっ！」

「わー！ 鬼だー！ 鬼のミカママが来るぞー！」

「前から来るでー！ 気をつけなー！」

「みんな逃げろー！」

「こらあ！ 誰が鬼だあ！ 逃げるなーっ！」

目を吊り上げて追いかける城ヶ崎さんから逃げる3人。城ヶ崎さんは相変わらず顔を赤く染めて怒った様子だ。けれど、全員が楽しそうに机の周りを回っている。

「小学生かよ……。」

目の前で行われている楽しげな光景に、ついうっかり言葉が漏れてしまう。

「確かに、小学生ね……ふふっ。」

そしていつのまにか隣にいた速水さんにすっかり聞かれていたらしく、無駄に大人に笑われる。えー。なんでそこで笑うんですかー。正直一体何を考えてるのかわかんないし怖いからやめてほしいんですけど。

「あつ、いや、貴方のことを笑った訳じゃ無いの。」

思ったことが顔に出ていたのか、少しだけ慌ててそれを否定する速水さん。動揺しながら弁明しようとする速水さんはちよつとだけ必死そうで、そんなところに確かに年相応のあどけなさを感じた俺は、そこで漸く彼女の年齢に納得する。

「ただ、彼女達といると、いつも賑やかで、楽しいなって、そう思った

だけなの。」

「……そつすか。」

「ええ。そうなのよ。」

そう言つて、速水さんは再び4人の方向を見つめる。その彼女の眼は優しく、まるで居心地のいい居場所を見つけた猫の様だった。

そうして俺たち2人は、楽しそうに戯れる彼女等を穏やかにm「へく。そーなんやなく。」

速水さんの見つめた先——俺たちが穏やかに見つめる筈だった4人組は、ニヤニヤニマニマニパニヨニヨ。誰一人隠そうとする事なく、全員、その整った口角を上げていた。それを見た瞬間、速水さんの顔から、さーっと血の気が引いていった。

「……え？な、ま、まさか、き、聞いて……」

今の状況を確認しよう。俺ら2人から4人までの距離は3メートルもない。そんな中で目の前で繰り広げられる俺たちの会話を彼ららが聞けないことなんて、あるはずが無いのだ。

だから速水さんが震えてしまうのも無理はない。今きつとみんなが流してくれることを必死で祈ってるんだろう。わかる。俺も飛び火でダメージが来てるから。雰囲気に乗ってちよつとカツコつけないきやよかつた。恥ずかしい。今すぐ布団に潜って呻き喚きたい。

しかし、現実とは非常に非情なもので、それを見た4人の口は、先程よりも楽しそうに……いや、愉しそうに釣り上がる。

「ごめんね奏ちゃん……ゼーんぶ聞いちゃった☆」

その瞬間、顔を真っ赤にして体を丸めた、オトナ美人な屍が出来上がった。

15話

「なーごめんて奏ちゃん。許したってやー。」

「……いいわよ。別に恥ずかしいだけだからそんなに怒って無いもの。でも今はちよつと放っておいてくれるかしら。……ねえ志希、私ちよつと真面目に言ってるの。こういうの煽りたい気持ちは分からなくもないけど今は目の前をうろちよろするのやめてちようだい。」

「……んにゃ。わかった。ごめんねー?」

現在、不貞腐れた速水さんは部屋の隅に体育座りで顔を隠してじつと固まっている。いや、今の感じだと不貞腐れた、というよりは恥ずかしくて顔を上げられないのだろう。なにそれ可愛い。

え、俺? いや、ほら、俺はこういうのは慣れてるし……ね?

「比企谷君もごめんね?」

「あ、いえ。」

城ヶ崎さんに謝られたが、

『大丈夫だよ全然気にして無いから! これも何かの縁だ! もしよかつたらLINE交換しない?』

なんていうイケメンムーブなどする義理は無いし、そもそもそんなことではしないので適当に返事を返す。

「あの3人が比企谷君を誘拐したって聞いて、ホントに気が気じゃなかったよ! それ犯罪じゃん! って思ってた。あの時はほんつとうに怖かった。」

「本当にお疲れ様です……。」

「ホントだよー。あの3人の相手スツツゴーク大変なんだよね。大体誰かしらなんかやらかしてるし。奏は3人がやりすぎた時しかなーんも言わないんだもん。まあ、偶に奏が注意してくれるから何だかんだ大事な時に何とかなってるんだけどさ。でも少しくらい助けにくれたってよくない? この前だって……。」

言い出して愚痴が止まらなくなった城ヶ崎さん。俺みたいないつでもどこでもカースト底辺の俺に自分から話しかけてくる様な優しいというか、いい人なだけに、その奥にいる人達のヤバさを改めて思

い知らされる。

「……あ。ごめんっ！愚痴っちゃった！比企谷君には関係ないのに、嫌だったよね。ごめんなさいっ！」

「あ、いや、大丈夫です。おかげで奥の人たちのヤバさはよくわかったんで……。」

というか城ヶ崎さんは謝らなくていいと俺は思います。いつも色々とお疲れ様ですとしか思えない。

小さな思考の後、俺は奥の誘拐犯グループ3人にまた目を向ける。今のところは速水さんがうずくまってしまったからかまだ大人しい

……と思ったら速水さんを慰めるのに飽きたのかまた3人でふぎけ出した。取り敢えずこれ以上ふぎけるなという意味を込めてこの世の中の理不尽全部諦めて世間って言う菌に侵されて死んでるみたいな腐った目（他称）で訴えておく。ちよつと困った顔で手ではつを作った後まるで仕方ないとも言おうような笑顔で手を振って返された。違うよ？俺お前らのファンじゃないよ？高垣さんのファンよそこんとこわかつてる？ねえこれ俺の念届いてる？特にあの失踪系ヤク中超フリーダム猫（作る方）。いい加減反省をしろ。一応俺より年上なのにもうそういうのどうでもよくなってきたぞ。

「あ、あはは……ウチのバカ共がゴメンね………あとでキツク言つとくから。」

俺が強く睨みすぎていたからか、城ヶ崎さんが俺にまた謝ってくる。今あんた本当にイマドキのJKキャピキャピギヤルなのかと思ってしまった俺は悪くないと思う。だってオカン属性が強すぎるんだもん。代わりに謝るって何？お母さんじゃん。流石ミカママ。てか、ちよつと疲れてきたなあ……。この後まだ仕事あるのに、体力持つかなあ……。

「あ、お願いします。その時は俺も混ぜてください。俺も言いたいことがいくつもあるのです。」

「あ、まだあったんだ。」

「ええ。あといくつかですけど。それにあの3人のツツコミ全部任せちゃうとか流石に悪いですしね。」

「あ！それは助かるから是非！今慢性的なツツコミ不足なんだよ！ほんつとにありがたいや！よろしくお願ひします！」

「え？まさかあの疲れるのを1人で……？」

「ううん。私とL i p p sのプロデューサーと2人で。それでも結構ギリギリでさ。や、それでもみんなというだけで結構楽しいんだけど。」

楽しい、か。

確かに、あの人達といるのは刺激的すぎて退屈にはなれないんだろうな……。振り回されて、怒られて、また振り回されて。それはきつと、退屈になる暇なんて無いんだろう。

「……まあ確かに、悪くは無い……。のかもしれないね。」

「うん……。」

そう言つて城ヶ崎さんは視線を奥へと見やる。その彼女の眼は優しく、まるでやんちゃな妹たちを見守る姉の様だったってちよつと待つてこれなんてデジャヴ？てかそんな時間経つてないのになんで連続でこんな事になつてんだよ！屍出来ちやいます？また屍出来ちやいます？ヤベエなんとかしないと！

本日2回目の死亡フラグにひどく戦々恐々としながら奥の方を盗み見る。最悪の想定をしてどうやって死のうかとか考えながら見たが、それはどうやら杞憂だったようだ。奥の3人は未だにはしゃいでいた。見る限りではこちらの会話も聞いてはいないだろう。ほつと息をつく。ふと隣を見ると、城ヶ崎さんも気づいて同じ様に確認したのか、ほつと溜息をついていた。

「あ！そうだ！比企谷君番号交換しようよ！交換した方が便利だし、ツツコミ任せたい時にいつでも呼べるし！」

「えつ……と、あ、え？番号、ですか？」

「うん！ダメかな？アタシ的にはツツコミ任せられる人が増えればいなくなつて思つてるんだけど。」

「番号……番号……ばん……へア……？」

「うえつ……？」

番号……ばんばん番号交換……ど、どうしようどうしよう相手から交

換申し込まれちゃったよ!!? しかも一切の躊躇なく!!? ……落ち着け。落ち着け八幡。まだ嬉しがつちやダメだ。喜ぶのは今じゃない。顔に出すな。大丈夫。俺はやればできる子。YDK。普段はやらないだけ。断じてできないんじゃない。落ち着いて、冷静に。かまないで『じゃあ、よろしくお願いします。』だ。大丈夫。普通に会話をこなせるハイスペック・プロぼっちの俺ならいける。

「……………はい。じゃあ、よろしくお願いしますみやつ……………あ。」

「ん?どうしたの?」

「……………スマホ、壊れて持ってないです。」

「……………へ?」

目を丸くする城ヶ崎さん。ポケットに手を入れて気づいた。持っていない! スマホ持ってないよ俺! よろしくお願いします!!? ぶっ壊れて使えねえから捨てたんだつたよ! 何そのアホの子丸出し回答!!? バカじゃねえのバツカじゃねえの!!? スマホの有無くらい覚えとけよバカヤロウ!!? ああ城ヶ崎さんの目が点だよ! 気ままずくなつちやつたよどうしよう!!? 今そう言う空気は望んで無いよ! と、とにかく考えろ! 考えるんだツ! 何か、何かこの気まずい場をどうにかする方法を……………だめだア! 無理だよ俺空気を壊すとかそつち方面はよくやるけど場を取り持つなんてやったこと無いもん! あっ城ヶ崎さんが下向いた! 終わったー! はい終わったー! やつぱぼっちに

は無理でしたあ！はい残念でした！あああああああ！

「あ、えつとその、これはー、その、」

「……っぷー…ふくくっ……あはははははっ！」

頭の中が半ばパニックになりながら必死にこの場をごまかす方法を考えていたら、城ヶ崎さんが堪え切れないと言った風に声を上げて笑い出した。

「えっ………っつと………？」

「だってさー連絡先交換しようとしてスマホ持ってないよって……！しかも持ってないのを忘れる……っ！ふ、ふくく、フツ！すう……初めてだよそんなことっ！つくくっ面白すぎっ………！」

「へあ？」

てつきりドン引きされた冷たい目で結構ガチ目に罵倒された後、《電話を持ってないくせに電話番号を聞こうとする人のプライベートに意地でも入り込もうとする目の腐った不審者》って言う感じの不名誉な称号と一緒に後ろ指を指され続けることになるんだろうな、と思っていた俺は、心底面白おかしいと言うように大笑いされる予想外の展開に驚き呆然とする。

呆然としながら未だヒーヒー笑い続ける城ヶ崎さんに思わず気の抜けた声を上げてしまうが、すぐに取り直す。いや取り直して無いな。取り直すどころか、もつと取り乱して顔が熱くなる。

だって恥ずかしいんだもん！自分が結構思いつきり笑われて恥ずかしく無いわけないじゃん自覚したら誰でもこうなるでしょ!?？確かに想定した最悪の事態は免れたからいいんだけど……いや待てよ？これはまさか、中学生言いふらされるの黒歴史パターンじゃね？

『へー比企谷って香織に告白したんだー。香織可愛そー！』

『ハッ。比企谷なんか折本さんと？釣りあわねえに決まってるんだろ？バツカじゃねえの？』

『はい俺比企谷の真似します。え？好きな人イニシャルは……』

H・H……え？……それってもしかしてさ、俺のこと？』

『』『』『ギヤハハハハハハ!!』『』『』

走馬灯の様に思い出される過去のトラウマ。そんなとんでもない

モノを見せつけられた俺は――

「ああっ!??・もうこんな時間だ!俺そろそろ仕事なんで、じゃっ!!?」
――とりあえず怖いので逃げる事にした。

「えっちよっ」

いきなりの事に城ヶ崎さんの反応が遅れる。その隙を突くように目の前のドアに向けてずんずんと歩く。目標3メートル。目の前のドアへと真っ直ぐに。一刻も早くここから出るんだ。この恥ずかしさから少しでも逃げる為に……!

しかし、人というのはここまで不幸が重なることがあるんだろうか。昨日で運を使い果たしたのかと、あの後結構本気で思った。いやまあね?昨日の時点でもう一生分の運使い果たしたなって思ってたけどさ。

足に何かが引つかかるのを感じて足元を見た途端、身体が勢いよく前に倒れるのを感じる。急いでまたすぐに前を向き直るが、時すでに遅し。既に目の前にはドアのドアアップが映し出される。未だ加速している身体に俺は受け身すら取れず

「いッッッッッッ!?」

衝撃的な頭の痛み。チカチカと明滅する視界。衝撃に硬直する身体。

俺の頭は、止まらぬ勢いのまま、ドアに思いっきり衝突した。

………オーケー。今の状況をもう一度確認しよう。ここは彼女らと同室。しきりなんてないからあちらの会話はこちらに聞こえるし、勿論、こちらの会話もあちらに聞こえてしまう。あちらのしていることはこちらも見えるし、こちらがしていることも見えてしまう。今この部屋はさつきとはまるで違ってしん。と静まり返っていて、更にドアの前に転がっている俺に5人の視線が突き刺さるのを肌で感じる。こんな致命的すぎる状態で今の失態を見られないなんて、そんな都合の良い話なんてあるはずもない。だから――
『ぶくっ』と空気が抜ける音が、奥から響く。

あかんこれ。そう思った時にはもう遅かった。自ら掘った墓穴から救ってくれる優しい神さまなんて、やっぱりどこにもいなかったん

……ほら。神なんて、いないじゃん。

16話

「はあ……。そういや、さつきはヤバかったな……。死ぬかと思った……。」

あの後俺はちひろさんに絞……。楽しくて為になる話をたくさん享受された。もちろん、例の3人と一緒に。余程怖……。楽しい話だったんだろう。笑いを堪えていたのか体はビクビクと震え、それでも堪えきれなかったのかヒクヒクと笑っていた。あとなぜか目から光が消えていた。なんでだろう！俺にはわかんないけど！俺は途中から記憶が無かったから知らないが、余程有難いお話だったんだろう。うん。そうに違いない。その後すぐに仕事に移り、横でちひろさんが天使の様な笑顔をたたえる中ひたすらにPCの画面に集中しひたすら文字を打ち込んだ。決して横の天使様が怖かったわけじゃない。決して。ちひろさんは優しくして気立ても良くてしっかりしてるとてもいい人。異論反論は一切認められません！……。あれ俺なんて呼び方がちひろさんに……。どうしよう。なんか絶対にそう呼ばなきゃいけない気がする。怖い。マジ怖い。

「あやべ、早く机拭かねえと。」

一通り振り返りを終えた俺は、いけないと気を取り直し、さつきまでお客さんがいたテーブルの天板を水に濡れた台拭きで拭いていく。

ここは346プロと併設した小さなカフェ。名前は確か、美城珈琲、だった気がする。仕事と同じで今日から仕事入りだ。今日ちようど社員証を貰ったので、面接と仕事の説明をしてもらい、早速仕事に入れてもらった。翌日から仕事、ということになると思っていたが、今は9時半。今日から始めさせてもらっている。なぜ今日からになったのかというと、主にお隣の終業時間が原因である。346プロの終業時間は基本的に7時なので主な客層を346の社員が占めるこの店はこの時間にはもう殆ど人が入ってこないからだとか。このマスター曰く、人がいない内に仕事を覚えてもらって、早めに仕事に慣れてほしいとのこと。正直人がいるところで慣れないことをするのは嫌なのでこの配慮はとて有難かった。今日の分のお金も

貰えるし。

ここでみんなはこう思うだろう。なぜ基本専業主婦希望の俺が仕事終わりにバイトなんてものをやってるのか、と。しかし、これにはちゃんとした理由があるのだ

その理由は2つ。1つは生活に使う金を稼ぐ為。もう1つは常務から貰った一万円を早急に返す為。この2つだ。何しろ次の給料日は2週間後。そこまでは自前で生活費を稼がないと、食事などの最低限のことすらできないし、人に迷惑をあまりかけたくないという俺の考え方もあって、常務に借りた一万円をなるべく早急に返したいのだ。稼ぐだけ稼がないでなんかあって返せなくなったらやだしね。

机を拭き終わった俺は、流し台で台拭きを洗い、カウンターに戻っていく。

「お疲れ様。一回休憩してきていいよ。」

「あ、はい。お疲れ様です。」

このダンディーそうな渋いおっさん（CV：速水奨）がこちらのマスターである。最初入って落ち着いた低音ボイスが聞こえた時はここはラビットなハウスなのかと思つたよ。どうやら既婚者で元346の社員らしい。嫁さんが今も346で働いていて、結婚を機に仕事をやめて、夢だったカフェを開いたそう。事務所の隣に店を構えたのは、嫁さんが頻繁に来て話す為と、会社の知り合いがそのまま常連になると踏んで、最初から安定して稼ぐつもりだった為らしい。商魂逞しい人である。あと補足すると超いい人。とにかく優しい。

洗い終えた台拭きを置いてから休憩の為に控え室に入り、ふう、とため息を1つ。目を伏せると同時にキィ、とドアのつがいの軋む音が『すみません遅れましたー！』と焦った声音の可愛らしい声と一緒に聞こえてきた。

「ぜえ、ぜえ、遅れてごべんなさい！ふうっ、仕事の打ち合わせが、はあ、長引いちやって！げほっげほっ！」

入ってくるのと共に思いつきり咳き込み、肩で息をしながら膝に手をつく少女。この感じだと、多分この人がマスターが言っていた“もう1人のここで働いてる少女”なんだろう。

「はあ、はあ、ふう……あれ？えっと、もしかして新しいバイトさんですか？」

可愛らしい童顔に大きなリボンで1つにまとめた明るめの茶髪。黒のミニスカにピンクの柄ブラウス。その上に黄色い耳付きパーカーを羽織るといふなんとも庶民臭い、というか垢抜けてない感じである。

「あ、比企谷つす。よろしくお願いします。」

「へえ。比企谷さんって言うんですか……今時の若い人は目が腐つ……個性的なんですね！」

「おい。」

「……ごめんなさい。ついうっかり。」

そう謝りながら目をそらすこの人こそ、知る人ぞ知る超長歴地下アイドルでこのカフェで働くもう1人の少女。安部菜々17歳さんである。店長曰くポロポロこぼすらしいが、最初から思いつきりこぼしてる安部さんを見て、俺も少しだけからかってみたくなった。

「……ん？今時？」

「!?……あ、あー！そうだ！自己紹介を忘れていましたね！私としたことがついうっかりっ！では早速私から始めますね！」

『ん〃、ん〃ん〃っ』とやっぱりどこか古臭い感じのする咳払いの後、隠す気もなく盛大に焦った様子で年齢詐称の容疑者が自己紹介を始める。

「」

「……17歳？」

「え、ええ！そうですとも！ナナは17歳！ウサミン星出身の17歳ですっ!!?..」

「ウサミン星。」

「ウサミン星っ!!?..」

「片道電車で？」

「1時間!……の所にウサミン星行きのワープ装置があるんです!」
なんだこれ。超楽しい。

俺のからかいやカマかけにまんまとハマってオーバリアクショ

ンを取る安部さん。年はきつとあっちの方がだいぶ上だと思うが、思わずからかってしまう。それほどにいじりがいがあるのだ。

「じゃあ学生証出してくださいよ。持ってるでしょ?」

「そつそそそれは……い、家に!家に置いてきちやっただんですっ!」
「知ってますか?学生が学生証を持たないでこんな時間まで外出してるとどこでもすぐに見つかって補導されるんですよ?」

「え?っつ?」

「学生さんなら早く家に帰った方がいいんじゃないですか?きつと親御さんが心配してますよ?帰りが遅いなって。」

「で、でも、この後シフトが……」

「この後シフトですか?ダメじゃないですか学生がこんな遅い時間に仕事なんてしちやあ。というか、さつき仕事の打ち合わせが長引いたとか言ってたじゃないですか。学生にこんな遅い時間まで打ち合わせするなんて、その会社ちよつとやばいんじゃないですか?」

「えつと、ええつと、でもバイトが……かといって歳を……なんて絶対ダメだし。でも補導は嫌だなあ……。」

「あ、それ嘘です。」

「ですよねえ。どうしよう……でも補導されちゃ……え!?う、嘘つ!?ええつつつ!?」

「まあうろついているところを見つかったら補導ですけどね。」

……やばいな。ほんとに面白い。

ちよつと涙目になりながら必死になって訴える安部さんの姿にんだか背筋の辺りがぞくりとした。自然と口の口角が上がる。今ならあいつらが城ヶ崎さんをいじる気持ちちよつとわかる気がする。

「比企谷君。菜々ちゃん。シフトお願い。無事に仲良くなれたのは結構だけど、仕事の時はもうちよつと静かにね。」

カウンターの方のドアが開いて、マスターから休憩の終了と注意が飛んでくる。どうやら外に漏れていたようで、聞かれてたらしい。ちよつとはしやぎ過ぎたと反省。もしマスターがめちやくちや厳しい人だったらって思うとちよつとすくんでしまう。やっぱりマスターがここのマスターでよかった。

それから仕事に戻り、安部さんと2人で仕事をこなしていった。といつても、こんな遅い時間にお客が殆どこの店に寄り付くことなんてないから殆どやること無かったし、暇な時間結構あったんだけど。

バイトも終わり、夜も遅いというところで、俺が安部さんを駅まで送って行くことになった。やっぱりずっと年上だからなのか、安部さんは気を使って話を振ってくれて、とても話しやすい。昨日もそうだが、いつも基本的に1人か小町と登下校してた俺は、この状況を新鮮に感じる。

「そういえば、比企谷君ってなんでここでバイトを？やっぱりお小遣い稼ぎですか？」

「生活費捻出の為です。」

「えっ。」

「ちよつと親元離れてるんすよ。仕送りも無いからここで働いてるって感じです。」

「でも、え？比企谷君ってまだ高校生の歳じゃ……」

言われてからハツとした。これは失言だった。俺の歳では普通まだ高校生だ。今時中卒の人はそれこそ学校の中に数える程しかいないくらいだし、親元離れてこんな遅くまで生活の為にバイトしてるならそれは自分の生活の困窮さをそのまま言ってる様なものだ。しくじった……まあ、もうここまで言ってしまったなら仕方ない。どうせそう深く関わる事にはなんないだろうし話しちまえ。

「あー。えつと、まあ、所謂高校中退ってやつですよ。ちよつといろいろありましてね。でも今はちゃんとした会社入ったし、初任給貰えれば稼ぐ必要もないですから。」

「あの、ごめんなさい比企谷君。ちよつとデリカシーが無かったです……。」

そう言つてシユンとしてうつむいてしまふ安部さん。

「いや、大丈夫ですよ。これでもちゃんと食い扶持はあるし、その……俺のことを、ちゃんとわかってくれてる人もいるんで。そんなに心配してないっつーか、なんていうか……」

途中まで言つて言葉が詰まる。正直、あの事についてはあまり思い

出したくは無い。ギリギリで漸く保っていた均衡が一瞬で崩れ去ったあの記憶は、今も俺の中に深く残ってるし、あそこに拾って貰う前は、毎晩の様に夢を見ては涙が出て、心をすり減らしていた。でも、もう俺もあの事はなるべく気にしないようにはしてるし、その、アホみたいに俺に優しくするあいつらを見て、まだ確信……はできないが、あそこが俺にとって、新しい居場所になった。と思う。でもちよつとだけ、まだちよつとだけ、それを言うのは恥ずかしい。

「そ、それより、そんなこと言ったら安部さんだってそうじゃないですか？学生だったらなんでこんな遅い時間まで働いてるんですか。」
「う、それは……う、ウサミン星の高校生はそこら辺ゆるいので大丈夫なんです！」

「万能ですよ。その設定。」

「せ、設定じゃないもん！」

「はは。どうだか。」

「あつ！今鼻で笑いましたね!!？」

「笑ってない笑ってない。ふくく……」

「あー！許さない！もう許しませんからー!!？」

　　こういうのも案外、悪く無いなって。そう思いながら駅までの道を2人で歩いていく。

　　安倍さんを無事に駅まで送り届けた俺は、寮について寝間着に着替えて、倒れこむ様にしてトラブル続きの大変な、濃い1日の幕を閉じた。

17話

あれから5日。毎日毎日アホみたいに濃かった平日が終わり、休日
がきた。

休日がきた!!?↑大事なこと

そう。休日である。人、木、日と書いて休日。人が木の下で休む日
と読んで休日。この4日間、慣れない仕事をコツコツとこなし、これ
でもかと振り回され、耐え抜いた。

そして俺は勝ち取った!休日という、最高の2日間を!よく頑張っ
たッ俺エ!!?

今日は存分に休もう!惰眠を貪りテレビや本、ゲームを心ゆくまで
楽しもう!今日は休日!迷惑かけなければダラダラしても何しても
許される……………の、筈でしたが!

発現の^早す^ぎる^ワカー^ホリック^ク
自然に7時に目が覚めちやったよ事件や!

本ゲーム所持テレビはお金もつたいない
少ないというか殆ど無い娯楽とお金など!と、に、か、く、お金が足
りない!することがない!ついでに部屋に何も無い!とのことによ
り!せっかくの休日にも関わらず日用品を買いに行く事になりました!
た!いえーい!くそつたれが!

というわけで、外出着に着替えた俺は、木枯らし吹く秋空の中、昨
日マスターに前借りして出して貰った1週間分の給料をバックの中
の財布に突っ込み、からりと乾燥した街中をとぼとぼと歩いていた。

これまでの疲れもあつてか、1度起きたあとまた二度寝したら中々
に遅い時間に起きてしまい、時刻はもう昼過ぎ。やはり秋も終盤に入
ると昼になつても寒いなあ、なんて思いつつ、冷たい空気に晒されて
少し冷たくなつた指先を握る。近い内に丁度いい服も欲しいもんだ。

「まずは飯かな……………今日もワックで済ませるか。」

びゅうと吹いた木枯らしにぶるりと身体を震わせてから、先ずは腹
ごしらえからと、俺は今日も変わらず第2の故郷。ワックへと足を向
けるのだった。

長かった買い物も漸く終わり、両手に大きなレジ袋をぶら下げた俺は、未だ完全に取れていなかったらしい疲れを、今日の多すぎる人混みに対するストレスも上乘せしてどんよりと歩いてきた。きつと今の俺の目は間違いなくいつもより数倍濁っている事だろう。そもそも打ち上げられて干からびた魚くらいには。ところで時刻はもう夕方。もう日はだいぶ傾いていて、茜と紫紺のコントラストが未だうじゃうじやと人が動く東京の地面を照らしていた。

「あゝあー。だつる。」

にしても東京は本当に人が多い。何回吐くと思つたか。ここ最近ずっと346の敷地内か美城カフェとマツクにしかいなかったから本当に何度も帰りたくなつた。いや、確かに家を出た直後は東京彷徨つてたしバイト初日に菜々さん送る為に駅まで行つたけどさ。そんな事気にする余裕がなかったし、元々安倍さんがシフトの時間から遅れてたまたま終わるのが遅い時間になつたからってだけであつて、あの時は帰宅ラッシュ過ぎてたから人が少なかつたし。あれから送つたこと一度も無いし。とにかく初めてこの人混みをまともに体感して気持ち悪くなつたんだよ。

「あれ、ハチじゃん。」

「あ、木村さん。」

そんなことを考えていると、見知つた顔に声をかけられた。そこにいたのは身体中至る所からイケメンオーラを排出するイケメンロツクアイドル。なつきちこと木村夏樹である。今日はオフなのか、黒縁の眼鏡をかけて、いつもはバックに固めてある前髪も、今日はそのまま下ろしている。なんか新鮮だ。これが世に言う「普段前髪上げる子が前髪下ろすと超カワイくなる現象」なんだろうか。雰囲気も違って見えてとてもいいと思います。まあ、間違つてもそれは言わないんだが。

「外で会うなんて珍しいな。すげえ荷物だけど何買つたんだ？」

「日用品を一通り。やっぱり何も持ってこなかったんでいろいろ必要になっちゃって。おかげで前借りした1週間分のバイト代殆ど飛んでいきましたよ。」

「ハハッ！そりゃ災難だったな！」

「はい。ほんとに。」

せっかく前借りではあるがバイト代貰ったのに借金を返せないどころか、買うものが意外に多くて今週の飯も三食^いワック^もが確定する程に余裕が無くなっていった。せめて今日くらいはご褒美にすき家の牛丼セットでも頼もうかと思ってたのに。毎食毎食ずつと通ってるからバイトのクルーの人と注文の時ちよつと話したり挨拶するくらいは顔見知りになったんだぞ。終いにはそのクルーのおばさんと五十嵐に栄養バランス心配されてちよつといたたまれなくなっちゃったし。もうなんていうかいろいろと台無しだよ。あ、でもそのあと五十嵐に貰った漬物と鮭の西京焼きはうまかったです。一緒に出して貰ったご飯と味噌汁によく合うんだ。これが。

「じゃあそろそろ。これを置くのもあるんで。」

「おう！引き止めて悪かったな。また今度話そうぜ！」

「うっす。」

挨拶まで終えた俺は、寮の方向に踵を返し歩き出す。帰りがけにワック寄ってワンコインセット買っていこう。あとでまた外出るの面倒だし。

「あ、そうだ。すまんちよつと待ってくれハチ。」

数歩歩いたところで、また木村さんに呼び止められる。

「何ですか？」

「2回も引き止めちゃって悪いんだけど、ちよつとこの後暇か？」

「え？まあ、はい。暇ですけど。」

「じゃあさ。1つ頼みがあるんだけど、いいかな？」

「頼み？」

「今日の夕飯と交通費奢るから、ちよつとアタシに付き合ってくれない？」

食費が浮く

タダという甘い言葉に負け、1度部屋に買った日用品を置いてから出発し、現在木村さんに連れられて見知らぬ駅で電車を降りたところ。都心にあるにもかかわらず、この駅にはあまり人がいない。群青が黒に染まろうとする日没頃。思いの他清潔感のある改札を通れば、灰色のブレザーを着た学生にすれ違う。見渡すと、ちらほらと学生らしき人影が見える。

「学区、ですか？」

「ああ。まあ用があるのは学校じゃないけどな。」

そう言っただけで慣れた足取りで道を歩く木村さん。どうやら何度か行ったことがある場所のようで、聞いてみると『結構馴染みのあるところか、世話になった場所だよ。』とのこと。

夕方になり未だ賑わう商業区画を抜け、打って変わって人気が少なくなつた細道を進む。

「なあハチ。」

ある程度奥まで歩いていると、不意に木村さんから声がかかる。

「はい？」

「ただのちよつとした用事なんだけど、いちいちスーツ着てこなくてもよかつたんじゃないか？」

そう。木村さんの指摘通り、俺は今仕事用のスーツに身を包んでいる。少しボーイッシュでラフな格好をした若い女性とパリッとしたシャツをきた男。側から見ればまるで男の会社帰りに飲みに行く仲間まじい男女2人みたいな構図だ。いかんせんもう片方はスーツに着られている上に目がアレなのでその感じすら出さず逆に怪しさが増してしまっているが。

「だってほら。木村さんは今着実に人気が出てきてるアイドルじゃ無いですか。せっかく伸びてるこの時期に俺が私服で一緒に行つてスキャンダル。なんて取り上げられたら俺木村さんにどう償えばいいのかわかんないですから。この格好でいた方が346の職員だつてその場でボディガードでーとかアイドルの好きなものを見てこれ

からの方向性をーとか言い訳できるじゃないですか。」

「へー。お前なりにいろいろ考えてんだな。確かに、アタシアイドルだもんな。ちよつと自覚が足りなかったか。あんがと。ハチ。」

俺の言葉に感心した様な顔をする木村さん。少し嬉しそうにかりと笑いかけてから、ありがとうと言ってきた。

「……。」

「……う？どうした？」

「い、いえ。ちよつとぼーつとしてました。すいません。」

……どうしよう。ホントは他に部屋着しか無いから。なんて今更言えない……。

「お、そろそろだな。」

さつきまで歩いてきた小さな川沿いの道を抜け、なんだかオシヤレなカフェテラスを通り過ぎたところで、漸く木村さんが止まった。入り口前のタイルの床は大きくギターの形。プラスチックの黒看板に浮き出ているのはLIVE HOUSEの白文字。

「ライブハウス……ですか。」

「ああ。ここの辺りってガールズバンドが多くてさ。まだアタシがバンド組んでやってた時によくここにお世話になったもんだよ。」

「そうなんすか。」

「ああ。この人達にはホントに良くして貰ってさ。アイドルになった今でもたまーにちよつとだけ歌わせてくれることもあるんだよ。」

「え。それっていいんですか？木村さんアイドルですよね？」

「それがいいんだってさ。プロデューサーから許可は取れてるし、むしろ顔が売れるからどんどんやってってくれってだよ。」

「ああ。なるほど。」

木村さんはロックアイドルで通してるから、別に木村さんのアイドルとしてのイメージの齟齬は全くないし知名度を上げるにはもってこいってわけだ。そういうライブパフォーマンスの練習にもなるし、思いっきり歌うことで本人のストレス解消にもなるから一石三鳥ってところか。そりゃプロデューサーが止める理由なんて無いな。

「にしてもここで手伝いですか？いきなり仕事は流石に慣れても無い

し流石にすぐには無理そうなんですけど。」

「ん？あー。いや。そうじゃないよ。」

「え？」

「とりあえず中入ろうか。ほら。これチケツト。」

「チケツト？へ？え、ちよつと。これなんのチケツトなんすか？てかなぜに俺に渡すんすか。」

チケツトを渡された俺の反応を見て、木村さんがやれやれまったくと肩をすくめる。

「あんまり察しが悪いとダメだぜ？ていうか気づいてて気づいてないふりしてるだろ。」

と嘆息する木村さんをポカンと眺める。相変わらず様になり過ぎているイケメンっぷりである。

数瞬してからはつと我に返つて手元のチケツトを見てみると、そのチケツトは今夜演奏するであろうバンド達の名前が入ったライブチケツトであることがうかがえた。

「ライブ……ですか……？」

「ああ。ライブだよ。アタシのお願いはハチがアタシと一緒にこのライブを見に行くこと。ホントは友達と行くつもりだったんだけどさ。その友達が急に用事が入っちゃって。チケツトもつたないからハチを誘つたつてわけだ。」

「え……で、でもそれは流石に……」

「まあ遠慮してもいいが、その場合は交通費と今日の夕食代の件は無しな。」

「……一緒に、行かせていただきます。」

申し訳なさすぎるし、こんな俺だけに益がある様なこと絶対に遠慮したいのだが、正直ここまで往復の交通費を考えると生活費が大変なことになるので渋々と言った形で了承する。

「そんな気にすんなって。1人で行くのが寂しくて誘つたわけだし、アタシがいいって言ってんだからいつまでも気にされる方が嫌だしな。割り切った方がいいと思うよ？」

「……わかりました。今日はまんまと来ちゃったわけですし、大人し

く今回のライブを楽しませてもらいます。けど、今度俺が給料貰った
らなんかお礼させて下さい。絶対。流石にここまでしてもらってな
んも返さない程俺の肝は座っちゃいないんです。」

「ははっ！了解。じゃあ次の給料日を楽しみに待ってるよ。」
「うっす。」

俺たちはお互いに笑い合って、賑やかな中へ続くガラス張りのドア
を押し開けた。

18話

ところ変わってここはサイゼの店内。2人がけのテーブルに座り、一通り注文をした俺たちは、言葉も交わさず前菜に運ばれてきた野菜サラダをもさもさと食んでいた。

「……で?どうだった?」

俺たちの中の沈黙を漸く破ったのは木村さんで、最後のトマトを食べ終えてから口元をにやりと歪ませながら口を開く。

「なんつーか……凄かったです。」

暗く閉鎖的な部屋の中、唯一光が差すステージ。しかしその上で立って演っているのは数人だけ。しかし、その少人数の元から放たれるのは耳が思わず驚いてしまう程の大音量。いくつかの楽器に繋がれたアンプからの音圧に向かい風の様な錯覚さえ覚えてしまう程だった。

ハイテンポを狂ったように思いつき掻き鳴らし、甲高いストリングの電子音をばらまくギター。テクニカルなリズムを響かせ、一層とその音の厚みを際立たせるベース。キーボードがその多彩な電子音からなる装飾や旋律で、曲の遊びを作り出し、数多くのパーカッションを使い分けながらテンポを刻むドラムは、場をひたすらに盛り上げ時折カウンターの様に特大のアクセントをつけていく。その爆音と言っても差し支えない様な伴奏の中でも一際に存在感を発揮するボーカルは、バンド毎に違うそれぞれの声色でメロディーを一気に歌い上げる。曲の全てのパートがメロディーであるという重圧を跳ね除け、胸を張って歌うその姿は凛々しく、圧倒された。それぞれの音が絡み合い、高め合い、共鳴して、異様な熱気と高揚を作り出す。メンバーはときどきお互いに確認し合い、心のそこからの笑顔を浮かべながら、また不敵な笑みを浮かべながら演奏を絶えず続けていく。そのステージに立っていた全員が、楽しげで、生き生きとしていた。

そして、それに当たった観客は熱に浮かされた様にそのステージに向かつてコールを送る。その始終を観ていた俺は、暫し呆然と立ち尽くして、終わった時にはいつのまにか大声でコールを叫んでいた

のを覚えている。記憶は未だ鮮明で、今ですら高垣さんの歌を聞いた、あの時の様な高揚感に身を包んでいた。

今回のライブを観ていて、凄い、なんていう抽象的な感想しか湧いてこなくて、具体的で気の利いた言葉なんて、一つも出てきやしなかった。ライブが終わってからもずっと、その熱風と大音量が飛び交う暗室の光景がこの目の裏にしっかり焼き付いていて、たった数時間の、けれど未だ冷めきれない羨望と興奮が俺の脳裏をチラチラと焦していた。

「……い。おーい。おーい！」

いきなり目の前に現れた手の平に気づき、ぱっと顔を上げると、「やっと気づいたな。」と木村さんが苦笑いしていた。どうやら結構考え込んでいたらしい。

「……あ。すみません。ちよつといろいろ考えてました。」

「ライブのこと?」

「えっと、はい。そうっすね。ライブのことです。」

そういうと、木村さんは「そっか。」とふつと微笑む。

「どうだ?好きになっただろ?アイドルだけじゃなくて、ロックも。」言葉に詰まる。確かに熱狂する程興奮した。あのうるさい程の爆音も嫌いじゃなかった。だけど、恥ずかしいのだ。いざ言葉に出そうとすると。なんていうか、柄に合っていない感じがして。

「……えっと、まあ、はい。なんていうか、よくわかんないですけど、なんかもう、凄くて。圧倒されたっていうか、魅了されたっていうか、高垣さ……アイドルのライブでこういうライブハウスみたいなどこには来たことあったんですけど、その時とは全然違くて。まあこういうのも嫌いじゃ、n……」

「そうだろそうだろー!やっぱ初めてのバンドライブっていうのはすげえびつくりするよな!超わかるよ!やっぱ最初はその音量と音圧に圧倒されるんだよな!確かにロックバンドっていうのは性質上他に比べて音量は違うし曲中のアクセントのインパクトも凄まじいからな!うんうん!あーアタシも初めての時はびつくりして固まっていたからなあ!あ、そうそう!因みに今回出たバンド……c o l o r sは

アタシのダチがいるバンドでさ！チケット貰ったのもそいつらから
なんだけど、あそこの良さはなんといいっても……」

「ちよっと待ったストップです木村さん。声でかいです。抑えて抑え
て。」

さつきからよっぽどバンドの話をしたかったのか、目をキラッキ
ラツ輝かせてちよっとたじろいでしまいうくらいの早口で捲し立て始
めた木村さん。周りの人達がぎよっとして見てくる中慌てて止める
と、はっとしてから、申し訳なさど恥ずかしさが混ざった様な顔で「す
まんすまん。」と言って話すのをやめた。人差し指でポリポリと気ま
ずそうに搔かれはにかむその頬は、やっぱりほんのりと赤く染まって
いた。

「お待たせしました。ミラノ風ドリアとミートソースボロニア風。粗
挽きチヨリソーです。」

「あ、はい。」

話が遮られたところで、ちょうどタイミングよく料理が運ばれてく
る。店員さんが注文の確認をしてからここを離れ、また2人の間で沈
黙が流れる。

「……とりあえず、食うか。」

「……そうですね。」

木村さんの言葉でお互い手にフォークとスプーンを持つ。

鮮やかな茶と黄色の陶器に詰められたグラタン風の一品。ミラノ
風ドリア。税込299円。グツグツと滾るミートソースに白いチー
ズが満遍なくたつぷりとかけられ、チーズとソースの濃厚且つ柔ら
かな香りが漂ってくるこの皿に、思わずごくり、と喉を鳴らす。

「……いただきます。」

まず両手を合わせていただきます。料理になった命に感謝してか
らスプーンを入れる。持ち上げるとかかったチーズが伸びに伸び、な
んとか断ち切って口に運ぶ。

「うめえ！」

ターメリックライスの独特でほろ苦い香りとホワイトソースと
ミートソースの優しくも濃厚な味わい。そこに上に乗ったチーズの

パンチの効いた旨味と酸味！あーうめえ！やっぱこれだわサイズ最強！

これは持論だが、この皿はこれで1つの完成形で、シェフが料理したこの皿は、値段以上の美味しさと価値があると俺は思う何言ってるだろね俺。

何日？何食？何日か前に作ってくれた五十嵐の西京焼きぶりののまともな食事に暫く無心でがつく。これで299円とかやっぱサイズ最強だわ……299円？

……あれ？ちよつと待てよ？俺が毎食食ってる200円バーガーとドリンクのセットで300円。このドリア単品とお冷で299円………？

その時、電流が流れたかのような鋭い衝撃と共に、数学が壊滅的な俺の頭に天地がひっくり返る様な、とんでもない方程式が浮かんできた。

「1円……1円、サイズの方が安い……？」

「お、おい。どうしたんだよハチ？なんかしようもないこと言いながらすごい顔してるけど……？」

「木村さん……俺は今、とんでもないことに気づいてしまいました……。」

「あ、うん。今聞いた限りだと途轍も無くしようもない内容の気づきだっただけはわかったよ。」

「なんと、ワツクの200円バーガーとSドリンクのセットよりサイズのミラノ風ドリアとお冷の方が1円安いんですッ!!？」

「うん。知ってる。」

「な、なんだって……!!??し、知っていたのですか……?す、すげえ……て、天才だ……!」

「落ち着け。てかお前そろそろ恥ずかしくなってきただろ。ちよつと噛み始めてるし顔赤くなってきてるぞ。」

「……わかってるなら乗ってくれてもいいんじゃないですか？柄にも無く人が勢いに任せて無理やり人変えてやってるのに。」

「や、ゴメン。なんかやだった。それに大して面白くも無かったし。」

「……そういうこと言うのやめて下さいよ。俺も言ってからそれ直ぐに思ったけど言われると傷つきます。泣きます。」

「それはやめてくれ。アタシは、アンタの涙は見たくねえ……!」

「なんとなくカツコよく言ってますけど要はテメエの涙なんぞキモイから見たくねえよバ——カ!!?とかいう意味でしょこれ。」

「前半と後半除けばそういうことだな。」

「うわひでえ!泣いてやる!」

「あははっ!いい男がこんなところで泣いてちやダメだぜ?てかどつちかって言ったらこんなところで泣くハチのが恥ずかしいだろ。」

「ぐぬう……確かに恥ずかしい……。」

「ところで、さっきお前憧れた、とか言ってたな?」

「え、なんですか急に。ま、まあ……言いましたけど?……いやでもそれはその、憧れたっていうかなんていうか、言葉の綾で「ならやってみないか?バンド。」だから別にそういうんじゃない?……ん?バンド?」

「ああ。バンド。どつかで仲間見つけて、やってみたらどうかな?すげえ気持ちイイよ?あそこに立つの。」

「イヤです。」

「……えーつと。とりあえず理由教えてもらっていい?」

「え、だって普通に仕事あるじゃないですか。忙しくてまず無理ですよ。」

「で、でも、みんなと一緒にって音楽作るの楽しいよ?それにほら!休日使ってみんなで練習すればいいだろ?」

「それ以前の問題ですね。そもそも作れませんよ。メンバーが。俺のコミュ力を舐めてもらっちゃ困りますね。ダメな意味で。それに休日なんてもつとイヤです。誰が好き好んで休日っていう超貴重な時間をよく知りもしないやつとの絡みに割かないといけないんですか。1人で楽器を練習するならともかく絶対イヤです。絶対。」

「……うん。ごめんな。なんか、付き合わせちゃったみたいで。いきなり迷惑だったよな……。」

「ああ!?!?違います違います!木村さんのこと言った訳じゃ無いんで

すよ！今回の貴重な体験というか木村さんは俺の中じやそういう人達とは違うっていうか……とにかく木村さんのこと言った訳じや無いんでその顔文字みたいに落ち込むのやめてくださいー！」

(・ω・)

「あ……………」

自室のベッドの上で寝転がりながら、ぼーつと声を上げる。これでは何回だっけ。数えてなかったからわかんないけど最低5回はやってみる気がする。

「また、借りを作ってしまった……………」

やっちゃまった。どうしよう。そう言っても何もない筈の部屋の一角に目を向けると、本当に何もない部屋の中で、途轍もない存在感を漂わせるそれが見える。プラスチックのつるりとした光沢を持つ、一本のギターが。

「どうすっかなあ、これ……………」

あのあと、めちやくちや頑張つてなんとか木村さんを宥めたら……もういいや説明めんどい。とにかくなんやかんやあって、置く場所が無いからという見え見えな理由でギターを置いていかれた。もちろんピックとアンプと教本もご丁寧に添えられて。至れり尽くせりだなおい。

要は趣味、というか娯楽が無いという俺を慮ってギターやってみたらっていう腹で置いていってくれたんだろう。娯楽が無い、みたいなことを言った気がするし多分そうだ。我ながら自意識過剰だとは思うが、もしかしたら自分の趣味を共有したいとか、一緒にギター弾くやつがほしいとかそういう思惑もあったんだと思う。

「でもなあ……………ひっじょーに申し訳ないんだよなあ……………」

正直ギターを弾いてみたい、という思いはあった。あの光景を見て、やってみたい、あの上で自分の思うままかき鳴らしてみたい、なんて思った。というか、生活に困らなくなったらやってみるのもあり

かな、とか思ってた。でもね？でもね？それはあくまで「余裕ができたら」であってこんないきなり借りたとはいえギターが手に入るなんて思ってもいなかったもんで。

いや嬉しいよ？やろうと思ってたことが予定より全然早くできるようになったんだもん。そりゃ嬉しいよ？嬉しく無いわけがない。けどさ、本来向こうに気を使う仕事の筈なのに逆に気使われて、しかもこんなものまで出してもらって申し訳なさが天井突破してるんだよ。あとついでに楽器壊したらとか思うとめっちゃ怖い。

「……あ——……。」

そう思いながらも、ついちらりと見てしまう。寝っ転がって、ちらりと見て、奇声を上げる。そのループをさつきからずっとやっているのだ。ワンチャンRTA行けるかもしれない。うわくだらねえ。

だがこのままずっといるのはダメだ。拉致が開かない。そう考えた俺は決断し、すつくと立ち上がった。

「まあ、いつまでもうだってるのは時間の無駄だしな。仕方ない。」

自分に言い聞かせる様にそう言って、ゆっくりと歩いていく。その先には木村さんのギターセット。そうしてギターの元まで辿り着いた俺はぐわしっとギターのネックを掴む
……

……ことはせず、教本を手を取った。

「ま、まあ、まずは方法と基礎からだよな……。」

自分に言い聞かせる様にそう言って、俺はギター教本のページをパラパラとめくり出した。

19話

「ちひろさーん。書類確認お願いしますー。」

「はい比企谷君。見せて見せて……ふむふむ。よしOK！問題は無いね！流石比企谷君！飲み込みが早い！事務処理はもうお手の物だね！じゃあ手も空いたみたいだしちよつとお願いしてもいい？」

「はい。なんでしよう？一応さつき買ってきたコーヒーならありますよ。はいこれ。確かちひろさんが好きなやつですよ。」

「わあ嬉しい！ありがとうございます比企谷君！はいお金！これで足りるよね！お釣りの分は貰っちゃってね！」

「あ、ありがとうございます。」

「でもお願いしたいことはそれとは違ってね？ちよつと比企谷君にはお使いを頼まれてほしいのですー！」

「お使いですか？」

「そう！この書類をあるところに届けて欲しいの！」

「わかりましたけど……どこに？」

「ふっふっふっ。それはですねえ……武内プロデューサーの担当プロジェクト。シンデレラプロジェクト C P ーだよー！」

シンデレラ・プロジェクト。シンプロ、デレプロに C P と数多くの略称があるが本社ではもっぱら C P が主流だ。理由は母音が少なくて呼びやすいかららしい。このプロジェクトはあの笑顔です。で有名な俺の恩人の1人である武内さんがプロデュースするもので、期待の新プロジェクトという別称に違わず、この春に活動してをスタートしてから、そのプロジェクトメンバー全員が着々と人気を集めており、この夏のサマーフェスにてしっかりと成功を収め、新進気鋭のプロジェクトとの1つとしてこの346プロジェクトアイドル部門の新しい看板の1つになりつつある、今最も勢いに乗っているだろうプロジェクトである。因みに、今ではたまにハナコの話をしては盛

り上がっている渋谷も、この内の1人だ。いずれはハナコに会いに。と、いうことであの渋谷が所属している、CPことシンデレラ・プロジェクト前です。もう目の前のドアからいろんなシールとか貼ってあってとおっても賑やか。わぁ素敵！帰りたい！

さつきからこんなくだらないことをグダグダと考えてはかれこれ1分、俺はずつとこのドアの前で止まっている……いや、俺もとつと入りたいよ？早く書類出して帰って休憩したいよ？でもさ、仕方ないじゃん？ドアの奥から多分アイドルであろう女の子達の声が聞こえてくんだよ。んで、その声の内1つがさ、その仰々しい口調から察するに多分アレなんだよ。エターナル二なんちゃらのアレ……自分の古傷が思いつきり抉られる未来しか見えないんじゃないやあ……。

結局入る勇気が出ずいつまでもうだうだと渋っていると、奥からとたととこちらへと小走りする音が聞こえてきた。

『じゃあまりあお飲み物買ってくるねー！』

「あつ」

気づいた時には時既に遅し。どうしようともごついた一瞬の間にドアがガチャリと音をたて、勢いよくドアが開いた。

「なっんのジュースを買おっかなー……あれ？」

目の前に現れたのはまだまだあどけない小学生くらいの少女。ドアから飛び出した意気揚々とした顔から一転。こてりと首を傾けて不思議そうな様子をしている。

「……あ、どう、どうも。事務のものです。武内しゃん……プロデューサーに書類をお渡しにきましたー……。」

「んー……？」

少女は何かを思い出す様な、考える仕草をした後、思い出したのかポンと手を叩き、その瞳を輝かせた。……え？小学生相手にかみかみだったのはスルーなのかって？ははっ！やめろよ。死にたくないだろ。

「あー・凜ちゃんの言ってた人だー！こんにちはー！」

にはあつと擬音がつきそうな顔をして、こんにちわをしてくれる少女。このご時世成人でもちゃんとできない人がいる中ちゃんと挨拶

ができるのは八幡的にポイント高いぞ。

……因みに凜ちゃんの言ってた人とは……どうしよう。俺なんて言われた？久しぶりにまた屍しかばねる準備しなきゃ……。

「ん？っんん、こんにちは。多分赤城みりあ……ちゃんだよな？プロデューサーっているか？」

「!!？うん！そうだよ！よろしくお願いしますっ！」

どうやら当たっていた様で、少女……みりあちゃんは屈託のない満面の笑みをこちらに向けて、俺の手を握り握手の勢いを更に強くした感じでぶんぶんと振り回す。

「えへへー！みりあも知ってる人が出るくらい有名になってきたのかなあー！」

「ん。そうだな。」

………暇がある時に事務所寄ってアイドル誌のぞいといて良かったわ。眼福眼福。まだあんまわかんないけど丁度その時に見つけたんだった。

「それでね！んーと、プロデューサーはねえ……」

満足したのかパツと手を離し、これまたにこーっとして武内さんの話をし始めてくれた。

「あれ、どうしたのみりあちゃん？」

みりあちゃんが話そうと口を開き掛けると、向こうからいかにもお姉さんっぽい感じの綺麗な声があった。向こうを見ると、すぐそこに美人なお姉さんがみりあちゃんに呼びかけながらこちらにやってきていた。

「あ、美波ちゃん！前に凜ちゃんが話してた人だよ！事務の書類を渡しに来たんだって！」

「そうだったのね！こんにちは！比企谷君、で合ってるかな？」

なるほどと納得した様なリアクションをして、挨拶をしてくれる。多分また渋谷だろうが、俺の名前を知っていて、覚えていてくれたらしい。

「あ、は ひゃい。そうっす。」

慌てて返事を返すが、お姉さん相手でもまた緊張してしまい、かみか

みになってしまおう。俺はもうかみ癖を直すのを諦めることにした。だって治らないんだもん。ちくせう。

「ふふ、そっか！よかった！凜ちゃんが言ってたとおりだ！私新田美波です！大学2年生でまだまだ駆け出しだけどアイドルやってます！これからよろしくね！」

そう言うてにかつと笑いかけてくる新田さん。大学生にも関わらずその笑顔は邪気が無く、純粋な好意だけで接してくれているのがわかる。澆刺な声とは裏腹に柔和に笑いかけるその姿は、まるで、優しいお姉さんの様だった。更にはその健康的な肢体に均整の取れたスタイルを持つ体を若干屈め、無自覚か、首も少し傾けている。先程までレッスンを受けていたのか、その姿はジャージ姿で、両頬は上気し朱に染まり、汗もかいていたのか前髪や横髪が肌にくっついて超エロい。めっちゃ不謹慎だけどエロ同人にいつぱい出てそう。おねシヨタ系とか。

「あ、はい。よろしくお願いします。」

しかしそこは俺。頭の中の考えていることを一切顔に出さず言葉を返す。因みに、この回答までに駆け巡った先程の思考はおよそコンマ2秒のものである。見たか！これが生まれてから17年間、ずっと鍛え続けてきたポーカーフェイス！友達がいなくて寂しかったのを他の奴らに悟らせないように会得した、俺だけのスキルだあ!!？

「あ、みりあちゃんはもう飲み物買ってきて大丈夫だよ！ありがとうね！」

「はあーい！どういたしましてー！」

俺が虚しい思考を回している中、新田さんが許可を出すと、みりあちゃんは俺たちに手を振りながら廊下を駆け出していった。

「転ばない様にねー！」

「はーい！」

みりあちゃんが見えなくなつて、俺たちの間に暫しの沈黙が挟まれる。

「あー。じゃあ、比企谷君。」

暫くしてから、話すことが思いつかないからなのか、新田さんは少

し困った様に微笑んで、その口を開いた。

「今はプロデューサーさんここにいないから部屋に入つてちよつと待つてもらつていい？多分すぐ帰つてくると思うの。」

え、ホントにあの中入るの？どうしよう。嫌だ。自分が黒歴史えぐられて屍になる未来しか見えない。しかしストレートに言うのも失礼だし、大義名分を使つていい感じにお茶を濁しておこう。

「あ、いえ、自分は、えつとその……流石にアイドルのいる部屋に許可も無く押し入るのはちよつとなあつて……。」

「プロデューサーさんから仕事の関係者なら入れておく様に言われるし大丈夫！それに比企谷君のことはCP内で結構有名人だから話してくれたらみんな喜ぶと思うんだけど、ダメかな？」

「有名人？なんかしました俺？」

あれ、ほんとになんかしたっけ俺？ギター弾きすぎて徹夜して寝坊したこと？Lipp'sの連中に振り回されすぎてみんなに可哀想な人を見る目で見られたこと？一ノ瀬に怪しいクスリ飲まされて気付いたら廊下でぶつ倒れたこと？あれ。正直いろいろやらかした話は思い出せるけど渋谷に話されたにしても心当たりが多すぎてどれのことか逆にわからないんだけど。

「ううん、そうじゃ無くてね？凜ちゃんがここで比企谷君のことを話してくれて、凄い人だー！つてみんなに知れ渡っちゃったっただけだよ。」

………なんか嫌な予感がする。

「……因みに、凄い人とは具体的にどういう……？」

「公衆の面前で、ドゲサした凄い人だと、凜は言つてました。」

「お〴〵つどお〴〵？」

真後ろからのいきなりの声に驚いて、思わず張り上げた声に濁音がついてしまう。心臓止まるかと思つた。

急いで振り返ると、そこにはハーフ白髪美女がいた。外国人らしい整った彫りの深い顔に透き通る様に空色の瞳。まるでビスクドールの様な美しさに——ビスクドール見たことないんだが——

——俺は少しばかり、目を奪われた。

「だ、ダメだよアーニヤちゃん！それは比企谷君には言っちゃダメ！」
なにか不味いと思ったのか、新田さんが慌てて白髪美女を止めに入る。しかし、そんな努力も叶わず、彼女は首をこてん、と傾けてから言った。

「?なぜだめ……なのですか?比企谷さんはドゲサができる凄い人だと、比企谷さんに会った時には、そう、褒めて欲しいと、凜は言っていました。」

しらがびじよ の むじやきなばくろ!

こうか は ばつくん だ!

はちまん の ころろ は きずついた!

はちまん の ころえる!

はちまん は ひっしに なみだ を ころえた!

しかし ころえきれなかった!

はちまん は たおれた!

「……うん。そうだよね。そうなるよね。わかってた。うん。わかってたよ……。」

めのまえがまっくらになった俺は思いつきり膝から崩れ落ちた。自分でもわかりやすいくらいうなだれているのがわかる。いや、お願いいちよつと待って。今心のダメージが……新田さん。大丈夫!?!とか言って肩を揺さぶらないで激しい。白髪美女さんは心配な顔で覗き込まないで。あとそのロシア語俺わかんない。

……… 渋谷め。今度会ったらただじゃおかねえ。普通に対処に困って尚且つどうしようも無くいたたまれなくなる様なことしてやる。あとハナコに会う為にあいつん家押しかけてやる。まあ花屋だし、花の一本ぐらいは買ってやるけどな。覚悟しとけよ!!

「ああっ!比企谷君!ごめんね泣かないで!えーと、アーニヤちゃん、確かに凜ちゃんはそう言ってたけど、それは面白がつて言ってたっていうか、ふざけてたっていうか……と、とにかくっ!それを比企谷君に言っちゃおうと比企谷君は傷ついちゃうからもうやめてあげよ?ほら、比企谷君悲しそうだよ?……って比企谷君何その目つき怖っ!渋谷?……覚悟しとけ!?!落ち着いて!凜ちゃんに何する気!?!やめて

！このままだと犯罪者になっちゃうよ！引き返して比企谷君！まだ戻れるから!!？」

必死に美女……アーニヤちゃん？をフオローしながらも俺を励まして？くれる新田さん。その優しさが二重に心に染みて、なんだからもつと泣きそうになってくる。

「アー……アーニヤ、悪いこと、しました？比企谷さん、傷つけた……ごめんなさい、比企谷さん。」

若干涙目になっておろおろしながらも、こちらに合わせてしゃがんでくれて、なおかつしっかりとお辞儀をして謝ってくれるアーニヤ……さん？可愛い。大人なのに。

「あ、いや、別にそんな傷ついて無いし、大丈夫だから。頭上げて下さいよ。」

「本当、ですか？」

その姿勢はそのままに、まるで恐る恐ると言った風に顔だけ上げてこちらを向くアーニヤ……ちゃん？さん？……いや、さんでいいや。しゃがんでいるため前屈みになって近くなった顔は小さく、見るからにさらさらしてそうな綺麗な白髪がふわりとゆれる。俺を真っ直ぐ覗き込むその空色の両目は潤みを帯び、俺のお兄ちゃんセンサーがピンと反応してしまう。年上なのに。しかし俺は持ち前の理性でそれを退け、頭撫でたいのを超必死にこらえ、なんとか声を絞り出した。

「……本当。本当なんで、頭上げて下さい……。」

「！スパスイーバ！よかったです！ありがとうございます！比企谷さん！」

「」

「……あれ、比企谷君……比企谷君!!？」

……嗚呼……眩しい……ダメ。浄化するう……。

20話

「……あ、あれ？比企谷君？」

「……あ、いや、大丈夫です。ちよつとぼーつとしてました。」

短いトリップ天国の旅から戻つてくると、心配した顔の新田さんが見えた。短いと言つてもまあまあ経つてたと思つていたが、どうやらこの反応を見るにあまり時間は経つてないみたいだった。大丈夫と返すと少し安心した様に息を吐いた。3週間くらい逝つてた気がするんだが。にしても、どんな訓練したらあんな大人びてる顔立ちからあんな純粋な笑顔が出てくるのかアナスタシアさん教えてほしい切実に。無意識にアレやっているとと思うと未恐ろしい。天使かよ。可愛すぎて死ぬわ。

「そうなんだ？大丈夫ならいいんだけど。体調悪いなら言つてね？」

「トウイ、フ、パリヤートキエ。大丈夫、ですか？30秒もぼうつとして……体調、心配です。」

やっぱり少し長くトリップし過ぎてしまつていたのか、2人に結構心配させてしまつていたらしい。まあ30秒程度でもそれなりに長いか。それに慌ててもう一度大丈夫です。と返事をすると、とりあえずはその答えに満足したのか、新田さんはニッコリと笑つてからじゃあ、と1つ提案した。

「丁度ひと段落ついたところだし、ここで自己紹介しちやおつか！

……まずはアーニヤちゃん。自己紹介お願い！」

そう言うのと、新田さんはぱちんと手を叩いてアナスタシアさんを促す。

「はいー美波。オーチン、プリヤートウナ……はじめまして。私、アナスタシア、と言います。星を見るのが、好きです。アーニヤと、呼んでください。」

新田さんの呼びかけににびしつと元気に返事をし、自己紹介をしたアナスタシアさん。所々なまりや恐らくだがロシア語の部分が見られるから、多分ロシア人なんだと思うが、どうやら外国人は感情表現がストレートというのは本当らしい。日本人でこういうリアクショ

ンをする人は見たことが無い。え？神谷？いやあれは表現する物のベクトルからもう違うだろ。確かにリアクションは大きいけど。あれはツンデレっていうんだ。ほら。どこぞの澤村・S・えりりんさんもそんな感じだろ？え？一ノ瀬さん？……………いや、まあ感情表現がストレートと言うか、ストレート（物理）だけど、あの人はほら。あの人だから…………。

「えっと、よろしくお願いします。」

とりあえずリアクションどころは置いて、向こうが挨拶してのにずっとだんまりで挨拶しないのは流石に失礼だし、アナスタシアさんによろしくと返事を返す。またかんじやったけど気にしない。だってわかってたから。無理だって。ぼくはもういいこうしません。

「くぷぷっ」

そしてまた笑われると思って半ば諦めながら身構えていると、案の定、横から堪えた様な笑い声が聞こえてきた。じろりとそちらに視線をやると、腹に力を入れて笑いを堪える為だろうか。少し前屈みになった新田さんが口元に両手を当て、肩を震わせながら必死に吹き出すのを抑えていた。正直そうなることが分かりきっていたが、流石に少しむっとしたので少し責めるように新田さんを軽く睨む。

「な、なんで笑うんですか…………。」

「くくく…………ご、ごめんね？だって、アーニヤちゃんはまだ16歳になったばかりなのに、比企谷君が凄く緊張してたから、フフツ！ついで。」

「えっ」

「えっ？」

……………え？マジに16？大人だと思ってあんなに緊張して、あんなにカチカチになつて、もう対面で噛むことすら諦めたりしたの？年下だったの？うせやろ？

「あ、あはは！新田さんも冗談が上手いでs……」

「はい！アーニヤは16歳、です！」

「えっ」

あまりの衝撃に思わずふたりの顔を交互に何度も見る。美波さんもアナスタシアさん……アナスタシア？もニツコリ笑顔だった。

正にアイエエエエエエエ!? 状態である。16!?16ナンデ!?
?

いや確かにさ？北欧系の人って結構背高い人多いし顔立ちも彫りの深い大人びた顔が多いけどさ！歳の割にはかなりおさなげな態度だなとは思ってたけどさ！大人びてるにも程があるだろ!?？魔境かよ北欧!?？でもなんか北欧ハーフが持て囃されてるのもなんかかわかる気がする。おもっクソかわいい。

「あははっ！まあ、驚いちやう気持ちはわかるよ。凄く綺麗だし大人びてるから、結構かしこまっちゃやうよね。」

「キ、レイ?……スパスイーバ！嬉しいです、美波！」

嬉しさを全面に出して新田さんに抱きつくアナスタシアにどういたしましてと言いながらなでなでする新田さん。するとアナスタシアは嬉しそうに目を細め、親に懐いた子猫の様に新田さんに体重を預ける。それを見るとなんだか心がほわほわしてきて……

……………あつ、天使だ。天使の園が見える。

ツツとオ危ねえ！危うく百合沼にはまるところだった……。俺
じやなきやもうはまってたぜ……。

とりあえず、アナスタシアは戸塚に次ぐ第二天使として崇めること
にしとこう。じゃないとなんかバチが当たる気がする。主に北の方
から。

「あ、またぼーつとしてる。大丈夫？」

「え、あ……んぐんっ！あの、新田さん……そういうのは先に言っ
てくださいよ。びつくりするでしょうが。」

「えっ？え、えーつと、えへへ。ちよつと面白くって……ごめんね？」
そう言っ胸の前に手を合わせ、ごめんなさいとあざとくポーズを
とる新田さん。ほんとだよ。マジで恥ずかしかったんだけど？俺傷
ついた！めつちや傷ついた！ちゃんと反省してもらえようようにダメ
押しでもう少し言っておこう。よし言うぞ！俺は言うぞ！この頃ト
ラプリとかアホ共Lippsとかに毎日の様に振り回されて美少女耐性はつい
てんだよ！新田さんがさつきから目の前でスツゲエあざとくお願い
ポーズしてるけど大丈夫！これからちゃんと治す様について注意する
んだ！

「そんなこと言っても……」

「……………」

「そんなこと、言っ……」

「……………」

「そ……………はあ。まあ、いいですけど……………」

「ふふっ！ありがとう！優しいね！比企谷君！」

いやダメだった。持ってたのは美少女耐性であって美女耐性じゃ
無かったわ。やっぱりこのエロ可愛さには勝てなかったよ。ごめん
なさい。はちまんくやしい。

意見を曲げないことに関してはちよつとだけ自信があったのにと、
俺が密かにシヨックを受けていると、新田さんが何かに気づいた様に
声を上げた。

「あ、そうだ。忘れてた。今度こそ部屋に戻ろつか。ここじや通る人

とかに邪魔になっちゃう。自己紹介の続きは中でまたしよう?」

「どうやら部屋にここが部屋の外だった事を思い出したらしい。ん、これじゃ語弊があるな……もうちよつと厳密に言おうと、成り行きで部屋の中に入らず、外で会話をしていた事を思い出したようだった。厳密に言い直す必要あった?」

「あ、そうですね。じゃあお邪魔します。」

「ズイラー……いらつしやいませ! 歓迎、します!」

満面の笑みで快く部屋へと招き入れてくれるアナスタシアにほわほわしながら中に入る。しかし、あの時俺はすっかりは忘れてしまっていたのだ。己の生死に関わる様な、とても重く、大切な事を。

「……この部屋には……
ミナナルフオースなんちやらのヤツ」がいるという事に……

「みんなー! 比企谷君がきてくれたよ!」

「ひ、ひやいつ!?」

「クツクツクツ……待ちくたびれたぞ! 真実の濁りし『瞳』を持つ者……我が同胞よ!!」

そうして、前の発生から2週間ぶりの屍が出来上がった。久しぶりに生まれた今度の屍は、膝から崩れ落ち、まるで心に深い傷を負ったかの様に苦しそうに、心臓の辺りを掴んでいたと、後にその目撃者は語ったという。

「……ええ——つと。じゃあ、もう自己紹介ってことでいいか?」

あの後、俺はなんだかんだでそんなに時間をかけず立ち上がり、みりあちゃんが飲み物を買って帰って来た所で、今日のCPのメンツが集まったということで、とりあえず改めて自己紹介ということになった。

「はいはい! みりあが最初にやるー!」

まるで意気揚々と言った感じで手を挙げたのは先ほども会ったみりあちゃん。じゃあお願いね。と新田さんが言うのと、勢いよく立ち上がって自己紹介を始めた。

「赤城みりあです！踊ったり、可愛い服を着たりい……他にもいいいしまーす!!?」

両目をキラキラと輝かせよろしくと言われ、あまりの眩しさに少しみじろぎしながら挨拶をしてしまう。若いつて凄い。

「ありがとうみりあちゃん！じゃあ次は……時計回りに蘭子ちゃん！よろしく！」

「うむ……とくと見るがよい！」

新田さんに促され、きつとあの魔王ロールの為に練習したであろう口上を言つてフツと笑いながら立ち上がる銀髪ドリルツインテールゴスロリ少女。自信満々といった風になやりと笑うと大仰な仕草付きで自己紹介を始めた。

「ハハッハッハッ!!?」

「!?」

「あー比企谷君。蘭子ちゃんはあれがデフォだから。多めに見てあげて。」

「あ、え、はい。」

驚いたが、やつぱりあれがデフォらしい。それにしてもいきなり大声で笑うんじゃないよ。ビクってなっちゃうでしょうが。

「我が名は神崎蘭子！火の国より舞い降りた、墮天使よツツ!!?」

水を得た魚みたいに生き活きしてるなあ。

「我と同じ『瞳』を持つ者よ！アナタもまた導かれし1人……さあ！この我と共にこの世界を染め上げましょう!!」

まだ小柄な身体を精一杯突っ張って、自ら作り上げた口上を朗々と歌い上げる。端正で、しかし幼さの残るその顔を生き活きと輝かせるその姿は、痛々しさはあれど、成る程確かに。人を魅了させるには十分な可愛さ、凛々しさ、微笑ましさがあった。美少女が材木座と同じようなことをやるとこうなるのか。なるほどなるほど。

……まあしかし、いくら可愛かろうが痛いものは痛い。俺の虎馬メンタルがまた音を立てて崩れていく。さつきまで、暖かく見守ることが出来たのに、なんかもう見ていられなくなつて両手で目を覆つてしまう。というか言語が違うんだけど。何その俺の黒^{black}歴^{history}史をガリガリ削るような言語?!しかもちよつとわかつちやうから手に負えないはいちよつとルビ。厨二に侵されてちよつとカツコつけるんじゃない。

「あ、あのう……どうかしましたか?」

声に反応して手を退けると、心配してくれたのか思わず素に戻つてしまつている神崎がいて、少し焦る。

「あ、いや、大丈夫だ。あー、まあ、あれだ。こちらこそよろしく……頼む?」

「「えっ?」」

「えっ」

なんでだろう。みりあちゃん以外の全員がめつちや驚いた顔してる。いや、わかるんだよ。神崎のアレに受け答えができたことに驚いてるんだろ?俺がそつち系もちよつとかじつてたからわかつただけであつて、あんなの現役患者でもわかんねえもん。仕方ない。驚くのもわかる。だが神崎。なんでお前が1番驚くんのだ。そもそもお前があの話し方にしたんじゃないのか。

「はわわ……す、すごかすごか!ちゃんとわかつてくれとる……!」

「いやわかつてるならもう少しわかりやすくちやんと喋ろうか?……というか、思いつきり素と方言が出てるがそれはいいの?」

「あつ……え、えーと、えーとつ……こ、これからアナタは我が友!我が盟友である!これからもよろしくお願いします!」

「お、おう。」

「えーと、じゃあ、智絵里ちゃん。次お願い。」

「はっ、はい!」

最初の白は何処へやら。真つ赤に湯だった顔で神崎が座り、頃合いを見計らつた新田さんが次を促す。それにびくりと立ち上がったのは、赤紫がかった黒髪をこちらにもツインテールにした、気弱そうな少

女だった。緊張して行き場を失った目は右往左往し、どこかウサギの様な小動物らしさを感じられた。彼女は気を落ち着ける様に深めに息を吸い、緊張に固まった顔つきで話を始めた。

「え、えっと、緒方、智絵里です……。出身は三重県で、高校2年の、17歳……です。クローバーが好きでよく集めたりしてます。よ、よろしくお願い、します……。」

あ、かわいい。」

「あ、あう……。」

噛んだことを恥ずかしがったのか、唸り声を上げながら赤くなつて俯く緒方。うわ、かわいい。まるで……かわいい（語彙力

「お、おお……。」

「ひ、比企谷君……。」

「わー！八幡さん大胆！」

なんだろうこの反応。大胆とは？

……ま、まさか、いや、え、まさか。

「俺、何か言つて……？」

「いきなり智絵里ちゃんかわいいって言うなんて比企谷さんすごい！大胆ー！」

「アッ ツツ？！」

「う、うむ。流石は瞳を持つものよ！豪胆であつたぞ！」

「アああハッ」

「あはは……うん。やっぱり無自覚だよね。比企谷君。」

「ああああ……。」

やツツツツツツツツちやああ……。はかしい……。

「ちよ、ちよつと比企谷君。いくら恥ずかしいからって床で蹲つてゴロゴロするのはやめなよ……汚いよっ！」

「ごめんなさいそうですねもう存在が汚物ですよねわかつてるわかったますちよつと死んできますねもう金輪際関わらないようにしますんで……ホントすいません。気持ち悪かったですね？気持ち悪いんでや、もう消えて無くなりますので……。」

「め、めんどくさい……！」

「あ、あわわ……」

「あはは！床でゴロゴロみりあもやーるー！」

「あつ！やめてみりあちゃん!!?比企谷君の真似しちゃダメ！」

「あ、あはは……。そうだぞみりあちゃん。こんなゴミとおんなじことなんてしちやいけない。比企谷菌が移っちゃってヒキガエルになっちゃうから……。フフ、フフへ。へへ、へッ……。」

「あ、え、や、闇に飲まれよ！」

「み、みんなもうやめてよ――」

!!?

☒

21話

「すみません。見苦しいところをお見せしました……。」

現在土下座中。比企谷八幡です。いやあ今日もいい天気ですね！首筋や背中に突き刺さるみんなの憐む視線が痛い！絶好の土下座日和ですね!!？

「あ、あはは……まあ、次から気をつけてくれれば大丈夫だよ。………にしても、ちよつとうわあつてなつたからこれからはやめたほうがいいと思うな。アレ。うん。小さい子たちは愚か普通の人もドン引きしちゃうと思う。というか怖い。凄く怖い。」

「ドン引き。」

「……えっ、みたいなリアクションしてるけど逆にアレを見てドン引きする人がいないとでも思った?」

「………ソウデスネ。」

そうでした。前回のお話でかくかくあつてしかじかしてたんだつた。いや、我ながらアレは気持ち悪かった。今思い出すだけでも客観的に見ても主観的に見てもキモチワルイ。自分の行動を主観的に見てキモチワルイって相当だぞ。材木なんかより酷い。いや、ごめん嘘ついた。あいつが同人誌を買い漁る為にコミケに付き添ってやつた時、にわかでハマってた美人絵師を見つけた時の鼻息の荒さと、商品もらう時に手が触れ合つて絵師の人が生理的に無理みたいな顔して手をバツて離された時のあいつの砂になりそうな顔と反応の方がやばかった。

ふと、11行程度の若干長い回想と思考を止め前を向くと、ぴたりと会話が止まっていた。みんなが少し気まずそうに黙る中、いつもなら何も感じない筈の静かな時間がとても長く、重たく感じる。

何故こんな感覚を感じるのか、それは、俺が盛大にミスをやらかしたから、なんだろうな。だつて多分この状況作ってるの俺だもん。俺内輪揉めを遠くで見たり自分の関係無いところで気まずくなってるのを見るのは好きだけど、これ元凶俺だもん。ガッツリ内輪の中入りちやつてるもんチクシヨウ。

多分、自己紹介やつてる内に武内さんが帰ってくるだろうと予想してたが来ず、特に話すことが無くなっちゃったのに加えて俺が奇行に走ったせいで気まずさが超倍してるとこだろう。こんな時みりあちゃんとかアナスタシアとかがいればいいんだろうが、生憎狙ったかの様に2人揃ってお花を摘みに出かけた。これは詰んでいる。自信満々に一般人は理解できない言語を使うが、多分それ無しだと途端にコミュ障を発症するであろう神崎と、さっきからウサギよろしくずっとビクビクしてる緒方と、目の前の笑顔だけどなんか怖い新田さん。だあれも喋らない。目の前からの威圧がヤバい。やつぱ詰んでる。2人とも早く帰ってきて！僕の胃がストレスマツハ!!?

「……………あ、あー、えつと…………プロデューサー来ないです、ね？」
重い沈黙が漂う中、それを破ったのは意外にも緒方だった。しかも助け舟出してくれるだなんて!!?ありがてえ！ありがてえ！
「……………ん、ああ。そうだな。」

しかしそれを顔に出してはいけない。緒方に目で感謝を訴えつつも、あくまで平静を装って返事をする。せつかく緒方がくれたチャンネルを俺がなくすわけn

あつ！こつち見た！赤くなってにまにましてる！かわいい！かわーいーいー!!?
「そうだね、ちよつと遅いかも。」

どうも。出された助け舟を一瞬で台無しにする男。比企谷八幡でございます。ただ今棒読み気味の大きな声と共に目の前からの更に圧が非常に高まってまいりました。罪悪感と恐怖が臨界突破しそうでございます。目の前、満面の笑みでございます。死にそう。あつ待つて待つて新田さんこつち見ないで怖い怖い怖い。

また部屋に静寂が戻り、ピリピリとした緊張感がその場を支配する。出会って初めての俺に、温厚な新田さんの雷が落ちるのかと、ここにいた全員が生唾を飲み、その時を待った。

——全員が息を飲み、果たしてその雷は、落ちなかった。

やれやれと、仕方なさそうに。本当に仕方なさそうに息を吐く新田さんを見て、流石にふざけすぎたかと少し覚悟をしていた俺は、まさかのリアクションに目が点になる。

「……………え？」

「まあ、今回は許してあげるよ。比企谷君の変な行動に凄く怖くてビックリしちゃって、私思わず怒っちゃうところだったけど、次にまた気をつけてくれればいいし、初対面で怒っちゃうのは流石に私も気がひけるからね。次からは反省してちゃんと直すんだよ？」

「は、はい……………」

「美波さんのが怖い……………」

「……………蘭子ちゃん。ちよつとこつち、来ようか。」

「ひっ!?？」

「あつ……………」

「大丈夫大丈夫！少しだけお話するだけ。お話を、ね。」

—— やつぱり雷は、落ちた。南無三。

「ごめんなさいでした。」

新田さんと神崎がお話を終え、お花摘みから帰還したのであろうアナスタシアとみりあちゃんも引き連れ帰ってくると、神崎が新田さんに向かってポソポソと何度も謝っていた。目が虚ろだ。新田さんはニコニコしている。当事者2人以外は全員ドン引きしてた。怖い。

「いいんだよ。次から気を付けてね……………」とこころで比企谷君。」

「はははいなんでしょう？」

「途中で抜けて悪いんだけど、蘭子ちゃんと2人でプロデューサーを待っていてくれないかな？一緒に最後まででって思ってたんだけど、プロデューサーさんが戻って来るのが予想より遅くて。私達これから外せない用事があるんだ。」

「え、今の状態の神崎と2人ですか？目が死んでてちよつと怖いんで

すけど。」

「同じ死んだ目同士いいんじゃない?」

「……なんかもう俺の扱い雑になってませんか? まあそれはそれとして、部外者をアイドルと2人きりにしていいんすかね? しかも男の。」
「雑だとか思うのは気のせいだよ。あと君はもうこの会社の社員だしょ? ……それにさ? アイドルに勝手に手を出したら、比企谷君。どうなるかは、わかるよね?」

「あっはい。」

こっわこの人こっわ。なんでそんな微笑む笑顔でそんな冷たい声出せるの? こっわ。

「因みに用事ってのは、聞いても?」

「ああ。うん。私とアーニヤちゃんは今度の仕事に臨時で付き添ってくれるプロデューサーさんとのミーティングで、みりあちゃんと智絵里ちゃんは……確かインタビューのお仕事だった?」

「そうだよーっ!」

新田さんの確認に元気よくそれを肯定するみりあちゃん。後ろでは緒方もこくこくと何度も頷いている。

「なるほど。そしたらわかりました。もう少しだけ待ってみます。」

「うん。ほんとにごめんね? よろしくお願い。」

「はい。なんていうか、何もせずにこれを言うのは少し無責任な気がします。その、頑張ってきてください。」

「うん! ありがとう! それじゃ!」

「頑張り、ます!」

「さよう、なら。えへへ……。」

「はーい! みりあもお仕事がんばるねー!」

4人は口々にそう言うのと、こちらに向かって手を振りながら廊下を歩いて行った。やっぱりアナスタシエルはかわいい。あと語呂もいい。アナスタシエル。全員がいなくなるのを確認してから、またプロジェクトルームに入り、そこにあった椅子にどっさり……とはいかず、ちよこんと座った。や、一応初めて入った部屋だからなんとなく居心地が、ね?

しかし、今一緒にいるのは虚ろな目をして何やらブツブツ呟いている神崎だけ。もちろん会話に発展するどころかお互いに声を掛けることすらできず、たらたらと時間が流れていく。

「……………暇だから窓のシミでも数えてみようか」 「あつ、あの……………」

俺がなんだと返すと、神崎はえとあのとまごについてから、なにかを決した様にキツとこちらを向き、こう言った。

「ひ、比企谷さん。…………わ、私のこと、覚えてますか…………？」

「は？」

しまった返し方が悪かった。この目でこういうリアクションとると殆どの奴らが怯えるんだった。マズいな。怖がらせたかもしれない。

「ひうつ……………えと、その、こ、コミケ！1年前のコミケに比企谷さん行きましたよね……………」

「ごめ…………え、まあ夏コミは去年行ったけど、なんでそんなことをお前が知ってんの？」

もともと芯が強いのか、それともアイドル業の賜物か。予想外にすぐ立ち上がった神崎は、去年のコミケに行ったか、とかいうストーリー並みに怪しさMAXの謎確認の後、困惑気味の俺の答えにほっと満足すると、次の瞬間、とんでもないセリフをぶちまけて来た。

「人間誰でもどっかしら変なところはあんだよ。だから自分の好きなことくらい、曲げずに素直に好きって言えればいいんじゃない？知らないけど。まあ少なくとも俺は、こんな自分が大好きだけだな。」

「なんで知ってんの…………？」

そう。このセリフは皆さんお察しの通り、俺のセリフだと思われる。確かにそんなことを去年材木座の付き添いで行ったコミケのどこかで言つて、帰ってからベッドで恒例のイベントを済ませた覚えがある。コミケでの材木座の反応をからかって寝るまでなんとか凌いでたっけ。だが、思い出せない。なんでこいつが知っているのか。俺はなんであんなことを言っていたのか。

「えと、その、私に言ってくれましたよね？今の。」

……………あ。

あの時コミケで迷子になってた子供がいて、そいつに言った。筈。もしかしたら、このセリフを知っていて、しかも言われたってことは、あの時の子供、なんだろうか。だとしたら、確か最後に名前を言った気がする。覚えておいてくださいと。いつかまた会いに行くから、と。そんなことも言っていたっけ。確か、名前は……

「ま、まさか、お前……………」

『神崎蘭子です！あ、お、お礼、今度、絶対します！』

「……………あ。」

思いついたのは、あの時の光景。焼けつく様な日差しと熱気の下、顔を真っ赤に火照らせながら、確かに、あの少女はそう言っていた。

「あの時の……………神崎、蘭子……………」

呆然と、そう放った言葉に、神崎は——

「……………はい。お久しぶりです。比企谷さん。」

嬉しそうにはにかんで、そう答えた。

番外編

シンデレラ・ストーリー ————— 薄荷 —————

ひゅうひゅうと、風を切る音が聞こえる。少しぬるめの5月の空気が肌に触れるのを感じながら跨るのは、彼が前に免許を取った2人乗りカブの座席。抱きついていて彼の背中中は、服越しでも優しい温かさを感じた。カブはエンジンの音を鳴らしながら、夜の東京を進んでいく。

今日はシンデレラガール総選挙—————346のアイドル総選挙だった。アタシは誰よりも期待しながら、そして、それと同じくらい、不安を抱えながら、この日に臨んだ。誰よりも努力した。あの舞台に立てるくらいの気概を持てる様に。自信もつけた。勝つのはアタシだ。シンデレラ 姫になるのは、アタシだと、決意を秘めて、臨んだ。

結果は—————2位だった。

喜ぶべきなんだろう。190人の中の2位だ。勉強やスポーツみたいに努力だけである程度までできるわけじゃ無い。自身のスペックやキャラ、取り巻く環境やコネ。果ては運や才能まで。いろんな要素が複雑に絡み合う。そんな過酷な戦いだ。その中での、2位。もつと嬉しいが、べきなんだろう。誇るべきなんだろう。そう簡単に取れる順位じゃないのはわかってる。だから、みんなにはお祝いされた。おめでとう、と。凄い、と。でも、でも、アタシは、この順位を素直に喜ぶ事が、出来なかった。

この湧き出た感情を、アタシはうまく隠せただろうか？みんなには、嬉しそうな、それでいて少し悔しそうな、そんな顔を作って応えた。未央には、不敵な笑みなんてものを貼っつけて、次は負けない、なんてのたまった。気づかれて無いか、心配だけど……大丈夫。レッスンの中で演技の練習もしていたし、バレてない、筈。

「あ……」

そんなことを考えていたからだろうか。少し、ほんの少しだけ、彼の背中を強く抱きしめていたことに気づく。はっとして、気づかれな

い様に祈りながら、アタシは急いで、けれどゆつくりと、腕の力を抜いた。目の前に、赤信号が見えてきて、彼はカブの速度を落とす。ここで何も動作が無ければ、きつと気づかれてないだろう。

10秒。20秒。彼からの動作は無い。

——30秒。赤信号が青に変わった。カブにまたエンジンがかけられる。加速しながら流れていく景色。街灯の光が線を引きながらアタシの目に届く。よかった。気づかれ、なかった。

アタシは今、どんな顔をしてるんだろう。わからない。から、顔を。今のアタシの顔を、彼にだけは、見られないように、しなきゃ。

そんなアタシを、アタシは酷く惨めに思えて、堪らずアタシは、彼の背中に顔を埋めた。

しばらくして、周りから聞こえてくる走行音があまり聞こえなくなってきた。彼の背に顔を埋めていて見えないが、きつと大通りから外れ、アタシの家のある住宅街に入ってしまっただろう。

——少しして、ふと違和感。長すぎる。いつもならそろそろ家に着いている時間だ。しかし、カブのエンジンは未だ運動を止める気配が無い。多少の疑念を抱きながら数分が経過したところで、ようやくカブが減速し始めた。エンジンの鳴るテンポがだんだんと遅くなっていく。やがて、カブのエンジン音が消え、少しだけ前につんのめる。漸く家に着いたようだ。彼に出来る限り悟られないように、顔を作ってから、彼の背中から体を離す。

「——え……。」

顔を上げると、そこにアタシの家は見えなかった。薄暗くも、辺りを白く照らす街灯。数種類のカラフルな遊具に、3〜5メートルくらいの高さのある木々。遊びやすい様に平に慣らされ、軽く砂を敷かれた広場。手前端っこの砂場には、今日どこかの子供が作ったのか、砂の山が立ち、麓にはトンネルが掘られていた。ここには小さい、本当に小さい頃に何度か来た記憶がある。小さな敷地の中にいくつもの

遊具が詰められたこの場所は、あの頃の私にとって、とても不思議で、楽しい場所だった。とても懐かしい、小さい頃は少なかった、外でできた、楽しい思い出の場所。

「公園……？」

そう。ここはアタシの家の近くの公園だった。

「ん？すまん。言ったんだが、聞こえてなかったか？ちよつと休憩したくてな。少しだけ、付き合ってくれ。」

なんて言いながら、彼は先に公園に入っていく。そんな彼を、アタシは慌てて返事をして追いかけた。

「ほれ。」

「ん。ありがと。」

彼からジューズを受け取り、近くのベンチに座り、アタシは、かしゅつと小気味いい音を鳴らして缶のプルタブを開ける。

「隣、失礼するぞ。」

そう言つて、彼はアタシの隣にどっかりと座る。仕事の疲れからか、ベンチの背もたれにだらんと体を預けて缶コーヒーを開ける。「ここにもマツ缶がねえ。やつぱどこにも無いなあ。今度本格的に探そうかなあ。」なんて少しだけ不貞腐れた様に呟く彼を見て、思わず苦笑してしまう。

「またマツ缶探しするの？」

「ん、ああ。めんどいが、俺には死活問題だからな。何が何でも見つけてやる。」

「ふふっ。なにそれ。」

そういえば、彼だいたい休憩時間に見つけた時はマツ缶飲んでるけど、身体大丈夫なのかな？……まあ、毎日糖質たっぷりポテトジュースを飲んでるアタシが言えることじゃないね。

「おいやめろ。笑うんじゃない。俺がバカやつてるみたいじゃねえか。」

「いややってるじゃん。買い置きしてるんだからそれ持って行って飲めばいいんじゃないの?」

「……お前、天才か?」

「いやいやいや。」

自然と会話が弾んでいく。やっぱり彼は話しやすい。アタシ達アイドル相手にここまで会話を弾ませられるんだったら、もうぼっちじゃないんじゃないだろうか。

しばらく話をする、ふいに聞き慣れたメロディが流れてくる。アタシのスマホの着信音だ。彼に断ってから電源をつけてアプリを開くと、お母さんからメッセージがあった。どうやら帰ってくるのが遅くて心配していたらしい。そういえば、帰り際に今から帰るとメッセージを送ってから送っていなかった。連絡不足に少し反省しながら、今彼と近くの公園にいることを伝えようと、すぐに既読がついた。数秒後、〃お楽しみに……d(´´)〃と返信が来た。多分今日はそういうことではないんだけど、まあいいか。

「誰からだったんだ?」

「お母さんから。連絡するの忘れてて、心配されちゃった。」

「そりゃ悪いことしちゃったな……。なら、そろそろ戻らないとか。」

「あ、いや、お母さんはお楽しみにって言ってたよ。」

「なにを言ってんだお前の母ちゃんは。」

「あはは……。」

思わず2人で苦笑する。うちのお母さん、基本的に優しくいい人なんだけども……。

「なあ加蓮。ちよつと話し変わるけど、いいか?」

「え?うん。」

彼はあつちで言えなかったからな、と少しだけ、バツが悪そうに前置きをして、言った。

「総選挙2位、おめでとう。加蓮。今回も惜しかったが、次はお前が一番有利だ。この調子で行けば、シンデレラガールになることは可能だ。だから、これからも、その、一緒に頑張っていくぞ。」

「っ……。」

彼からの祝福の言葉。嬉しくなる筈の優しい言葉。でも、それはアタシの胸に鋭く突き刺さる。胸のあたりがじんわりと、しかし強く痛む。今日だけは聞きたくなかった。彼の優しさに、触れたくなかった。

「……うん！悔しいけど、まだ次があるよね！これからも、よろしくね！」

無理矢理に作り笑顔を貼り付ける。でも、きっとアタシは彼を騙せてないんだろう。だってほら、やっぱり彼は少し困った様に目をそらした。もしかしたら、最初から気づいていたのかもしれない。きっと今も、アタシなんかを励ます方法を探してくれているんだろう。彼はそういう人だ。ぼっちで、人をよく見てて、そして何より、誰よりも、優しい人。彼のその優しさに性懲りもなく頼ろうとしてしまう。そんな自分が、どうしようもなく嫌になる。

「じ、じゃあそろそろ時間だし、アタシかえ……」
「加蓮。」

話を切り上げようとしたアタシの声は、アタシを呼ぶ彼の声に、かき消された。

「……何？」

彼は少しだけ躊躇った後、意を決した様にこちらを向く。

「その、すまん……。」

そう言うと、彼はアタシの方に手を出す。それに思わず身構えて、ギョツと目を瞑る。

ぼん。

「……………え？」

何かの温かさと少し柔い感触を頭上に感じる。あ、あれ？あ、アタシ今何されてる？な、なな、なにこれえ!!？

「え？あ、えうう……。」

自分が今一体何をされているかわかってしまつて、一瞬でキャパオーバーを起こしてしまう。頭上に感じる感触は、彼の大きな手の平だ。優しく動かされるそれは、とても心地よい。

まあ、要は頭を撫でられてるのだ。アタシの好きな人に。

こんなことは初めてで、そんな状況で冷静さを保ってられる筈も無く、アタシは顔を赤色爆発させる。これで顔を赤くしない人がいたら教えて欲しい。

恥ずかしい。恥ずかしすぎる。撫でられた心地よさとか一瞬で忘れてしまうくらい。

でも、どうしてだろう。僅かに、僅かにだけど、心の奥に温かさを感じる。それがなぜか、とても安心する。

2人揃って暫く沈黙する。その間にも、アタシの顔はどんどん熱くなつていく。

「……その、だな。」

流石に小っ恥ずかしい気まずい沈黙に耐えかねたのか、珍しく彼から口を開く。

「今日のお前を見てたらなんか妹を思い出してな。どうしても抑えられなかった。すまん。」

「う、ううん！大丈夫！ちょっとだけ恥ずかしいけど、全然気にしてないから！」

「じゃあ、もう少し、いいか？」
「う、うん……。」

意外にも、彼は撫でる手を止めなかった。それは、人との過度な接触を忌避する彼にしてはとても珍しくて、アタシは驚いてしまう。でもなんでか、もう少しだけ、この感覚を感じていたい。と、思ってしまう。

でも、これ以上は、いけない。ここで我慢をしなかったら、アタシは、また彼に寄りかかってしまう。彼の期待に応えられなかったアタシには、そんな権利は無いんだ。

しかし、そんな思考とは裏腹に、アタシの身体は、彼から離れられなかった。彼の手の温かさを、優しさを、もつと感じていたいと思ってしまう。

そうして何も言えないまま、10秒。すると彼は、おもむろに口を開いた。

「……俺はお前の家族でもプロデューサーでも無い。ただのバイト

だ。正直お前が今回の総選挙にどんだけ想いを掛けていたのかは俺にはわからないし、わかるなんて言うのは傲慢だと思う。」

「え……。」

「けど、俺はお前がレッスルームで遅くまで練習してたことを知ってる。靴底がすり減るまで踊ってたことも、喉が枯れそうになるまで歌ってたことも。普段の生活にも気を使って自分を磨いてたことも、辛い時にも無理して仕事してたことも。全部見てきた。こんなことやってんだ。お前が誰よりも無理して努力してきたことは誰でもわかる。」

「なん……で……。」

「俺は努力が嫌いだ。今迄どんなに努力をしても、ほとんどそれが成功したことが無かった。友達を作ろうとしても、帰ってきたのは忌避と嘲笑だけ。家族とも上手くやろうとして、結局家から追い出された。努力なんてしても、無駄だと思ってた。」

「けど、俺は夢に向かって後先構わず突っ走るお前らを、眩しいと思った。お前の無理した努力が、その、なんっーか、その、綺麗に思えた。」

「あた……し……。」

「トラプリはさ、全員、自分の感情を溜め込みすぎだと思っただよ。それは俺もだし、今時そういうやつらの方が一般的だが。」

「別に誰彼構わず感情をぶつけろって訳じゃない。そんなことできないのはぼっちの俺が一番わかってる。俺は仕事の中にアイドルのメンタルケアが入ってたんだ。だから、その……。」

「難しい、とは思う。けど、嫌なことがあつたら、辛いことがあつたら、俺を頼ってくれ。迷惑だなんて思わねえし、お前の沈んだ顔は………あんま見たくねえ。」

彼のその優しすぎる言葉は、アタシの胸を打ち、感情を抑えきれなくするには、十分なものだった。

「いやあ。まさかハチ君があんなこと言ってくれるなんてね！」

家までの帰り道。彼の嫌いなトマトよろしく、顔を真っ赤にしながら無言を貫く彼をからかう。

「お前の無理した努力が、綺麗に思えた。」

「うぐっ!?!?」

「お前の沈んだ顔は、見たくねえ。」

「……殺してください……。」

「あはは! 殺してあげない!」

「はあ……。鬱だ。死のう。」

「ホントに死なないですよ?一緒に頑張るんでしょ?」

「……わーってるよ。」

彼と投げ合う会話は軽い。それもこれも、全部彼のおかげだ。本当に、彼に出会えて、よかった。彼を好きになって、よかった。

そうして歩いていく内に、アタシの家が見えてくる。

「……着いたな。」

「……うん。」

家のインターホンを鳴らし、家の前の門をくぐる。

「……ねえ。ハチ君。」

「なんだ?」

「今日はありがとう。本当に。また助けられちゃった。」

「……なんのことだか。」

「だからさ、ハチ君。いや、比企谷八幡君。」

しっかりと、彼を見据える。今度は、ちゃんと、不敵な笑みを浮かべながら。

「アタシ、絶対シンデレラになる。なってみせる!だからこれからも、一緒に頑張ってね!!?」

「……おう。」

彼も、程なく返事を返してくれる。それが堪らなく嬉しくて、思わず顔が綻ぶ。

「じゃあ、バイバイ!」

「ああ。じゃーな。」

玄関のドアを開けて、家に入る。目の前にはお母さんが立ってい

た。

「加蓮、嬉しそうね？八幡君といい事あった？」

「……うん！とつても！」

第8回シンデレラガール総選挙。結果は2位。惜しくも、シンデレラガールにはなれなかった。悔しくないなんて言ったら嘘になる。でも。

絶対に、シンデレラガールにアタシはなるんだ。どんなに辛くても、何年かかっても。彼との約束は守らないといけないから。

アタシのシンデレラストーリーは、まだ続く。彼と一緒に居てくれる時まで。ずっと。続いていく。

「絶対に、シンデレラガールになるからね！ハチ君！」